

昭和45年度

都倫研紀要

——新学習指導要領の具体化——

第9集

東京都高等学校「倫理・社会」研究会



はじめに

— 倫理・社会は教育の総観的立場より —

会長 徳久鉄郎

この序文を執筆しているころは、新しい教職に就く志望の人々の何人かにお目にかかっている時期であった。倫理・社会科の教師を求める学校側の要望は、一口に言って見識のある完成した教育家を求めている、要点は教科における完璧さと生徒指導面での信頼性であった。私の役目は、そうした各都内高校長からの依頼に対して、お逢いした何人かの学生さんを推せんする役であって、その趣旨をじゅんじゅんと話しているうちに、輝いている若い眼の光が曇ってくるのを見てとって、こちらも悲しい想いがこみあげてくるのを禁じ得なかった。

倫理・社会科の宿命であろうか。教師そのものが、重い経験と学殖を必要とする職業であることが前提であることのそのうえに、この科目は、初めから、その職に就く方々に学校経営の一翼の大事な任務が負わされるよう運命づけられている。それだけに、求める方も真剣に、その人を選ぶのであろう。

人間形成を口にする理想主義はだの情熱家も、対話をかわしているうちに、人間をつくることそれのみを目的とする教育観では理論がかたわであることに気付き初めるのである。クラスの集団形成による集団理論を実地に展開してわが教育理想を実現してみようと考えて、その構想を描き初めると現実の個性との矛盾に逢着して、再構成を考えざるを得なくなる。学校長の経営に参画して、学校運営に腕をふるう大局に立った教育観をとうとうと述べる人もあるが、大てい足もとがぐらついていることをみすかされているのに気

付いてとどのつまりは気持が萎縮してすくんでしまう。

倫理・社会科の先生は、社会科の教諭としての知的教育の研鑽に加えて、人間形成の実践への意欲と実行力、学校教育や経営への概括的な総観的認識が見透されていないと、目がねには叶わないらしい。しかも、行動は小児の如く謙虚に、見識は太陽の如く赫いて、足どりは歌を口ずさむ程に軽やかで
.....。

このようなことを考えてきた時、ふと、私は、われわれ研究会の研究の最近の傾向の中に、総観的な見方が次第に欠如してきているのではないかと気付いた。学習指導要領の改訂を機会に、せんさくを累ねて行く各部門の研究もさることながら、後期中等教育の全体的立場から総観的検討を、たえずくり返しつつ、この科目の位置づけと足場を固めてゆきたいものと思う。

1971.2.13

目 次

はじめに	会長 徳久 鉄郎	1
分科会参加者名簿		6
I 研究主題と研究体制	研究責任者 中村新吉・伊藤駿二郎	8
II 研究主題の具体化（本紀要執筆要領）	（ 同 ）	11
III 本年度の研究活動の概要		14
IV 分科会研究活動経過報告		18
第1分科会		18
第2分科会		20
第3分科会		22
第4分科会		26
第1特別分科会		28
第2特別分科会		40
V 年間学習指導計画案		44
<現代と人間>		44
<思想の源流>		47
<現代と思想>		53
<日本の思想>		57

① 第1分科会 <現代と人間>

1. 人間・社会・文化	小川 一郎	63
2. 情報化社会におけるマスコミについて	杉原 安	68
3. 大衆社会の諸問題 ―問題点の指摘を中心として―	中村 佑二	72
4. 巨大な組織と新中間層	塚田 哲男	75
5. 家族 ―その人間関係を中心に―	小川 輝之	79
6. 職業 ―職場の人間関係・職業倫理―	高橋 定夫	83
7. 地域 ―新しいコミュニティー	伊藤駿二郎	87
8. 人間形成の条件 ―パーソナリティの形成―	松崎 千秋	91
9. 学校 ―その人間関係	木村 正雄	95
10. 現代の課題	御厨 良一	99

② 第2分科会 <思想の源流>

1. 思想のめばえ〔1〕ギリシアにおける思想のめばえ	小笠原悦郎	103
2. 〔2〕インドにおける思想のめばえ	増田 信	107
3. 倫理と実践〔1〕ギリシアの思想	秋山 明	111
4. 〔2〕儒学思想	菊地 堯	115
5. 世界宗教の成立〔1〕キリスト教の考え方	渡辺 梧郎	122
6. 〔2〕仏教の考え方	海野 省治	128
7. 東洋と西洋〔1〕東洋人の考え方の特徴	原 崇雄	132

③ 第3分科会 <現代と思想>

- | | |
|---------------------------|---------------|
| 1. 功利主義 | 井原 茂幸 137 |
| 2. 人生における宗教の意味 | コンブリ=ガエタノ 141 |
| 3. 人間的自由の確立 一人為的な教会からの離反 | 高野啓一郎 145 |
| 4. 近代市民社会とカントの思索 | 中村 新吉 150 |
| 5. 原典からみたデカルト | 村松悌二郎 155 |
| 6. 実存主義 —キルケゴール— | 渡辺 浩 159 |
| 7. 仮説と調和の真理観 —ジェームズ・デューイ— | 永上 肆朗 163 |

④ 第4分科会 <日本の思想>

- | | |
|-------------------------|-----------|
| 1. 古代日本人のころ | 吉沢 正晶 169 |
| 2. 和を以て貴しと為す —聖徳太子— | 浅香 育弘 173 |
| 3. 親鸞と他力 —親鸞— | 金井 肇 177 |
| 4. 生きるとは学ぶことである —道元— | 細谷 齊 181 |
| 5. 近代日本の萌芽 —佐久間象山・西郷隆盛— | 吉沢 正晶 186 |
| 6. 新しい人間像を求めて —福沢諭吉— | 佐藤 哲男 190 |
| 7. 支えなき自己の不安 —夏目漱石— | 佐々木誠明 194 |

事務局より	198
あとがき	199
東京都高等学校「倫理・社会」研究会規約	200

分科会参加者名簿

(○印は分科会世話人)

〔第1分科会 現代と人間〕 計 13名

○木村 正雄	(都立葛飾野高)	高橋 定夫	(都立板橋高)
○小川 輝之	(都立向島工高)	塚田 哲男	(都立一橋高)
伊藤駿二郎	(都立忍岡高)	岩尾 央生	(都立城南高)
小川 一郎	(都立狹窪高)	杉原 安	(都立東高)
山口 俊治	(都立練馬高)	御厨 良一	(都立赤城台高)
松崎 千秋	(都立城北高)	岡本 武男	(都立富士高)
中村 佑二	(都立井草高)		

〔第2分科会 思想の源流〕 計 15名

○小笠原悦郎	(日大二高)	原 崇雄	(都立羽田工高(定))
○渡辺 梧郎	(都立文京高(定))	鷺見 美雄	(都立駒場高(定))
秋山 明	(都立葛飾野高)	増田 信	(都立井草高)
船本 治義	(都立大崎高)	菊地 堯	(都立国分寺高)
泉谷 まさ	(都立向丘高(定))	齊藤 弘	(教育大付風高)
山川 重雄	(都立三田高(定))	中島 清	(都立青山高)
海野 省治	(都立江戸川高)	佐藤 勇夫	(都立秋川高)
坂本 清治	(都立白鷗高)		

〔第3分科会 現代と思想〕 計 23名

○渡辺 浩	(都立忍岡高)	佐藤 勲	(都立桜町高)
○永上 肆郎	(都立四谷商高)	古沢 英樹	(都立南多摩高(定))
石森 勇	(都立竹早高)	沼田 俊一	(都立府中高)
剣持田世子	(都立一橋高(定))	高野啓一郎	(洗足学園第一高)
村松悌二郎	(都立東村山高)	宮部 純	(都立京橋高(定))
井原 茂幸	(都立小平高)	ガエタノ・コンブリ	(育英工専)
寺島 甲祐	(都立福生高)	甲谷 徹	(都立向島商高)

中村 新吉 (都立大山高) 小平 茂 (都立両国高)
尾崎 充昭 (都立南高) 田中 正彦 (都立小石川高)
長竿 明 (都立久留米高) 吉原 広明 (都立羽田高(定))
川瀬 吉郎 (都立玉川高) 伊藤 政貞 (都立北高)
鮎沢 真澄 (都立駒場高)

〔第4分科会 日本の思想〕 計 10名

○細谷 斉 (都立墨田川高) 森下 恵三 (女子美大付高)
○吉沢 正晶 (都立羽田工高) 金井 肇 (都立豊多摩高)
勝田 泰次 (都立本所高) 佐々木政明 (都立鷺宮高)
佐藤 哲男 (都立江戸川高) 浅香 育弘 (都立葛飾商高)
佐々木利幸 (都立本所工高) 渡辺 武 (都立戸山高)

〔第1特別分科会 改訂指導要領問題〕 計 32名 (勤務校名省略)

○御厨 良一 川瀬 吉郎 細谷 斉 木村 正雄 高橋 定夫
○佐々木正明 勝田 泰次 中村 新吉 甲谷 徹 金井 肇
○菜地 堯 村松悌二郎 佐藤 勲 原 崇雄 鷺見 美雄
佐藤 哲男 渡辺 梧郎 石森 勇 佐々木利幸 籠原 幸一
井原 茂幸 小川 一郎 小笠原悦郎 寺島 甲祐
高野啓一郎 G.コンプリ 塚田 哲男 渡辺 浩
秋山 明 中村 佑二 沼田 俊一 船本 治義

〔第2特別分科会 高校生問題〕 計 38名 (勤務校名略)

○小川 一郎 勝田 泰次 森下 恵三 佐々木利幸 中島 清
○中村 佑二 石森 勇 井原 茂幸 村松悌二郎 寺島 甲祐
佐藤 哲男 船本 治義 渡辺 浩 泉谷 まさ 増田 信
剣持田世子 伊藤駿二郎 秋山 明 小川 輝之 岡本 武男
高野啓一郎 田中 正彦 塚田 哲男 高橋 定夫 渡辺 武
木村 正雄 御厨 良一 沢田洋太郎 佐々木誠明
細谷 斉 金井 肇 G.コンプリ 宮郷 純
原 崇雄 中村 新吉 永上 肆郎 沼田 俊一

I 研究主題と研究体制

研究部長 中村 新吉氏

研究副部長 伊藤駿二郎氏

〔本年度の研究主題〕

「新学習指導要領をどう具体化するか」

〔研究主題の主旨〕

本会は、創立以来、「倫理・社会」教育の充実と発展のために、授業の実際の立場から一貫して自主的な研究をすすめてきた。本会の研究活動の歴史は、「倫理・社会」という全く新しい科目が高校教育へ定着するとともに歩みをともにしてきたといえよう。「倫理・社会」教育が行われて8年、その定着化とともに指導内容の改善・目標や性格の再検討の必要性が論議されはじめた。このいわば「倫理・社会」教育の反省期と機を一にするかのように、このたび高等学校教育課程が全面的に再編成されるにいたった。今回の再編成にあたっては、特に「倫理・社会」の改訂の方向が重視されたといわれる。倫社という科目がこれまでの日本の中等教育の歴史においてかつてなかった新しい性格のものであり、かつ高校教育の中でいわば少年期を迎えた段階で、倫社教育の正しい育成と発展のために再検討されたことは適切なことといわねばならない。また現代の人類社会が、産業化・機械化・大衆化・都市化などに代表される状況に当面するに及んで、いよいよそれらのおよぼす結果へ反省を加え、それらのもつ意味を問いたださざるを得なくなってきた。現代人は、現代の社会・学問・文化・政治などが人間の存在とどうかかわり、どういう意味をもっているかについて鋭く問いかけをしはじめた。豊かな経済の時代とともにやがて「心の時代」が鼓動しはじめているように思われる。

こうした状況の中で、倫社の学習指導要領も、これまでの教育実践や理論研究をふまえた、反省的批判にたつて、全面的に再構成されたと考えられる。現行の「人間性の理解」「人生観・世界観」「現代社会の特質と人間関係」が「現代と人間」「人生観・世界観」に集約的に再編され、そこにもられる

べき指導内容も新しい感覚からの発想が期待されよう。すでに現場においては、数年来、「人間性の理解」と「現代社会の特質と人間関係」とを有機的に総合しながら、指導内容を展開することが試みられたり、また、指導内容の研究においては、指導内容の深化・精選・集約化がさまざまな授業方法との関連によって研究されてきた。これまで授業の実際を通して研究されてきた方向が、今回、改訂された学習指導要領に基本的に反映されているとみなしてよいだろう。

本年度の研究主題は、新学習指導要領が発表されたのを機会に、＜新指導要領をどう具体化するか＞という統一テーマに決定された。新しい精神の盛り込まれた新しい指導要領を主体的にうけとめて、今や具体化の一歩がふみ出された。この具体化が、とりもなおさず、授業の実際の改善と工夫とをうながすのに役立つであろう。とくに、新学習指導要領の解説が発表されたり、それに準じた新教科書が世に出る前に、研究されたということは本会があくまでも自主的な研究態度でもって活動していることよりの証左である。

研究主題の具体化においては、生徒の学習能力や興味・関心、教室の実際の展開や質問（応答）に即したものである必要がある、ということに留意し、また学習指導内容のねらい（目標）が明確になるには評価はどうあったらよいかという問題を解決してゆく手がかりをさぐるよう配慮した。また、新しいあるべき倫社の方向をさぐるために、研究活動がいたずらに抽象的な議論に終始したり、原理的問題にのみ走らないよう、あくまでも実際の授業における倫社指導の新しい方途をさぐる手がかりとなるように、主題の具体化がなされることをはかった。

なお、本年度は研究主題に即して研究活動を進めるとともに、「改訂学習指導要領中間発表案（倫理・社会）」についても研究し、それに対して意見要望・代案を関係当局に提出する作業をも行った。また、高校教育のなかで倫社教育を考えてゆくためには、生徒の実態に応じた倫社教育を確立してゆく必要があるという観点から、倫社の教師として高校生をどうとらえ、どのように高校生に対応していったらよいか、その方途をさぐる研究活動をも行

った。昨年あたりから、高校教育のありかたをめぐって、授業の内容やねらい、評価のしかた、生徒心得のあり方が、多くの高校で生徒から問題提起された。そのなかで明らかになってきた高校生の意識や発想あるいは行動様式には、われわれが真剣に取り組まなければならない多くの問題が内在しているように考えられる。会員の多数の要望と研究活動によって、本年度の研究主題がはばひろい生徒理解にたつて実際の教室のなかから、具体化されたことを会員諸氏とともに喜びたい。また、わたくしたちのこの研究が教育の現場でよりよい倫社教育・授業実践のために努力されている全国の先生方の参考になれば幸いである。

〔研究組織〕

改訂学習指導要領の内容をいくつかのパートにわけて、分科会を組織する。会員はそれぞれ希望によって、つぎの4分科会のいずれかに所属する。

第1分科会 「現代と人間」 第2分科会 「思想の源流」
第3分科会 「現代と思想」 第4分科会 「日本の思想」

各分科会は、新指導要領のその目標や内容の取り扱いなどの部分をじゅうぶんに検討し、全体的構想や精神を考慮しながら新学習指導内容を具体化する。同時に、各分科会は、分科会の研究領域の年間指導計画案をいくつか作成する。

第1特別分科会 「改訂学習指導要領中間案の検討」

第2特別分科会 「高校生問題をどうとらえるか」

今年度は4分科会のほかに、上記2特別分科会を設置した。第1特別分科会は、改訂学習指導要領の中間発表案に対する卒直な批判や要望あるいは具体的提案をまとめ、「全倫研」要望書として関係当局に提出するための作業活動をする。第2特別分科会は、昨年来から全倫研・都倫研の役員会や研究大会（例会）などにおいて、昨今の高校生の意識や発想あるいは行動について早急に研究する必要があるという大勢の要望にもとづいて、設置された。なお、両分科会とも、客観的情勢の緊急性から、幹事会の承認をへて、5月から研究活動をはじめた。

Ⅱ 研究主題の具体化

①執筆上の基本的姿勢

- 1) 研究主題が新学習指導要領を具体化する方途をさぐることにあるが、本研究会の自主的な研究活動をふまえて、それぞれの執筆者は独創的視点にたって新しい内容を自由に執筆する。
- 2) とくに<学習内容>の具体的展開および<設問とねらい>は従来の執筆態度をまったく改めて書くことになる。すなわち、学ぶ高校生の資質を考慮して、わかりやすく、表現ゆたかに展開する。理論的研究を、ここで解説するものではなく、教科書スタイルで書く。とくに読む力、考える力、表現する力をつける学習過程が行えるように、<設問とねらい>を工夫する。
- 3) したがってまず、現行の学習指導内容以外にもられるべきだと考えられるもの、また一方で内容の精選の上から集約されたり、考えさせる上からフクラマしたりするものを選び出してゆく作業が必要である。端的に言えばこれまでの教科書や資料集などの定形化されたものを否定し、それらにとらわれないで、大胆に、論社を飛び立たせようとする工夫と意欲をもって執筆しあうことになる。そういう心意気にたって直接に教室で使うことができるように執筆する。

②本文の構成

- ④ 新学習指導要領をもとにしながら、年間学習指導計画案を具体化する。
(分科会割当て)
 - 1) 新指導要領では、個性のあふれるさまざまな視点からの多様な指導計画や指導内容があってしかるべきだし、あるのが望まれるという方向がでている。実際一本にしぼることには多くの困難と無理がともなうので、3～4通り位の案を作成する。
 - 2) 世話人が中心となって、各分科会の担当範囲を作成する。

3) もるべき主な事項＝月、分野、分野配当時数、章内容、章配当時数、
節内容、節配当時数、節のおもな指導事項

4) 具体案を作成する上で、たとえば、第1分科会では、「現代社会の特質」と「青年と人間形成」のいずれを先にするか、二つの章の指導内容の融合あるいは独立をどうするか、その他指導内容の全体構成などによって、さまざまなものが考えられよう。

第2、3、4分科会では、先哲の基本的考え方中心、七つのものの考え方の基本的問題中心、思想の歴史的展開中心、先哲の著作および言行とを中心、などさまざまな立場からの取りあげかたが考えられる。

5) 執筆は別紙用紙、世話人がとりまとめをする。

④ 年間学習指導計画案をもとにしながら、学習指導内容を具体化する。
(個人割当て)

1) 各人の割当枚数は割付原稿用紙(34字×27字行)918字で4枚キツカリとする。どうしても枚数を追加する必要がある際は世話人との話し合いでおこなってください。

2) 期限－46年1月10日世話人必着。

3) 割付原稿用紙を使用する。

4) 構成はつぎの順序とする。()の中におよその枚数わりふりを参考としてあげたが、〈指導内容の具体的展開〉が最も多くスペースをとることになる。

〈重点的ねらい〉	($\frac{1}{2}$ 枚位)	◎各項目のなかで、さらに
〈指導内容の具体的展開〉	(2枚位)	項目をわけるときは1.2.
〈設問とそのねらい〉	(1枚位)	3・・・とする。1.2.3.・・・
〈発展的まとめ〉	($\frac{1}{2}$ 枚位)	のなかで、さらに項目をわけるときは①②③・・・とする。

5) 各項目の執筆の視点

○〈重点的ねらい〉 とくに、このテーマを設定した理由、を取りあげ

方、との関連で明らかにする。つぎに、このテーマ(人物、思想・基本的考え方・問題・著作・主題など)をここではどのような視点から取りあげ、なにを学習させたいか、とくに重点とするねらいを明らかにする。

- 《指導内容の具体的展開》 ここは、前の《重点的ねらい》とちがって、直接に生徒が読んで考えたり調べたり表現したりしてゆけるように、つまり教科書スタイル(～である調で統一)で執筆する。とくに現行の教科書が解説的であるとか、総花的であるとかさまざまな批判がある。そういう批判をふまえて、平易な表現でありながら、内容ゆたかで深く考えさせるにはどう叙述したらよいか、各執筆者は教科書の著者になったつもりで執筆いただくところである。

枚数に制限があり、あれもこれも書きたいところをおさえて、内容の取り上げ方の視点をいくつか定めてわたくしはこういう内容を思い教えてみたいというところをフクラまして執筆することになる。

そして本文中に下線①②③……の註をふして、考えさせたり表現させたりする箇所を指摘し、つぎの《設問とねらい》につなげるようにする。こことつぎの項とが本研究の主眼である。

- 《設問とそのねらい》 設問でなにをどう考えさせるか、を中心に、ここでは苦心していただくことになる。これまでの教科書などの研究問題あるいは問題集などの設問を研究し、評価のあり方とも関連づけて、学習のねらいがはっきりするような設問が具体的に設定されることになる。

設問は設問1 設問2……となる。設問のねらいはそれぞれの設問文のあとにふす。

- 《発展的まとめ》 ここでは他の指導分野との関連づけを明らかにして、全体的にここにおけるテーマがどう位置づけられるか、あるいは他の問題や思想、人物さらに現代人とのかかわりはどうか、といったことに答えようとするものである。まとめがこれで終りではなく、問

題はこれからどう深められ、どういう問題に進んでゆくものであるか
ということで出発点としてのまとめという姿勢で執筆する。

(中村新吉記)

Ⅱ 本年度の研究活動の概要

〈 第1回 〉 6月18日(木) 総会・研究発表大会 都教育会館

1) 総会

挨拶	会長	徳久 鉄郎氏
決算の承認	都立東村山高	村松悌二郎氏
事業計画・予算・新役員の選出	都立豊多摩高	金井 肇氏
研究事業計画・研究主題の提案承認	都立大山高	中村 新吉氏

2) 研究発表

「昭和44年度の研究の総括報告」	都立小平高	井原 茂幸氏
「マンガを通してみた高校生の意識」	都立府中高	沼田 俊一氏

3) 講演

「今日から明日への展望—情報化社会の進展と人間存在の問題」

前学習院大学教授 清水幾太郎氏

〈 第2回 〉 7月2日(木) 第1回例会 都立鷺宮高校

1) 研究発表

「改訂学習指導要領(倫理・社会)への批判と提言」

都立石神井高 門脇 一生氏

2) 研究討議

「改訂学習指導要領の問題点をめぐって」

都立赤城台高 御厨 良一氏

都立鷺宮高 佐々木誠明氏

都立国分寺高 菊地 堯氏

3) 講演

「現代と人間」

東京医科歯科大学名誉教授

島崎 敏樹氏

4) 分科会

分科会の結成、世話人の選出、分科会年間研究計画の決定

◀ 第3回 ▶ 9月25日(金) 第2回例会 都立江戸川高

1) 公開授業

「エピクロスについて」

都立江戸川高

海野 省治氏

2) 研究協議

授業について

3) 研究発表

「源流思想の取り扱いについて」

都立国分寺高

菊地 堯氏

4) 講演

「ギリシア人の世界と思想」

都立大学教授

戸塚 七郎氏

◀ 第4回 ▶ 10月29日(木) 第3回例会 都立忍岡高

1) 公開授業

「キルケゴールの思想」

都立忍岡高

渡辺 浩氏

2) 研究発表

「現代思想としての存在論」

洗足第一学園高

高野啓一郎氏

3) 講演

「現代社会と人間の疎外」

東京大学助教授

谷島喬四郎氏

4) 世話人会・幹事会

紀要9集執筆要領の検討・作成、各分科会研究活動状況報告

◀ 第5回 ▶ 2月1日(月) 第4回例会 都立墨田川高

1) 公開授業

「道元」

都立墨田川高

細谷 齊氏

2) 研究協議

授業について

3) 研究発表

「ゲーテと東洋への道」

都立羽田工高

吉沢 正晶氏

4) 講演

「日本人の関係性 — 心理と思想」 国学院大学講師 戸田 義雄氏

5) 幹事会

来年度の役員・事務局人事、分科会・研究大会等報告

なお〈第6回〉(第5回例会)は、第1分科会の担当により、都立井草高等学校において開催する予定である。公開授業は同校中村佑二氏の予定であるが、講演ならびに講師、研究発表者は未定である。これまで研究活動が2月をもって終り、次年度の6月総会まで事実上、研究例会がなかったものを改善し、本年度は5月の〈第5回例会〉をもって研究活動を終りとすることになる。このことは今年度の年間研究事業計画として総会において承認されたものである。

以上、本年度における当研究会の研究活動の概要を記したが、各分科会の研究経過の詳細については以下の分科会研究経過報告にゆずることとする。

今年度は、すでに述べたように、「倫理・社会」の新しい方向がうち出され、さまざまな論議をよんだ。当研究会は分科会ごとに活発に研究活動をすすめ、いち早く会員各自の経験と知見によって、自主的に新指導内容の具体化を試みえたことはよろこびにたえない。執筆要領においても述べたように、本紀要は、会員諸氏が、独創的視点にたつて新しい内容を自由に展開し、これまでの定形化されたものから一歩でも二歩でも脱却しようという心意気でもって、工夫をくわえ、心魂を傾けて集大成されたものである。

とりわけ、教室で生徒と実際にとり組んでゆく学習過程がここに展開されている。その展開の仕方はさまざまな扱いかたにたつてなされ、設問(発問)によって、どのようなことを生徒に考えさせ、どのようにして学習内容のねらいを評価と関連づけるかという、これまで研究の手のまわらなかったところを掘り起した。そういう意味で、本紀要は教室で、なにを、どう展開し、どのような点をどのように問題とし、どう考えさせてゆくかという日常の指導上の研究伴侶ともなり得るものと期待する。

また、特別分科会活動によって、現代の高校生問題に精力的に取り組み、その成果を「高校生をどうとらえるか」（第1集）を小冊子にまとめ、高校生理解にたっちはばひろい教育研究ができたことも、本年度の研究活動の特色といえよう。さらに、改訂学習指導要領中間発表案の検討、それへの意見要望・代案を研究するに当っては、世話人のアイデアによって初の合宿作業まで行って全倫研大会に提案しえたことは、倫社教育への旺盛する意欲を示すほかのなにものでもない。

本紀要が研究活動の成果として、ここまでまとめ上げられえたことは、各分科会が世話人を中心に精力的に活動し、加えて新しい抱負をもって登場してきた新人が研究活動に新風をそそいだことに負うていよう。今や倫社教育がいわば“ルネサンス”をはじめなければならない重大な時が始まっていると思われる。その時に当って、時代と人間への新しい感覚による探究を失わずに、根源的なところへ思索し、根源的なところから現実を照射する態度を、われわれ自身がたえず掘りおこし合うならば、やがて、倫社教育の理念がさまざまに教室で花開く時が期待されよう。

（研究部長 中村新吉記）

Ⅳ 分科会研究活動経過報告

第1分科会

＜現代と人間＞

世話人 都立向島工高校 小川 輝之
" " 都立葛飾野高校 木村 正雄

今年度は、新しい指導要領の発表された年でもあったため、例年以上に活発な討論が行なわれた。特に、本分科会では、現指導要領の「人間性の理解」と「現代社会の人間関係」が「現代と人間」ということに精選され、より密度の高い、生徒に密着した指導内容へと研究の方向が向けられていった。

第1回 7月2日（木） 於 鷺宮高校

- 初会合のため、なごやかに自己紹介が行なわれ、世話人を選出した。
- 研究の進め方について話し合った結果、毎月1回会合をもち、「現代と人間」について研究討論を進め、その成果を公開研究授業とともに発表することとなった。そして、次回まで指導内容を研究してくることとなった。

第2回 9月25日（金） 於 江戸川高校

- 「現代と人間」の指導内容について活発な討論が行なわれ、第1章 人間と社会（人間とは何か、現代社会の特質、社会集団と人間関係） 第2章 青年と人間形成（青年期の意義と特徴、現代と青年の課題）と決定し、さらに細かい指導内容を研究することになった。

第3回 10月22日（木） 於 荻窪高校

- 次のような研究発表、活発な討論が行なわれ、研究内容に深まりをみせた。
- 杉原先生（東高）は、「家族」をとりあげ、（1）家族の構成、形態については核家族化による人間関係のプラス・マイナス面があり（交通災害や離婚等）、法的側面より意識的側面をとりあげるべきだ。（2）家庭生活も外部からの情報によって人間関係の結びつきがこわれやすいとし、対話の必要を説き、特に、地域の実態（共稼ぎ、パートタイマー等）にそくして行なわれるべきだと。（3）老人問題にもふれ（4）家族機能の単純化によって地域社

会とのかかわりあい必然にでてくるのではないか(公害など市民運動等)。伊藤先生(忍岡高)は、(1)学校生活と人間関係についてHR、クラブ活動の人間関係を真に民主的にその機能を果たすために、また、教師と生徒の人間関係の根本を、さらに、異性との交友も男女の人間関係のあり方とじて根本的に考えさせるべきだとし、(2)地域社会と人間関係についても新しいコミュニティの創造が必要だと。(3)職業集団と人間関係については、職業の倫理を中心とし、ヒューマンリレーションばかりでなく、職場で対立をのりこえていく側面も必要ではないか、と。

○小川先生(荻窪高)は、青年期と人間形成について(1)青年期の位置づけとして特に、法的に青少年法や選挙権の面から、社会的には経済的能力や慣習などからも考えるべきだとし、青年期の特徴としては、政治的教養や行動の面からも考えるべきだと。(2)現代と青年については、価値観の変化を中心に、生きがいの問題などを課題として考えさせるべきだ、と。

○木村先生(葛飾野高)は、人間とは何か、について、行動科学の成果をもとにとりあげて、全人的なものへと発展させるべきだ、と。

これらについて活発な討論が行なわれ、大変突りのある研究会であった。

第4回 12月15日 (火) 於 葛飾野高

○いままでの研究の積みかさねから、さらに、指導内容の具体化を進めていくなかで、別記のような指導内容が考えられるとし、結局、三つぐらいの案にしぼられていった。特に、指導項目の配列や指導内容の取扱いかいについて熱い討論がかわされた。

○紀要9号の執筆分担を決定し、1月10日までに原稿をもちよることとなった。

○次回は、5月上旬ごろ、井草高で研究授業及び研究発表を行うことになった。

以上のように、第1分科会では会員諸氏の出席率も大変良好で、しかも夜おそくまで活発な討論がかわされた。その成果は、必ずや都倫研の大きな潮となってあらわれることを期待している。

(木村 記)

第2分科会

< 思想の源流 >

世話人 都立文京高 渡辺 梧郎

“ ” 私立日大二高 小笠原悦郎

わたくしたちの分科会は、秋山・船本両副会長先生をむかえ、また増田元事務局担当、それと対照的に、泉谷・山川・海野・原などの新進の諸先生をまじえての、バラエティーにとんだメンバー構成となりました。

新指導要領の改訂の趣旨を考へてみると、どこが魅力のあるパートか、これが分科会参加の尺度となるはずである。「思想の源流」は、比較的、その扱う思想家、その内容は具体的ではっきりしている。しかし、このようなりつきやすい反面、どのようなとりあげ方がのぞまれるか、この点になると、そこにむずかしさもないわけでもない。この点が、終始、共通の関心となり問題として、とりあげられた。

第2学期のはじめ、9月5日(土)に、都立文京高校で初会合をもった。この日、今後の研究活動方針の打ち合わせをやった。

問題点をあげておこう。

- (1) ギリシヤの思想をとりあげる際に、まず第1に従来とりあげられていた自然哲学者、ソフィストをどのような扱いとするべきか。第2にソクラテス・プラトン・アリストテレス、この3人の扱いをどのようにすべきか、ソクラテス1人で代表させ、プラトンとアリストテレスの必要なところをつけたすか、それとも、プラトンでまとめるべきか。第3に、ストア派とエピクロス派のとりあげ方をどうするか。

以上の点については、この方面で造詣が深い秋山副会長にご検討をねがうことになった。

- (2) 中国の思想をとりあげる際に、儒学の思想に対照的な道家の思想をどのように扱うべきか。
- (3) ギリシアの思想、キリスト教、仏教および儒学のこの4つをどのように組みあわせるか、である。たんに4つを並べるといふわけにはい

かないはず。東洋と西洋とにわかるか、それとも、宗教とそうでないものとのわかるか、まえの「現代と人間」とのあとをうけ、また、つぎの「現代と思想」との結びつきを考慮したら、そこになにか工夫ができないか。

以上の課題をもって、それぞれ考え、次回、菊地堯先生（都立国分寺高）の発表をねがうことにする。

菊地先生の発表をかね、9月25日（日）、第2分科会担当の月例会が、都立江戸川高校でひらかれた。先生は、源流思想の性格を、時間を超えてわれわれに投げかける問題を取りあげることで、指導内容の選択と構成の視点とされた。そしてつぎのように具体的に示めされた。

(イ)「思想の普遍性」の理解 (ロ)「哲学へのいざない」 (ハ)「価値観確立への発心」 (ニ)「宗教と人生の問題」 (ホ)「その他」などにふれ、さらに「ギリシアの思想」の私案として、哲学的な考え方（智への愛）を中心の展開例をだされた。このような扱いのほかに、キリスト教と仏教を「人生における宗教の意味」として、また儒学を「倫理的価値と人格形成」としてとりあげる指導計画のあることも示唆された。

12月20日 日大二高において、執筆要項にしたがった具体的な分担を行なった。共通理解として、「思想の源流」は、哲学的・倫理的に、思想の入門編であるから、やさしさを試みようとした。そして、第1節に、「思想のめばえ」として、西洋と東洋の哲学的思索の訓練部分をおき、第4節に「東洋人と西洋人の考え方」をおいて、第2には「倫理と実践」第3に「世界宗教の成立」とし 全体の筋を通すことになった<目次を参照されたい>。

「思想のめばえ」では、哲学の誕生、哲学の意味 哲学的なものの考え方をとりあげ、「現代と人間」と「人生観・世界観」とのつながりを考慮し、しかも導入としての役わりもはたすこと、さいごに、西洋的なものの考え方と東洋的なものの考え方という視点で、東洋と西洋との比較を、日本人としていつも考えて学習をすすめるよう配慮することでまとめ、分担した。

（小笠原記）

第3分科会

< 現代と思想 >

世話人 都立忍岡高校 渡辺 浩

“ ” 都立四谷商高校 永上 肆朗

7月2日鷺宮高における都倫研第1回例会後第三分科会は表記の15名を以て構成され、「改訂指導要領“現代と思想”の領域の具体化」の問題をテーマにその具体案について夏休み中に検討することを会員各自の課題とした。

<第1回例会> 9月10日(木) 於 都立四谷商業高校 8名

宮部女史(京橋高)の研究発表。定時制の生徒の生々しい生活体験の紹介
厳しい状況に生きる特異な生徒の指導面で“年代の倫社”はどうあるべき
という大きな問題提起がなされた。次に高野氏(洗足一)は(1)改訂指導要
領の主眼点をどのように理解したらいいか。(2)その問題点と課題(3)把え
方の提案の三項目に亘り詳細に要点を分析された。これをめぐっての討論で
倫社指導にみられる二つの傾向が指摘され〔(教養的・思想史的)と(主体
的側面)〕後者に重点を措くべきことに一致した。最後に沼田氏(府中高)
によって高野案の骨子をふまえた具体案が提示された。(本文後出)これ
は知、情、意の上に立って対照的に項目を設定した独創的なものであり、討
論白熱、殊に科・芸・宗・倫・哲の関係について参加者間にも見解の相違が
められた。(人生観と世界観・存在と当為・弁証法の解釈・理性と信仰など
をめぐって)内容設定・分類の仕方に工夫の余地がある(ex.宗と科)。

次回は更に対案をつくってくるということで散会した。

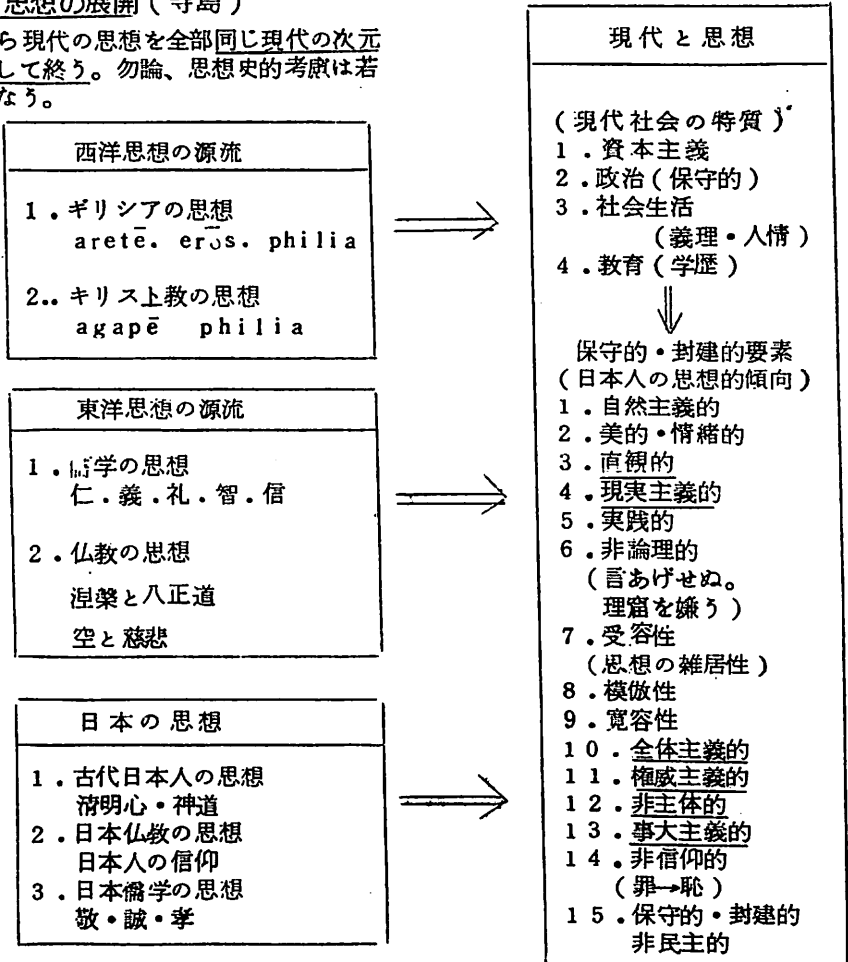
<第2回例会> 10月2日(金) 於 都立四谷商業高校 6名

前回の討議にもとづき今回は先づ永上(四谷商)が具体案を発表した。これ
は「基本的なものの考え方」を軸としながらⅠ近代的人間観とⅡ現在的人間
観とに分けそれぞれにⅠについては(1)哲学的・倫理的(2)科学的(3)宗教
芸術、Ⅱにはいわゆる従来の現代思想を配置し、各項目に留意点(伝統と革
新、多様化と調和・・・)を列举し、且つ歴史的展開も考慮したものであった。
次に寺島氏(福生高)による具体案の発表。以下概要を特記したい。

まず、近代から現代の思想を全部同じ現代の次元におろして終い、勿論、思想史的考慮も若干おこなうこととし、西洋の思想の源流、東洋思想の源流、日本の思想を学んだ後で「現代と思想」を取り扱うが、その視点としてA現代社会の特質4項目及びB日本人の思想的諸傾向（直観的、現実主義的、権威主義的、非主体的など15項目）が指摘され、これをふまえて概要下記のプランが示された。

現代と思想の展開（寺島）

近代から現代の思想を全部同じ現代の次元におろして終う。勿論、思想史的考慮は若干おこなう。



第2章 現代と思想

第1節 人間性の尊重

1. ルネサンスと宗教改革—人間性の自覚、信仰と良心
2. 現代のヒューマニズム—正義と非暴力、平和と人類愛
3. 日本の平和主義—内村鑑三・戦後の平和主義

第2節 科学的・合理的精神

1. 合理主義—デカルト
2. 経験主義—ベーコン
3. 観念論—カント・ヘーゲル
4. 唯物論—フォイエルバッハ
5. 西田哲学

第3節 市民社会の倫理

1. 民主主義の倫理—人権・社会契約説（ロック，ルソー）
自由と責任（カント，ヘーゲル）
日本の民主主義（福沢，吉野，日本国憲法）
2. 資本主義の精神—利潤と労働（カルビン，アダム・スミス）
功利主義
3. 社会主義の精神—剰余価値と労働（マルクス）
唯物史観
資本主義 社会民主主義
4. 日本の社会主義—明治、昭和初期、戦後

第4節 現代における人間の生き方

1. 主体性の確立—実存の追求（キルケゴール、ハイデッガー）
空海
2. 真・善・美・聖の追究—人生観・世界観の確立、徳の体得
3. 日本人の思想的課題—正義・友愛・自由・平等・ヒューマニズム
国民としての自覚、フロンティア精神

寺島案は分野にこだわらず広く自由にとり上げている総合案であり、これをめぐって活潑に意見が交わされた。

この間10月29日（木）都倫研第3回例会に際して第二分科会を代表して高野氏（洗足学園第一）によって“現代思想としての存在論”の研究発表ならびに渡辺浩氏（忍岡高）によってキルケゴールの研究公開授業が行われた。

<第3回例会> 11月14日（土） 於 都立忍岡高 4名

研究経過の集約と反省を行い、執筆分担の話し合いを進めた。

具体案の作成にはさまざまなケースが考えられるところからかなり独創性で充実した発表がなされ、大変有意義であった。たゞ日程を検討しつつ会を重ねていくという点で都合がつかず充分の意見交流と調整が行なわれたと言い難い。

（永上記）

第4分科会

＜日本の思想＞

世話人 都立墨田川高校 細谷 齊

” ” 都立羽田工高校 吉沢 正晶

第4分科会＜日本の思想＞の研究参加者は9名であったが、当初予定した程の研究活動は出来なかった。参加者の勤務上の都合や会場の地のりなどなかなか思う様にならなかったためである。

第1回研究会 9月3日(木)於墨田川高校 参加者 浅香 佐藤 細谷 吉沢 日本の思想の中でどのような指導をしているか各人の実践を出し合い、それを基にして分科会としての研究方針について話し合った。日本の思想の中で必要不可欠な人物や思想、さらに強調すべき事柄や人物を検討した。その結果吉沢先生の原案をモデルとして、主に原典引用の指導法を考えることに決定した。

第2回研究会 10月22日(木)於江戸川高校 参加者 佐々木 佐藤 細谷 実質的な討議は出来なかった。

第3回研究会 11月27日(火)於墨田川高校 参加者 佐々木 佐藤 細谷 時間的に無くなってしまい実質的な討議は出来なかった。

第4回研究会 12月10日(木)於墨田川高校 参加者 金井 佐藤 細谷 吉沢 久しぶりに4名が集り、第一回の時の方針に従い、執筆上の留意点や方法について話し合い、執筆項目を分担した。日本の思想は今回の指導要領の改訂で独立の章となり、その位置づけが重くなったが、その指導内容については困難な点が多い。その理由は一言で言えば、日本の思想の場合には体系的客観的な教材内容が未だ確立していないからではないかと思う。このような事からも指導要領で、今後の思想的課題を日本の思想の終りの部分で考えさせるというのは実にむずかしい問題であるように思われる。今後の研究に待ちたい。あまり活潑な交流と研究は出来ないままに終わってしまったが、遠い所をお出かけ下さった先生方には厚くお礼を申し上げる次第です。今後ともお互いに一生懸命学んで行きたいと思います。 (細谷記)

先哲の著作および言行中心の年間指導計画の一案

これはつぎのような視点から、その特色を出すようにした一例である。むしろのこと、とりあげる人物や著作については、これに限らず取捨選択の種々の例が考えられるはずである。

1. 日本古来の考え方がどんなものかを知るために、文献批判的用意は持ちながら、「古事記」の日本神話をとりあげ、他の民族の原始的思想とも比較しながら、人間のものの考え方の基本的問題を扱う。
2. 聖徳太子における儒仏思想の受容と理解、その日本文化創業の基本思想を扱う。
3. 日本人の仏教の受け入れ方やその人と人生観という視点に立って、仏教思想家のおもな人物をとりあげる。
4. 儒学と日本人のこころとどうとけあったであろうか、日本人の儒学のうけとめ方をおもな思想家についてみる。
5. 国学の意味と、日本人の民族的心情を理解させるようにする。
6. 近代日本の萌芽 一 幕末維新の先覚的思想家をとりあげる。従来一般にはあまりとりあげられなかったところであろうが、日本の思想史の上でも大きな転換期の鋭敏な先覚的思想として、また全人格体験の表現が残されているものとして、「倫理・社会」の目標に照らして重要な人物の例をとりあげる。
7. 近代日本の先覚者として、明治以後の代表的思想家をとりあげるに当たっては、従来一般にとりあげられてきた西田幾多郎の難解な哲学理論にかえて、高校生読書の読書と理解力と現代に生きる問題意識の上で、むしろ適切と思われる夏目漱石のエゴイズム克服の思想遍歴をその著作の中に見るようにとりあげることを考えた。

以上従来の学習内容についての反省に立ち、また目標に照らして、いくつかの特色を出した指導内容の事例をあげてみた。第1、第2節、および第6、第7節にその特色があろう。

(吉沢記)

第一特別分科会

〈改訂学習指導要領〉

世話人 都立鶯宮高校 佐々木誠明

“ ” 都立国分寺高校 菊地 堯

“ ” 都立赤城台高校 御厨 良一

〈分科会の目的〉

学習指導要領の中間発表に対する全倫研及び都倫研の意見書の原案作成という目的をもって、都倫研内に設立されたものである。この目的に従って、われわれは次のような方針をとった。..

1. われわれがさきに提出した学習指導要領改訂についての要望書がどれほどとりいれられているか、両者を比較検討することによって、あらたに要望する事項はないか。
2. 中間発表についてジャーナリズムやいわゆる進歩的といわれている人たちは、どのような批判をしているか。その批判についての検討を充分行う必要があるはしないか。
3. 文部省側の意見を、直接に聞く必要があるはしないか。

以上のような研究の方針にもとづいて、分科会で充分の討論をしたうえで、原案を作成したい。その原案も単なる批判に終始するのではなく、対案を提出することこそ、肝要であると話しあった。ともすれば、「あとはどうでもなれ」式の単なる批判のための批判、無責任な批判が世上多いからである。

〈研究・原案作成の経過〉

5月29日 都立東村山高校の幹事会で、有志が集合し、以上のような基本方針を話し合う。大会前ではあるが、時間的余裕がないから、早速研究活動にはいることを幹事会で了承。都倫研幹事全員に案内状を送付。

5月13日 都立赤城台高校で、文部省の梶哲夫先生を招いて、研究会を開く。

- 主として中間発表についての文部省側の見解を聞く。教科書出版の会社も三社オブザーバーとして出席。参会者30名。
- 6月18日 都倫研昭和45年度総会が、都立教育会館で開かる。これまでの研究経過と今後の研究方針を説明、了解を得る。さらに多くの先生方の分科会参加をよびかける。
- 7月2日 都立鷺宮高校にて、島崎敏樹先生を招いて研究会。また、都立石神井高校の門脇先生に、倫社の自主編成等について、研究発表を聞く。世話人で準備したジャーナリズムの、学習指導要領中間発表についての批判資料（朝日、毎日、日経、赤旗の各紙）を配布。同時に、角川書店の社会科通信No.25所載の批判（福岡県立三池高校の津田広利氏、和光高校の丸木政臣氏、朝日新聞の深代惇郎氏）を要約した資料をも配布。資料についての説明・討論は時間がなかったため省略、次回の研究会までに各自研究してくるよう宿題とする。
- 7月18日 杉並区教育委員会の秋川荘に、午後4時参集。参集する者11名。
～ 19日 4時～6時まで研究会。トリケンなる名前の通り、普通なら大いに飲むはずだが、ビール二人に一本程度。心を残しながら、7時～10時まで討論。疲れ果てたあとでの酒、また、格別なもの。二階全室かり切りのため、12時ごろまで大いに交歓を密にする。
- 19日 5時ごろ起床。川を散歩。すがすがしい朝の空気に全員意気軒昂。朝食後、研究会を続行。10時まで。討論の経過を御厨が文章化することに決定。11時ごろから近くの癒乳洞を見学。12時帰路につく。
- 7月30日 都立井草高校で、原案の検討。最終原案を中村新吉先生がガリを切ることに決定。この夜、中村先生徹夜されたとのこと。
- 7月31日 都立豊多摩高校で、全倫研準備のための幹事会、この席上、要望書を都倫研として了承を得る。準備のための仕事多し。夜、全倫研の幹事会開かる。ここで要望書を説明。明日の全倫研大会に提

案のとりあつかい等話しあう。

- 8月2日 意見書を提案し説明。会場での討論活潑。討論内容を整理し、その文章化をおこなうことを、全倫研幹事会に一任との了承を得る。
昼休みに全倫研幹事会を開き、意見の調整をはかる。
- 8月3日 都立井草高校にて、昨日の意見書を文章化し、印刷終了。
- 8月4日 会長・事務局長文部省へ。意見書を提出。

さて、以上のような研究経過をへて完成したのが、次にあげる要望書である。忙しい、また、きびしい研究および要望書作成作業であったが、改訂学習指導要領の最終案をみれば、われわれの意見が大はばにとりいれられたことがわかる。われわれの努力も決して無駄ではなかったことを思う。

文部省の人の話によれば、きちんと対案まで作って意見書が提案されたのは二つだけとのこと、反対のための反対は何も実を結ぶものでないことを、われわれはこの意見書作成によって再認識した次第である。

(文責 御厨良一)

<第1 特別分科会活動成果>

昭和45年8月2日

殿

全国高等学校「倫理・社会」研究会
会長 徳久鉄郎

高等学校

学習指導要領案（「倫理・社会」）に関する意見

本研究会は、さきに「学習指導要領の改訂についての要望書」（昭和43年12月27日付）を提出したが、おおはばにとりいれられたことは、喜びにたえない。

さて、本研究会は、学習指導要領案が発表されるや、直ちに東京都高等学校「倫理・社会」研究会における特別分科会の度重なる慎重な研究討議をもとに原案を作成し、さらにその案を過日開かれた全国高等学校「倫理・社会」研究会の昭和45年度大会において充分討議したのち、下記のような意見をまとめたわけである。

前要望書と同様、われわれ現場で「倫理・社会」を担当する者の意見を、反映するよう切にお願いしたい。

①「倫理・社会」の目標について

ア 目標(1)を次のように改めるよう希望する。

(1)人間尊重の精神に基づいて、人間や社会についての思索を深め、倫理的価値に関する理解力や判断力を養い、

民主的・平和的な国家・社会の形成者として、自己の人格形成(真理を愛する自主的な人格の確立をめざし、)の資質を養う。)成に努める態度を養う。 ..
(削除)

<理由>

- ① 目標の(1)は、「倫理・社会」という科目全体の目標と解するが、「倫理・社会」の中心課題は、生徒自らが自主的な人格を確立していくことができるよう指導することにある、と考えられる。しかしその際、とくに真理の普遍性・絶対性を自覚し、真理に対し謙虚な人間の育成がのぞまれるのは当然である。したがって「真理を愛する自主的な人格の確立」ということを「倫理・社会」の基本的目標として位置づけたい。
- ② 戦後の教育の中で、民主的國家・社会を支える個人の資質を形成するといふ側面がとかく疎遠にされてきたという反省のあることを、われわれも認めるものであるが、中間発表の文案によれば、國家・社会の形成者としての側面が強調されているように思われる。人格形成の目的は、自主的な個人としての人格の確立と、民主的・平和的な國家・社会の形成者としての資質の形成の双方におかれるべきである。

イ 目標(2)を次のように改めるよう希望する。

(2)現代社会について客観的に認識させるとともに、そこにおける人間関係のあり方について考えさせ、青年期における自己形成(人間や社会)

の課題を自覚させる。

<理由>

目標(2)は、内容の(1)現代と人間 の単元目標と理解したい。とすれば、人間関係のみをここで取扱うのではなく現代社会の問題、そこにおける人間の生き方、人間関係等もふくまれてくるからである。

ウ 目標(4)を次のように改めるよう希望する。

(4) 現代に生きる人間として、常に自己の考え方や行為を反省し、批判していく自主的態度や、倫理的実践を高めようとする自主的態度や、自己の考え方や行為を反省する自律的態度や、自覚的な態度とそれらに必要な能力を養う。倫理的実践を高めようとする自主的な態度とそれらに必要な能力を養う。)

<理由>

情報化社会に生きる人間として何よりも必要とされる能力は、厳しい自己省察をすると同時に、新しい状況に対応しうる創造性であろう。いわば、常に創造的・開発的に自己を高めようとする態度と能力が必要であるとわれわれは考える。

② 内容について

(1) 現代と人間について、次のように希望する。

現代社会の特質についての認識を深めるとともに、その中に生き
(社会生活の諸問題を考えさ

る青年としての人間形成の課題を自覚させる。
せるとともに、)

現代社会と人間関係

組織の巨大化、中間層の拡大、マスコミュニケーションなど、大衆
(新中間層)

社会・情報化社会における諸問題^Yを取り扱いながら、家族や職域
(と人間生活とのかかわりを考え
社会、その他の社会集団における人間関係のあり方について考えさ
させ、その中で、具体的な集団生活(家族・職域社会、その他の社
会集団)における人間関係のあり方について考えさせる。

<理由>

現代社会の特質という事実を事実として理解させるだけにとどまらず、現代社会の中に位置づけられた人間について、もっと深く考えさせる必要がある。

また、大衆社会・情報化社会における中間層とは、新中間層をさすものであるから、はっきりと「新中間層の拡大」という用語を使うべきである。

なお、以上のことと関連して、<3.内容の取り扱い(1)内容の(1)の取り扱いに当っては、次の事項に配慮する必要がある>という箇所の最初に、アとして、次の文を入れるように提案したい。従って、中間発表表のアはイに、またイはウに、ウはエと記号を順にさげるようにしたい。

- ◎ ア 現代社会の特質についての指導においては、単に事実の認識にとどまることなく、それらが現代の人間生活にどうかかわっている

るかを、自己の問題として考えさせるように配慮すること。

<理由>

すでに上にのべたように、現代社会の特質として、人間疎外、公害問題などの事実があるのは言うまでもない。しかし、これらの現象を自分の問題としてとらえ、その中における人格形成とのつながりを考えさせていくことが大切であろう。

(2) 人生観・世界観について

ア 中間発表には、思想の源流・現代と思想・日本の思想とならべられているが、これを思想の源流・日本の思想・現代と思想とならべかえ、それぞれの内容を次のように改めるよう希望する。

思想の源流

日本の思想

日本人の古来の考え方や、外来思想を受容し発展させたものを取り扱い、このような日本の伝統思想についての理解を深め、るとともに、今後の思想的課題について考えさせる。

(させる。)

削除

現代と思想

人間の尊重、合理的精神、民主社会の倫理などの観点から、現代に生きる世界のおもな思想を選んで取り扱い、現代の思

(現代にお

想の諸問題について理解させる。

ける思想上の諸問題について解させ、日本人として今後の思

想的課題について考えさせる。)

<理由>

中間発表のような順序と扱い方では、日本の思想が孤立して、ままたあつかいになっている感じがしないでもない。さらに、日本人として現代における思想上の諸問題と今後の課題を考え、これらを解決していこうとする態度は、日本の伝統思想と、現代に生きる東西の思想をふまえたうえで、うちだされるべきであろう。

イ<ものの考え方の基本的問題についての理解>について七項目があげられている。そのうちの二項目を削除し、さらに、数語を付加するよう希望する。

哲学的なものの考え方(智への愛、など)

倫理的価値と人格形成(善と実践、など)

芸術と人生(美と崇高、など)

(削除)

人生における宗教の意味(永遠と信仰、など)

科学的なものの考え方(社会認識の方法、など)

個人と国家の関係(国民としての自覚、など)

(削除)

民主主義の倫理(自由と責任、
|
など)

(正義と平和、国民としての自覚)

<理由>

“芸術と人生(美と崇高、など)”というものの考え方も、「倫理・社会」の指導の一面としてはあろうが、さらに、内容の精選という立場にたてば、ことさらこのようなテーマをいれる必要を認めない。むしろ

<取扱いの配慮事項>として、この“芸術と人生”をふまえた考えた方がより現実的と考える。われわれがさきに提出した要望書（昭和43年12月27日付）の中にも、「感動のあふれた記述」「道徳的心情の啓発」「表現は易しく、しかも内容では青年に深い感動を与え、思索への情熱をかりたてるような記述」などとうたったのは、直接に“芸術と人生（美と崇高、など）”などの独立した項目として扱うという考え方ではなかった。

さらに、“個人と国家との関係”は、“民主主義の倫理”の中で考えるべきものであり、民主主義の倫理からはみ出た個人と国家との関係を考えさせることは、むしろ危険であろう。従って、“民主主義の倫理”という項風の中で、自由と責任、正義と平和、国民としての自覚などを取り扱うことが望ましいといえよう。

以上と関連して、<内容の(2)の取り扱いに当っては、次の事項に配慮する必要がある。>の、ア・イにつづいて、あらたにウとして、次の配慮事項をいれたい。

- ◎ ウ 以上のような学習方法の工夫や学習過程などの取り扱いには、美的・芸術的な観点からの指導を通して、生徒にいきいきした感動を与え、人間としての豊かな情操を養うよう配慮すること。

<理由>

上にのべたことにつきるが、内容(2)の配慮事項のアが学習方法、イが学習過程についてふれられているのをふまえ、学習指導要領案（「倫理・社会」）の中でとくに示されていない情操面の教育と指導についてここにふれておきたい。

③ 内容の取り扱い

この項については、すでに前項にのべたように、2箇所についての考慮を要望したが(◎印参照)、次の2項目についても考慮をお願いしたい。

ア (1)のイ~~一~~われわれの改訂要望をふまえれば、新しい項目を、アとして挿入することを要望したので、ウという項目になる。

イ 青年と人間形成についての指導においては、現代社会に生き(ウ)
る青年の立場から、Y切実で具体的な問題を取り上げながら自
(学校生活における人間関係など)
己の人間形成の課題について考えさせるようにすること。

<理由>

生徒の人間関係において、師弟関係、友人関係(異性関係を含む)を無視することはできない。学習指導要領案ではとくに示されていないが、友情・恋愛、さらに性の問題等についても、是非ともふれておく必要がある。

イ (3)について、次のように改めるよう希望する。

(3) 内容の(1)と(2)とは、この順序に取り扱うことが望ましい。また、特定の事項だけにかたよることなく、内容の全
(よらないように取り扱う
般にわたって取り扱うこと。
こと)

<理由>

＜内容の全般にわたって取り扱うこと＞という表現は、内容の精選という基本方針からみて誤解を生ずるおそれがある。この表現がなくとも、この留意事項の目的は充分にはたせよう。

つぎの各項は、全国高等学校「倫理・社会」研究会昭和45年度全国大会（昭和45年8月2日）の研究討議における会員の要望を理事会において確認し、この意見書に付記するものである。

付帯意見

1. この意見書7ページの理由においても述べたごとく、今回の改定においては、全体の精選・構造化がおもなねらいであると思われるので、今回の中間案に示されている以上に指導内容を詳述することはのぞましくない。
2. 3. 内容の取り扱いの4のイにもあるとおり、「社会や文化や人間の見方には異なったものがあることを考慮」する場合、「現代と人間」の領域において、文化や人間形成の原理的側面を内容に盛りこんでもらいたい。
3. 「ものの考え方の基本的問題」として示されている「芸術と人生」に関して、この意見書では、削除するよう望んでいるが、この点については、削除すべきでないとする積極的意見もあった。
4. 中間案においては、しばしば「形成」という語が使用されているが、「形成」という語の使用については、人間が技術的につくられるような印象を与えないよう配慮する必要がある。
5. 目標4において「倫理実践」という語が使われているが、この場合、その意味するところが不明確であると考えられるので、この語の使用については慎重な配慮がのぞまれる。

第1 特別分科会 < 高校生問題 >

世話人 都立井草高校 中村 佑二

都立荻窪高校 小川 一郎

I 『高校生問題』特別分科会設置のねらい

昨年度9月青山高校における紛争をきっかけとして、東京都においては、紛争が相つぎ、文化祭、定期テスト、卒業式は荒れに荒れた。生徒の激しい行動は、予想以上に大きな混乱をもたらした。急激な社会の変化による高校生の意識や行動の変化も、予想を越えるものがあり、教師がこれに対し正しい認識をもつことができなかつたことが、紛争の一因としてあげられよう。

倫社は、生徒の思考ともっとも直接的に取り組む科目であることは多言を要しない。高遠な先哲の思想を一方向的に教えることのみが倫社でなく、生徒の経験や生活とこれらをどうつないでいくかに、心を用いなければ倫社の成功はありえない。そのためには、平凡ではあるが、高校生をよく知ることが第一である。簡単にいえば、これが分科会設置の趣旨である。

倫社へ授業をふりかえてみると、生徒の心の中に沈澱しているドロドロしく位置づけることができず、生徒をして「倫社はうわっつらのきれいごとをやるにすぎない」とまで言わせている事実がある。どのように、生徒の思考に切り込み、先哲の思想との間に緊張をもたらすかは、言うはやすく難しいことである。

そこで、都倫研会員の毎日の教育実践を交流し、紛争の表面的な現象の奥底にひそむ意識を考察することは、倫社教育に携わるものももっともよくすることができるのだ、という自負のもとに、継続して研究してみようということになったのである。

Ⅱ 夏の全倫研大会までの目標と研究活動

第1回の会合は5月12日(火)都立荻窪高校で開催され、さきの幹事会で決定された世話人の井草高中村と荻窪高小川の提案を中心に会は進められた。出席者は、10名を越え、都研からも中野目指導主事が参加され、貴重な資料をいただいた。次のような、研究スケジュールを組み出発した。

- ① 8月1日の全倫研大会に中間まとめとしてパンフレットにまとめ、報告し問題提起する。パンフレットは実費で頒布する。
- ② 会合は、さしあたり、6月1日(金)、6月20日(土)7月22日(水)の3回とする。
- ③ パンフレットの内容をどうまとめるか。

(1) 基本方針

高校紛争や現代高校生の意識や行動の奥にひそむものをさぐり、単なる紛争の対療法を発見するのではなく、教育現場の特色を生かし、本質的な解明をはかる。

(2) 研究方法

なにぶんにも期間が短いので、ケース・スタディを中心に、調査や座談会などにより、問題の所在を明らかにする。

(3) 内容

1. 実践例を収集する。どう取り組んだか(失敗例、成功例)
 - A 倫社教師としての実践
 - B IIR担任としての実践
 - C 教科外の実践
 - D 代表的な紛争校の実践
2. 高校生の意識や行動についての理論的考察(資料などにより研究)
3. 生徒の意識調査を行なう
4. 座談会を行ない、問題をほりさげ、課題を明らかにする。

第2回目の会合は予定通り6月1日(金)に行われ、代表的な紛争高である都立青山高校の中島清氏に実情を報告してもらい、そのあとで研究討議を行なった。中島氏は、青山高の場合は、紛争の原因は、学校内における教育問題からというよりは、最初から学校のわくを越えた問題が発端となっていたとし、また、生徒もリーダーの叫んでいる紛争の意義をじゅうぶん納得することができず、教育の本質を性急に求めるあまり、知識を軽視し、問いが図式的になる傾向を指摘し、これらの生徒をどのように指導するか、最初は

戸惑いを感じたと報告された。参加者から、質問が出され討議がなされた後、パンフレットについての内容の検討と執筆分担を行なった。

第3回目の会合は6月20日(土)同じ都立荻窪高校で行なわれ、座談会を行なった。これは、パンフレットに収録したのでご参照いただければ幸いである。概略述べると、紛争と高校生の意識、退廃現象にどう対処するか、授業の改革とその後、教育のモラル、市民社会と教育の場、指導の切り込み口はどこに、紛争の原点をかえりみる、などである。

なお、この会で、パンフレットの編集には、中村(井草)、小川(荻窪)の世話人と細谷(墨田川)、木村(葛飾野)が直接あたることになり、随時編集の実務を行なうことになった。

第4回目は、パンフレットができあがった7月22日(水)に行かない、これの取り扱いについて相談した。

今年度の夏の全倫研大会では、高校生問題のパネル・ディスカッションに中村(大山)、寺島(町田)、小川(荻窪)が参加し、研究をふまえて発言した。

▽ 9月以降の研究活動と目標

夏の大会に向けてパンフレットを出し、東京での経験を全国に問うことが第1の目標であったが、最初からの計画で、引続き研究活動を行なうことにしていたので、2学期に入り、活動を再開した。

再開第1回の会合は、11月16日(月)に行われ、次の活動基本方針を確認した。

(基本方針) 1学期までの研究において、主として紛争後、高校生はどうなっているか、高校生をどうとらえるか、を主題としたので、今回は高校教育の分野における具体的問題を取りあげ、いくつかに類型化し、第1集の研究成果をふまえて、研究を推進する。

その際、単に対症療法や管理的発想に基づく生徒対策でなく、「倫理・社会」の目標である自主的人間の育成を目指す研究とする。以上の成果を第2集の研究成果として何らかの方法で刊行する。

以上のような研究の基本方針を確認した上で、今後の研究の具体的方法について意見が、かわされた。

第2回目の会合は12月11日(金)に行ない、次のような討論と決定をした。主に、第2集の内容について話し合いが行われたが、次のとおりである。

① 調査を行なう。内容は生徒の価値意識についてのもので、一例をあげるとすると最近の傾向として花札やトランプを教室に持ちこむこと、教室の展示物などについて

② 生徒による座談会を行ない、自治活動のありかたを探る、テーマとし生徒が生徒会活動や自治活動について、どのように考えているかを知る手がかりとする。

③ 理論的考察

ア 生徒会指導の今後の方向

イ 学習意欲を失わせているものは何か

ウ 現代高校生の退廃とは何か

エ 現代高校生と価値観の多様化について

オ 自主的行動と恣意行動について

カ 現代高校教師論

キ 体験を通してみた文化祭の問題点と今後の方向

④ ケース・スタディ

○ 思いこみによる恣意的行動について

アナーキー、性、反戦、ガリ勉、流行、三無主義、政治、父親として教師などについて実践記録を書く。

以上について執筆分担を行なうとともに、柱ごとにいくつかの小グループで討議を進めていくことにし、現在進行中である。目標は、6月に予定されている都倫研の総会ならびに研究会においている。

経過をおうのに精一杯で、それぞれの会で行われた討議の内容をほとんど収録できなかったのは残念であるが、研究物を参照していただくことにご寛恕いただきたい。なお、研究は継続中なので、今後とも会員諸氏のご協力をお願いする次第である。

(小川記)

V 年間学習指導計画の展開

年間指導計画 A 案

< 現代と人間 >

はじめに (導入)		1	
分野	月	草 内 容	時数
現 代 と 人 間	4	第1章 人間形成と青年期	8
		1 人間とは何か (導入を含む)	2
		2 人間形成の条件	3
現 代 と 人 間	5	3 青年期の意義と特徴	3
		1 現代社会の特質	4
		2 社会集団と人間関係	4
現 代 と 人 間	6	3 現代と青年の課題	2
		おもな指導事項	人間と文化 欲求と知性 パーソナリティと青年期 自我のめざめ 孤独と友情
		おもな指導事項	大衆社会 マスコミの発達と情報化社会 組織の巨大化と中間層 社会病理と公害 核家族と人間関係 職業の倫理 職場の人間関係 新しいコミュニティの創造 学校における人間関係 異性との交友

青年の社会的経済的地位
不安と生きがい、
価値の探究

年間指導計画 B 案

< 現代と人間 >

はじめに (導入)						
分野	月	章 内 容	時数	節 内 容	時数	おもな指導事項
現 代 と 人 間	4	第1章 現代社会の特質	6	1 組織の巨大化と機械化	3	現代社会の状況 組織の巨大化 官僚制, 中間層 大衆社会, マスコミユニオン化・シフト。
	5	第2章 現代社会と人間関係	6	2 大衆社会と情報化社会への動き 3 現代社会の諸問題 1 社会集団と人間	1 1 3	余暇と消費, 情報化社会への動き 現代人の不安, われわれをとりまく問題 さまざまな集団, 社会関係 コミュニケーションの問題 現代の家族, 家族の人間関係 現代家族の問題 職業の社会的意義
	6	第3章 現代と青年	7	3 職場 1 青年期の特質	2 2	職場の人間関係, 人生と職業 自我のめざめ 青年期の心理的特徴

		2 青年と人間形成	2 人間形成の条件 人間形成への課題
		3 現代青年の課題	3 青年をとりまく状況 主体性回復の芽 人生観、世界観

年間指導計画の案

<現代と人間>

はじめに(導入)		1		
分野	月	回数	節 内 容	時数
現 代 と 人 間	4	19	第1節 人間・社会・文化	2
			第2節 現代社会の特質	4

おもな指導事項

人間とは何か
欲求と、知性の役割
社会、文化の意味

現代における人間の状況
テクノロジーの進行
組織の巨大化
新中間層の増大
マス・コミュニケーション
大衆社会の問題
情報化社会の問題

5		第3節 現代社会と人間関係	4	家族の問題 地域社会の問題 職場の問題 人間関係の倫理
6	第2章 青年と人間形成	第1節 青年期の意義と特徴	4	内面世界の発見 青年の不安 孤独と友情 人生における青年期の意味
7		第2節 現代と青年の課題	4	青年の当面する問題 理想と現実(社会の発見) 価値の探究 青年と自己形成

(基本的考え方) 中心の年間指導計画案

< 思想の源流 >

はじめに (導入)		1		おもな指導事項	
分野	月	章 内 容	時数	節 内 容	時数
思想の源流	2	第1章 哲学の誕生	2	第1節 ギリシアにおける思想のめばえ	1
					1
					2

1 思想とはなにか
思想の意味
思想を学ぶ意義

2 ギリシアにおける哲学のおこり
テオリア・フイロンファイア
理性の尊重

第2章 倫理と実践

2	第2節	インドにおける思想 のめばえ	1	1	インドにおける哲学 ウバニシアット 梵我一如 人間の自覚 自然哲学者とソフィスト よりよい生き方を求めて ソクラテスの無知の知 知行合一 ソクラテスの死 諸子百家 孔子の思想 仁と礼 学問の意味 実践の重視 道家の思想 老子の「道」 バラモン教 仏陀 四諦と八正道 実践の教え 仏教のひろまり 大乘と小乗仏教 ユダヤ教の思想 旧約聖書にみられる考え方 キリスト教の成立 イエスの考え方 アガペー (隣人愛)
4	第1節	ギリシアの思想	?	1	
	第2節	儒学の思想	:	2	
4	第1節	仏教の思想	2	2	
	第2節	キリスト教の思想	2	2	

第3章 超越者の自覚

				3	キリスト教の発展 パウロの考え アウグスチヌス トマス＝アケイナス
		西洋人の考え方と東洋人の考え方	1		
	第4章 西洋人の考え方と東洋人の考え方		1		
					認識論 死の問題 自然観 日本の思想学習の意義

(思想の歴史的展開) 中心の年間指導計画案

＜思想の源流＞

はじめに (導入)	1	1	1	おもな指導事項
分野	月	日	時数	
思想の源流	7	第2章 世界宗教の成立	5	
		第1節 キリスト教の考え方	25	1 神と人間 (ヘブライズムの成立) ○ 唯一神信仰の意義 (絶対者と人間) ○ ヘブライズムの人間観 (原罪・契約・審判)
				2 アガペと人間 (イエス中心) ○ 神の愛と人の愛 (アガペとエロス)

2.5	1	<ul style="list-style-type: none"> ○隣人愛と信仰 (神の国と罪) ○キリスト教の成立(パウロ) (メシア・イエス・キリスト十字架) ○信仰の普及(アウグスティヌス) (教会、三元法、信仰の意義) ブッダの課題 ○苦へのとりくみ (ブッダの思想試みの歩み) ○苦とさとり (ブッダ成道と伝道) ブッダの根本思想 ○ダルマとしての無常無我 (輪廻の克服) ○縁起(無常無我の実相) 解脱への道 ○無常無我の体得 (真理は体得すべきもの) ○入正道と慈悲 (無常無我の実践)
	2	<ul style="list-style-type: none"> 真理とは何か ○ロゴスとダルマ ○無と有(老荘) (無知の知、道と無)
	1	知と行 (理性的知と体得的知)

第2節 仏教の考え方

第1節 真理説

第2節 人間の生き方

第4章 東洋人の考え方と
西洋人の考え方

○愛の問題
(アガペ、エロス、慈悲、仁)

(思想の歴史的展開) 中心の年間指導計画案

はじめに(導入)					
分野	月	章	節	内容	時数
	6	第1章	第1節	ギリシアにおける思想のめばえ	3
			第2節	インドにおける思想のめばえ	1.5
					1.5
		第2章	第1節	倫理と実践	5
					2.5
					2.5

思想の源流

ソクラテスの真理への態度
(無知の知・産婆術・対話法)

2 ポリス的人間の生き方

○人間の真理

(ポリス的人間の理想)

○知と行

(よく生きること・法への態度)

○個人と国家

プラトン・アリストテレス
(からコスモポリタン思想へ)

1 孔子とその時代

○春秋・戦国の時代と問題

○孔子の課題

2 仁と礼(孔子の基本的な考え方)

○礼の内面的原理としての仁

○忠と恕(主観的善と客観的善)

○知と行(知の意義・言と行)

3 人生と学問

○学問への態度と方法

4 実践への道

○行為と内省

○孝悌から平天下へ

第2節 儒学の思想

2.5

：

(先哲の基本的考え方) 中心の年間指導計画案

<現代と思想>

はじめに (導入)		1		2		3		4	
分野	月	章	内 容	節	内 容	時 数	時 数	時 数	時 数
		第1章	ベーコンと デカルト	経験論と合理論					おもな指導事項 帰納法と演繹法の比較 方法的懐疑と自我の省察 哲学の方法(科学的合理的精神) 自然法の概念
		第2章	ロックとルソー	社会契約と啓蒙思想					ホッブズとの違い,心は白紙 フランソワ啓蒙思想,教育論・自然 へ備わ 人権思想
		第3章	ベンサム	功利主義					近代民主主義の源流 幸福主義の倫理,最大多数の最 大幸福
		第4章	カント	ドイツ観念論					功利主義の限界(ミルとの比較) 個人と社会 経験と理性の総合
				実存主義					人格主義の倫理(義務,倫理的自 由の問題:目的の王国) 行為の純粋性(動機説) 善と幸福の問題 実存主義の二つの立場 個人の内的自覚,単独者・実存

第6章 社会主義	2 社会主義	と神、主体性は真理なり 人間性の回復 科学的社会主義（唯物史観と剰余価値）、階級と連帯、革命か改良か 人間性の回復 行為の有用性と真理 個人→社会への適応の論理（道具主義と社会対応の理論）・多元的世界観 多様化と調和 文化と倫理・生への畏敬 人間性の尊重
第7章 デューイ	2 プラグマティズム	
第8章 シュヴァイツァー	2 現代とヒューマニズム	

（ 基本的なもの の 考え方 ） 中心の年間指導計画案

＜ 現代と思想 ＞

分野/月	はじめに（導入）	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	おもな指導事項
	時数	時数	時数	時数	時数	時数	時数	時数	時数	時数	時数	時数	時数	
第1章 科学と哲学	5													「存在」の科学的なもの の 見方， 考え方と哲学的なもの の 見方，考 え方 「認識」について，絶対主義・相 対主義にもふれる

	<p>第2節 科学的なものの考え方</p> <p>第3節 哲学的なものの考え方</p> <p>第4節 まとめ</p>	<p>実証主義（コント）の特長 マルクスと毛沢東の理論と問題 進化論の問題 デカルトとベークン、カントの 理性について、プラグマチズム の考え方</p>
<p>5</p> <p>第2章 倫理的価値と人格形成</p>	<p>第1節 説明</p> <p>第2節 自由と必然</p> <p>第3節 快と善</p> <p>第4節 まとめ</p>	<p>①社会的認識の方法について ②智への愛について 「道徳と倫理」について 「価値」と「目的」について 「あること」と「すべきこと」 の関係について ヘーゲルとニーチェの思想とそ の問題点 (エビクロス)ペンサム、ミル とカント 善と実践について 「存在」への宗教的見方・考え 方（信仰の特質） 宗教と人生観 アウグスチヌスと神の支配・ル ターと神の関係 カルヴァアンの生活の中の神の位 置 キルケゴールの単独者 実存主義について 〔善と美の一致(カコカトス)〕 シラー（美しき魂）ルソー（学 問芸術論）カント（美と崇高）</p>
<p>5</p> <p>第3章 宗教と芸術</p>	<p>第1節 説明</p> <p>第2節 神の存在</p> <p>第3節 自己の存在</p> <p>第4節 美の存在</p>	

第4章 個人と國家の關係 一 民主主義の倫理	5	第5節 まとめ	永遠と信仰について、藝術と人生について 個人と社會、個人と國家、民主主義の理念 (マキヤベリ)、ホッブス、ロック、ルソー 人間尊重の精神(ガンジー、トルストイ) 平和への希求(ロマン・ロラン、ラッセル) 國民としての自覚(愛国心について) 自由と責任について 寛容の精神と連帯意識について
		第1節 説明	
		第2節 社会契約	
		第3節 ヒューマニズム	
		第4節 まとめ	

(思想の歴史的展開) 中心の年間指導計画案

<現代と思想>

分野	はじめに(導入)	1	2	3	おまな泊課題項
分頁	章 内 容	詩数	節 内 容	時数	
第1章 西洋近代思想の発展			第1節 近代思想の誕生	3	人間尊重の精神、信仰と自由、信仰と職業生活
		14	第2節 合理的精神の確立	3	理性と経験、近代的学問探究の精神
			第3節 近代市民倫理の展開	4	人格と自由、道徳と実践、道徳と幸福

人生観					自然法の考え方, 社会的自由と道徳的自由
世界観					啓蒙思想, 個人と社会人倫と国家
第2章 現代の思想状況と日本人の思想的課題	B	第4節 近代市民社会の思想	4		近代社会の矛盾, 人間疎外の状況
		第1節 近代から現代への課題とその展望	1		社会認識の方法, 人間と革命, 民主主義と社会主義と共産主義
		第2節 現代と社会主義	4		信仰と実存, 超人と運命愛, 理性と実存
		第3節 現代と実存主義	4		自由と責任
		第4節 現代とプラグマティズム	2		知識と行動, 真理と知性, 経験と社会
		第5節 現代日本人の思想的課題	2		現代日本人の意識と行動, 自由と責任

(先哲の著作および言行) 中心の年間指導計画案

<日本の思想>

分野	はじめに (導入)	章内容	節内容	時数	おもな指導事項
		日本の思想	第1節 古代日本人のころ 日本神話「古事記」	18) 20	1 天地のはじめ, 清明心 ○古代日本人は自然をどのようにみていたか ○古代日本人は人間の真心をどのようにとらえていたか

第2節	日本文化の創業 聖徳太子「十七条憲法」	3	儒仏思想の理解・太子の政治思想 ○太子の示す人間関係のあり方は何か ○そのようなあり方を突現するた めの方法として太子の扱りと ころとしたものは何か ○太子の自覚とは何か
第3節	仏教と日本人 1, 仏教の日本的展開のあ らまし	1	奈良仏教から鎌倉仏教まで—南都 の六宗, 平安仏教(最澄・空海・ 源信), 鎌倉仏教(念仏・坐禅・ 日蓮宗)など ○それぞれの時代の日本仏教は何 を求めてどんな方法をとったか
第3節	2, 親鸞とその宗教—「敬 異抄」, 「三帖和讃」, 「未遯抄」	2	念仏—弥陀の本願, 悪人正機, ○親鸞その人について考察してみ よう ○親鸞において宗教の意義を考え よう
第3節	3, 道元 その人と思想— 「正法眼蔵随聞」	1	坐禅とは, 身心脱落, 修証一等・ ○道元のとった修行方法は何か
第4節	4, 日蓮 その信心—「立 正安国論」, 「観心本尊 鈔」, 「誓体義鈔」	1	法華經の行者 ○日蓮の信心は何か
第4節	儒学と日本人 1, 日本の儒学の展開	1	儒学の受容から江戸時代の儒学ま で ○儒学と日本人のころとどうと けあったであろうか

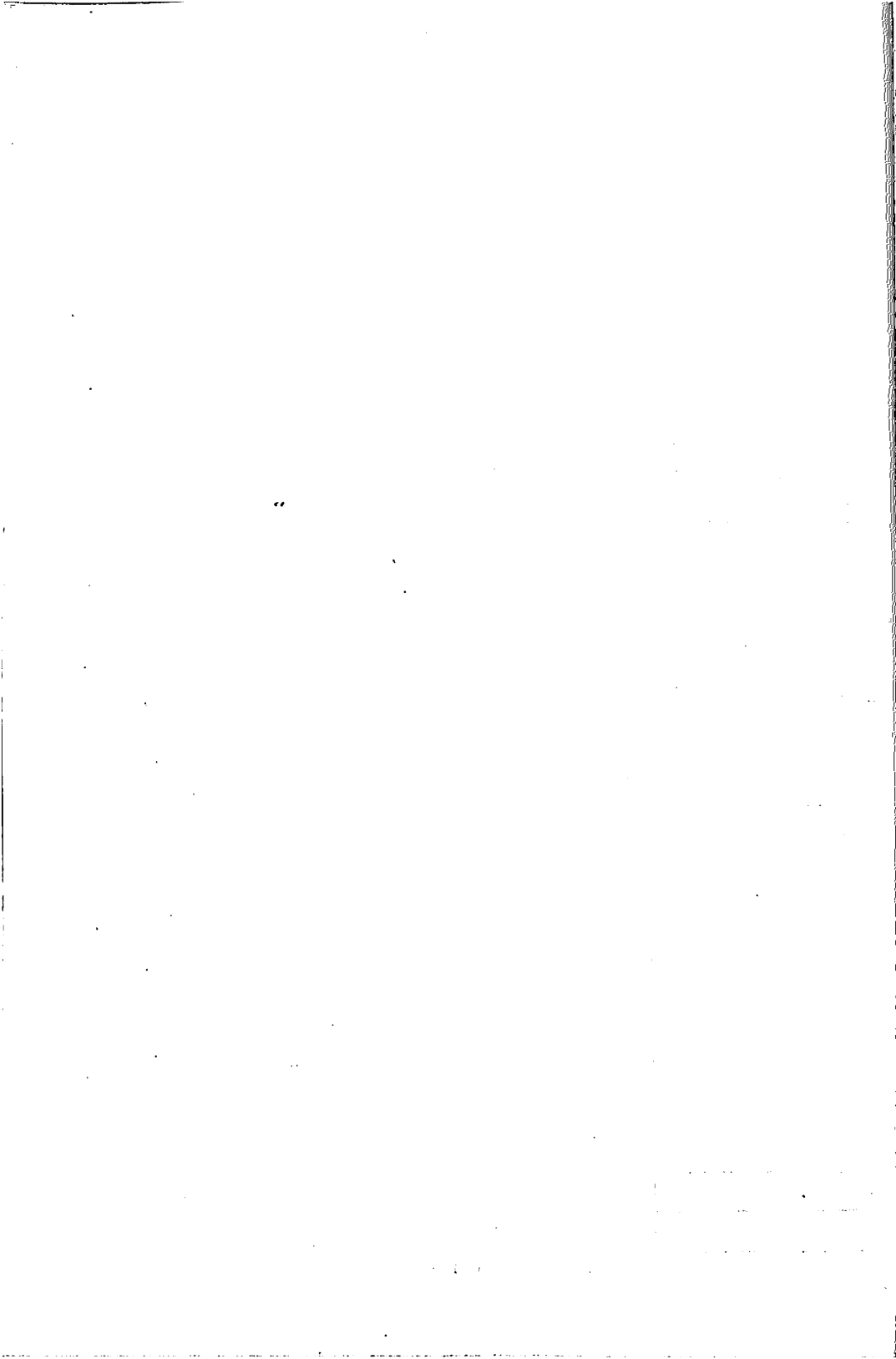
<p>2, 中江藤樹 その学問論 —「翁問答」</p>	<p>1</p>	<p>○学問の意義について考える—学問とは何か</p>	<p>○学問の意義について考える—学問とは何か</p>
<p>3, 伊藤仁斉・古学思想と「仁」—「語孟字義」 「童子問」</p>	<p>1</p>	<p>古学思想・「仁」の解釈 ○「仁」とはどんな心か</p>	<p>古学思想・「仁」の解釈 ○「仁」とはどんな心か</p>
<p>第5節 国学の思想 本居宣長と「まごころ」 —「玉勝間」</p>	<p>1 2~3</p>	<p>国学とは・国学の系譜 まごころと神の道</p>	<p>国学とは・国学の系譜 まごころと神の道</p>
<p>第6節 近代日本の萌芽 1, 佐久間象山, 東洋の道徳と西洋の芸術と —「省督録」</p>	<p>3~4</p>	<p>心(精神文明)と科学技術 読書の意義など ……といふこと 体験ということ</p>	<p>心(精神文明)と科学技術 読書の意義など ……といふこと 体験ということ</p>
<p>第7節 近代日本の先覚者 1, 福沢諭吉—「学問のすすめ」 「文明論の概略」</p>	<p>3~4</p>	<p>近代の学問論, 文明論 二つのJ</p>	<p>近代の学問論, 文明論 二つのJ</p>
<p>2, 内村鑑三—「基督信徒のなぐさめ」他</p>	<p>3~4</p>	<p>エゴイズムの克服</p>	<p>エゴイズムの克服</p>
<p>3, 夏目漱石—「行人」, 「こころ」, 「硝子戸の中」, 「明暗」</p>	<p>3~4</p>	<p>エゴイズムの克服</p>	<p>エゴイズムの克服</p>

(思想の歴史的展開) 中心の年間指導計画案

分野	はじめに(導入)	1	おもな指導事項
月	章内 容	節内 容	時数
	第1章 日本の思想	第1節 日本思想の起源 ⑩ 日本神話の世界 ② 聖徳太子 日本人と仏教 第2節 (1) 仏教受容と奈良、平安仏教 (2) 鎌倉仏教の人々 ① 親鸞 ② 道元 ③ 日蓮 日本人と儒教 第3節 ① 中江藤樹 ② 伊藤仁斉、石田梅岩 安藤昌益 国学 第4節 ① 本居宣長 ② 日本人の心情 近代日本の思想 第5節 ① 日本近代化の特色・矛盾	古事記, 万葉集, 清明心 1 17 条憲法, 和の精神 ⑥ 1: 最澄, 空海, 浄土教 2 絶対他力, 悪人正機 2 只管打坐, 身心脱落 1 立正安国 ② 1 「孝」の倫理 1 仁の解釈, 心学, 封建制批判 ② 1 もののあはれ, ますらをぶり 1 武士道, 日本人の美意識 ⑦ 0.5 東洋の道徳, 西洋の芸術 文明開化

人生観・世界観

②福沢諭吉	学問の進め、独立の精神	1	
③内村鑑三	日本のキリスト教	1	
④夏目漱石	自我の探究	1	
⑤幸徳秋水と中江兆民	日本の社会主義	1	
⑥西田幾多郎	独創的哲学	1	
⑦現代日本の思想状況	様々な思想的立場	0.5	



Ⅵ 研究報告

第一分科会〈現代と人間〉

1. 人間・社会・文化

都立荻窪高等学校 小川 一郎

《重点的ねらい》 このごろ「生きがい」ということがよくいわれる。^{w)}「豊かな社会」といわれる現代においても、心まで満たすことはできず、真に人間らしい生活とは何か、が強く求められているのだ。

倫社はもっとも直接的に人間を学ぶ科目といってよい。「人間とは何か」はわたくしたち人間の永遠の課題であるが、倫社も「人間とは何か」にはじまって「人間とは何か」に終る。そのはじめの「人間とは何か」にあたるのが本論である。

古来、人間の定義には種々あるが、人間ほど複雑な要素で構成されているものはない。それだけに一言で人間を定義することは至難のわざである。J・S・ミルは「満足せる豚より不満足な人間たれ」といった。人間の行動は、本能的欲求の充足が原動力といえるが、この第一次的欲求といわれる本能的欲求の充足だけでは決して満足しない。人間は文化や社会の中で生活し、種々の欲求を充足させている。わたくしたちは、欲求というものをすべて生れつきのもののように思っているけれども、欲求はつくり出すことができるものもあれば、放っておけば消滅してしまうものもある。

「自分のしたいことをするのがもっとも幸せだ」とは、このごろよく聞くことばだが、他人によってつくられた欲望に従い、それに気がつかない場合もありうるのである。これは人間が他の動物と違い社会生活、文化生活を営むところから生まれる問題である。本当の意味で、わたくしたちに深い満足をあたえる欲求の充足とは何であろうか。人間の欲求が、どんなに自然に思

われ、本能そのままに見えたにしても、文化によって変容を受けて現われるものであることを充分認識する必要がある。自分に深い満足にあたえる欲求を根気よく育てるところに、人間の特性があるのである。この点をねらいとして学習をすすめたい。

《指導内容の具体的展開》クモは、精巧な巣をつくるが、この能力は本能であり、学んでえた能力ではなく、進歩も退歩もしない。宮崎県幸島のサルは海水で芋を洗って食べることを覚えたそうだが、ごく近所のサルにしか伝わらなかったという。だから芋を焼いてたべるとか、煮てたべるとかの進歩は思いもよらない。人間以外の動物には社会生活、文化生活はないのである。

人間はことばを話し、道具をつくり、社会生活を行ない生活を進歩させてきた。人間は文化の創造と継承①を絶えず行なっているのである。これは、知性の力による。知性はことばと密接な関係をもつ。先ず、ことばについて考えてみよう。人間は思考する力をもっているが、このことは、ことばをもって自分に問いかけることにほかならない。ことばはまた、経験と蓄積し、他人に伝えることができる。人間の想像力も社会生活もことばにおうのである。サルの芋洗いも、ことばが話せれば、もっと広く伝わったに違いない。この知性の働きを通して欲求は実現されている。社会的欲求といわれる所有欲、権力欲、道徳的欲求や文化的欲求といわれる美的欲求、知的欲求などは二次的欲求といわれ、本能的欲求と区別されるが、人間の欲求はすべて、知性の働きと関係ないものはない。したがって人間の欲求は、後天的なものにより大きく影響される。一人一人の人間のもつ欲求が多様である②のはこのためである。この人間のもつ欲求の現われかたの多様性は文化の多様性といってよい。このことは、なによりも欲求がつくりあげられてきたものであることを示す。自覚的につくられたものではないかも知れないが。

青年期にさしかかった人間は、この欲求をつくり出すしごとを自ら行なうことができる。また、そうしなければならぬ。これが自己形成にほか

ならない。そのその際によりも必要なのは、欲求を知性によって見分ける力である。どこまでが自然のものであり、どこまでが文化によって条件づけられたものであるか。また、なにが文化によってはじめて高められたか。現代の社会は、どのようなメカニズムで欲求をあやつり、またおしつぶしているか、をはっきり見破る必要がある。

社会生活、とくに現代における社会生活の面からこの問題を考えてみると、人間は、社会の中で欲求を持ち、社会の中で欲求を充足させているといえる。したがって社会自体が欲求の体系といえるのである。現代の社会について、特にいえることは、つくられた欲望が存在することである。本人は、自分の本来の欲求だと思い込んでいるが実はそうではない。欲望の造出や肥大に大きな役割を果たすのは、マス・コミの広告である。企業は、欲望の造出に多額の出資をしている。商品の需要を造り出すためである。隣の家で、カラーテレビを買ったからうちでも、ピアノを買ったからうちでも、というステレオ・タイプの人間^③は、まさに自分がないに等しい。自分にとって大事な欲求は衰え、ついには見失ってしまっている。なにが自分の欲求であるかを、見分けるためには、現代社会の特質を充分に頭の中に入れておく必要がある。これが、倫社において現代社会を学ぶ第一の意義である。

一人一人の人間は、今まで考察してきたように、文化的に条件づけされた欲求の大系をもつ。すなわちその人独自のパーソナリティを持つのである。人間社会に誤解と認識不足が存在するというのは、欲求の大系が人により違いがあることに起因する。これが文化の多様性ともなっている。自己の知性の働きを通して、文化的に条件づけられて欲求が充足されるからである。どのようにしたら知性をみがくことができるかということは、どうしたら深い満足を味わう欲求をはぐくむことができるかという課題である。ここで心がけねばならないことは、独善におちいることなく、他人の欲求と自分の欲求を比較する基準を見出すこと、すなわち人間としての普遍性を見出すことである。

人間の行動の原動力は、本能的な欲求であるが、それを方向づけ、価値あるものに高めるのは知性の働きであることを銘記すべきである。わたくしたちが心の底から深い喜びを味わうことができる欲求は、注意深く、そして根気よく育てていかなければならない。「生きがい」は別のところにあるのでなく、知性によって、人間としての深い喜びをあたえる欲求をはぐくんでいくところにえられるのである。

《設問とねらい》

設問 1. 下線の「文化の創造と継承」を人間のみがよくすることができる理由を、全文を読んで5行以内にまとめよ。

(ねらい) 人間の特性について、学習する能力を持つということから考えさせ、人類の進歩の歴史や一人の人間の間形成における、文化の創造と継承がはたす役割についての理解をみる。

設問 2. 下線②の「一人一人の人間が多様な欲求をもつ」ということは、別のことばでいえば「一次的要求を一般的要求といい、二次的要求を個別的要求という」ことであるが、その理由としてどのようなことが考えられるか。

(ねらい) 食欲、睡眠欲、性欲など、本能的欲求は人間誰でもが動物の一種である以上、一般的に持つ欲求であるが、人間は環境や自分の主体的な努力により新しい行動の傾向を獲得する。人間の欲求は、人間の本性そのものではなく、それぞれ努力し、注意深く、育てあげねばならないものであることの理解をみる。

設問 3. 下線③「ステレオ・タイプの人間」を欲求との関連で説明せよ。

(ねらい) 現代社会においては、企業は人びとの欲望をつくり出し、購買欲をそそる。自分が本当に欲しいものであるかどうかもわからず、隣人の欲求に反応する主体性のない人間がいかに多いかを考えさせる。

《発展的まとめ》 本論はあくまで、「現代と人間」の章の導入の役割をなすものである。文明進歩の成果としての現代社会が人間を真に豊かになしえているのか、真の人間性をはぐくむにはどうしたらよいのか、という

11

視点がまず、確立されなければならない。そのためには人間性が先ず問われなければならないだろう。文化こそは人間を人間たらしめたものである。文化の創造と継承こそ人間の特性である。この能力は何であるか。学習する能力であり、思考力である。この知性の力が人間に真の喜びぬあたえる欲望を育てる。知性は真の欲求の生長を阻害するものと、育成の真の条件を見分けねばならない。現代社会を学ぶ意義もここにある。それには「したいことをする」だけでなく、苦しくてもしなければならないこともあることを考えさせたい。

2. 情報化社会におけるマスコミについて

都立東高等学校 杉原 安

《重点的ねらい》 新学習指導要領の社会科の目標の一つに「社会生活のあらゆる面が急速に変化発展している日本や世界の現状ならびに動向を把握させ、さまざまな情報に対処し、諸資料を吟味し科学的、合理的に研究して公正に判断しようとする態度とそれに必要な能力の基礎を養う」とある。このことを具体的に考えてみると、現在の日本は昭和30年代の高度経済成長をうけて、高度産業社会、情報化社会に移行しつつあるといわれている。そこでは物的生産力の高度化、情報の量的、質的増大にともない、われわれは情報の渦の中に生活することを余儀なくさせられている。そして、これらの情報のかなりの部分を提供しているのが、マス・コミ（大量伝達、大衆伝達）である。したがってここでは情報化社会におけるマス・コミの問題を、われわれの生活にかゝりわりをもたせて、さきの社会科の目標にみられる諸資料の吟味、処理という視点から以下検討する。

①
《指導内容の具体的展開》 昭和44年7月21日付朝日新聞（夕刊）は次のように報じている。「7月21日11時56分20秒（日本時間）アポロ11号宇宙船は月面に到着した。」その時の模様を「テレビにくだる目、目、都心の交通量は半減」の見出しの下に「歩いた、歩いた、その瞬間、テレビに見入っていた人々は、その当然すぎる光景にわれを忘れた拍手がわいた。38万kmはなれた所で展開する途方もない冒険は、しかし、全くなにげなく始まった。月面のほこりの中に降り立ったイーグルへ、そのちっぽけな船に乗った男たちにかつてない程多くの熱い目が集中した。東京都心のタクシーもとまった。・・・この朝6時東京電力の消費量は、いつもの月曜の朝より100万キロワットもはね上がった。首都圏の680万台のテレビが月面の冒険で熱くなった」、この中に情報化社会におけるマスコミの持っている問題を象徴的に読みとることができる。すなわち、通信衛星などに代表されるマス・メディアの発

達にともない、マスコミの送り手の機構、組織の巨大化の問題、情報の国際化の問題、さらに、テレビに代表されるマス・メディアの普及にともないマス・コミの内容の画一化の問題、送り手と受け手の間の直接的、人格的接触の欠如によるマス・コミの一方向的な流れ、フィードバックの難しさ等の問題である。

まず情報化社会という言葉がよく使われる割には、その意味が明瞭でない傾向があるのでこの点をみると、この情報化社会という言葉から受ける具体的なイメージは、人々によってある程度異なるであろう。しかし、工業化社会（物の生産と流通が社会の中心的役割を果している社会）と対比してみれば、おのずから明らかである。つまり、「情報の生産と流通が社会の中心的役割を果している社会」といえる。この場合、情報とは「ある人の意志決定に、プラスにせよマイナスにせよ、何らかの影響を与えている事柄の知らせ」と解してよい。

アメリカの社会学者、^②ダニエル・ベルはその著「知識文明の構想」の中で現在の工業化社会の次にくる社会を、脱工業化社会（ポスト・インダストリアル・ソサエティ）といい、無形の知識、情報の生産が主体となる事を指摘している。昭和45年度の国民生活白書によると、国民1人当りの1日の情報供給量は、昭和35年でおおよそ72万音、40年ではおおよそ193万音、43年ではおおよそ232万音と推計している。この間約3.2倍の増加である。これを媒体別の割合で見ると、昭和35年にはテレビ、20%、ラジオ67%、新聞10%、雑誌1.9%、書籍0.9%であり、43年にはテレビ66%、ラジオ20%、新聞7%、雑誌0.9%、書籍0.1%となり、テレビの割合が大幅に増大し、反対にラジオの割合が半減している。

しかし、情報が「馬の耳に念仏」であったのでは意味がない^③であって、情報の供給と受け入れの間にギャップがあるのが当然である。マス・コミの送り手に対する受け手の側の選択の問題である。例えば、昭和45年10月19日付の毎日新聞は「新聞に対する評価と要望」という全国世論調査を報じている。これによると、人々が情報の受け手として何をより所としているかとの

発問に対して、新聞46%、テレビ42%、ラジオ3%、週刊誌1%、月刊誌1%、単行本1%、その他6%となっている。いろいろのマス・メディアが考えられるが、新聞の役割の大きい事がわかる。毎年10月の新聞週間に新聞界では、代表評語を決めているが、⁽⁴⁾45年度の評語「新聞はきれいな地球の見張り役」に見られるように、ラジオ、テレビ等の映像メディアにその速報的機能をゆずり、ニュースなどに対する詳報的・解説的機能、読者の要求を先取りする予見的機能が大きな意味をもって来ている。

マス・コミというのは、マス・メディア（大衆媒体）を用いて不特定多数の大衆に、大量の情報を伝達する働きを指している。したがって、その歴史はマス・メディアの発達と並行しており、比較的最近の事である。一般的に第2次世界大戦後、ユネスコ憲章の第一条に「この機関はあらゆるマス・コミの手段・方法により、諸国民の相互の知識と理解を推進する事業に協力する」とうたった事を1つの契機として、次第に普及していった。

今日ではマス・コミの中心的役割として、⁽⁵⁾商品の販売広告としての役割、世論形成における役割も無視できない。特に、1970年代以降の激動する社会にあって、国民的コンセンサスの面からの役割も重要である。

〈設問とそのねらい〉

設問1. ①のアポロ11号についての朝日新聞の記事を読んで、あなたの感想を簡単にまとめよ。

(ねらい) 科学技術の発達の問題と、その成果がコンピューターを中心とした情報ストックの機械により、100%近い正確さで運用された事、われわれの日常生活におけるテレビの役割、およびそれのもたらす現実と映像の世界とのギャップ。

設問2. ②のダニエル・ベルの言う脱工業化社会の構造の諸特徴を調べ、日本の現実を分析してみよう。

(ねらい) 彼は5つの特徴を指摘しているが、それにより、情報化社会という概念がはっきりしてくると同時に、その中において人間の持つべき能力が何なのかを把握することができる。

設問3. ③のマス・コミの過程を分析して、送り手と受け手の間の効果について考えてみよう。

(ねらい) 送り手の伝達内容の生産過程は、送り手の目を通した1つの濾過作用である。同時に現実模写に対する伝達手段の不十分さの問題、さらに受け手の解釈におけるゆがみの問題を把握させる。

設問4. ④のここ数年間の新聞週間の標語を調べ、それがマス・メディアとしての新聞のいかなる役割を意味しているかを考えてみよう。

(ねらい) 例えば「新聞はきれいな地球の見張り役」というのを考えてみると、最近、よく言われているように地球を生態学的に考え、公害に対する新聞界の姿勢を読み取る事ができる。そこには、多様化し、深化している読者の要求を先取りした新聞の予見的機能、オピニオン・リーダーとしての働きを見る事ができる。

設問5. ⑤のマス・コミの媒体別の広告費を調べ、商品の販売におけるマス・コミの役割、同時に、商品のもつ情動的機能などを検討すること。

(ねらい) 商品は1つの機能を持っている。しかし、今日的大量生産、大量販売、大量消費の中にあつてマス・コミにおける広告費の伸びは目ざましい、特にテレビの割合は顕著である。また、各商品も情動的機能、情動的コストを増加しつつある。

《発展的まとめ》 ここでは、現代社会を情報化社会の観点から、マス・コミの問題をみてきた。しかし、現代は大衆社会であり同時に民主主義社会である。これらとマス・コミとの関連も考えられなければならない。特に民主主義社会は、各個人の自由と平等の上に成り立っており、各人の自由な意見に基づいた世論を不可欠とする。世論とマス・コミとの関係、民主主義社会におけるマス・コミのあり方も考えられなければならない。今日、人々の価値観は多元化し、多様化し、単一の考え方で全てを律することはできにくい。この中であつて、各人の意志決定に際してかたよりのない情報に基づくことが重要である。このことは、マス・コミに対する透徹した目なしには不可能である。

3. 大衆社会の諸問題

—問題点の指摘を中心として—

都立井草高等学校 中 村 佑 二

《重点的ねらい》 現代社会の特質は、大規模な、高度に精密化された産業社会と、無定形で非合理的性格をもつ大衆社会との二面からとらえることができる。ここでは、産業社会の特質についてすでに学んだ知識をふまえて、大衆社会の側面にあらわれた現代社会の特質をとりあげ、その問題点をあきらかにしていきたい。まずわれわれが感覚的にとらえている大衆社会の状況のなかから、問題点を明確に把握させる。さらに、これらの状況が産業社会のいかなる特質と結びついているかについて考えさせ、大衆化の傾向を生ぜしめる要因を明らかにする。このようにして、相反する二側面をもつ現代社会に生きているわれわれの社会的現実を目を向けさせるとともに、大衆化の渦にまきこまれることなく生きるために、どうすべきかを考えさせたい。

《指導内容の具体的展開》 1. 大衆社会化の状況 現代社会の特徴は、まずその規模の大きさにある。産業社会化の進行、マス・コミュニケーションの発達、教育の普及、交通および輸送機関の発達などが、人びとの地域的・社会的なわくをとりのぞき、生活圏を拡大するとともに、大多数の人びとが同時に同様な生活基盤に立つことを可能にしたのである。社会の巨大化によって、規模や構造上の変化ばかりでなく、そのなかに生きる人間の生活や意識のうえにも、大きな変化がおこった。このように巨大化し変質した現代社会は、大衆社会(mass society)とよばれる。大衆社会とは、どのような特質をもつものであろうか。はじめに大衆社会化の状況のなかから、特徴的な傾向を列挙してみよう。①生活状態、感じかた、考えかた、行動のしかたが画一化・平均化する傾向。②文化の面では創造性に欠け、没個性化する傾向。③無力感、不安感、孤独感が増大する傾向。④多様な集団に分属していながら、そのいずれにおいても疎外感をもつ傾向。⑤マイホーム主義、家族への逃避、片すみの幸福を求める傾向、⑥消費やレジャーへの欲求増大の傾向。

⑦射幸心増大の傾向、⑧低俗な娯楽の氾濫、⑨価値観の多様化と混乱など。このような状況にとりまかれているわれわれは、大衆化の流れに押し流されまき込まれる可能性をつねにもつものである。つぎに、これらの背景について考えてみよう。

2. 大衆社会化の条件 大衆社会は、19世紀末～20世紀初頭いらい急速に進められた資本主義の高度化、科学・技術の進歩とともに成長してきたもので、この成長の過程において、社会・経済上の諸条件は、つぎのように変化している。①大量生産方式が飛躍的発達をとげ、大企業中心の産業組織が確立した。②組織が巨大化するとともに、組織の管理・統轄が機能的に行なわれるようになり、分業が極度に細分化された。③組織の目的のために個人が拘束される傾向が強くなり、組織対個人の対立・緊張が生じてきた。④新中間層が急増し、社会的地位・生活水準・生活意識における類似性が強くなってきた。⑤大量生産にもとづき、大量消費が拡大した。⑥商品の広告・宣伝効果が、マス・コミュニケーションの発達によって著しく上昇し、このことがまた、マス・メディア(mass media)の発達をさらに促す条件となったこと、などである。これらの諸条件の変化によって、今日の大衆社会は、受動的な、画一化・平均化された、緊張感・不安感に満ちた大衆をそのなかにかかえることになったのである。

3. 大衆社会に生きる個人 現代人は仕事のうえでは高度に組織化された集団の一員であり、組織人として生きている。しかし他面では、マス・コミュニケーションによって間接的に結ばれるだけの、ばらばらな個人、すなわち大衆の一員として生きるのである。

現代人は、独立した人間として社会生活を営み、自己の自由意志によって何らかの職業をえらんでいる。専門知識あるいは技術を持ち、組織をうごかしている人や、仕事に生きがいの見いだせる人びとは、少くとも組織人としての面で主体的に生きることが可能である。しかし他の多くの人びとは、巨大化した機構のなかで個人の無力を感じ、虚無感にとらわれる。また、組織とのたえまない緊張関係や、多様な集団への分属からくる自己喪失の不安感

を強くしているのである。この代償は、組織人としての面にはなく、もっぱら大衆としての生活の側面に求められることになる。失われた自分自身の回復、あるいは受動的な生活からの脱出への試みは、安易な、もっとも手近かなところに求められる。消費・レジャー・ギャンブル・大衆娯楽、あるいはマイホーム主義さえも、かかる代償となりこれを求める傾向が一般化するのである。

消費は一種の選択行為であり、そのなかに自己主張を含んでいる。しかし現代社会においては、このような自己回復とみられる行為もまた、すでに商業宣伝のとりこになっているばかりが少なくないのである。一般的に、消費水準の上昇とともに消費の内容も高度化していく傾向があるが、代償としての消費は、さらにこの傾向をエスカレートさせている。すなわち一つの消費が①つぎの消費への欲求をかきたて、消費のための消費あるいは消費飢餓②の状態におちいる危険性をもつと考えられるのである。消費にかぎらず、安易な目的を代償として追求することは、むしろ逆に大衆化の危機的様相を深める結果に終るのではなからうか。

、設問とそのねらい

設問1. 1-①～⑨について、その具体例あるいは具体的場面をあげながら問題点をあきらかにせよ。(そのうち1つについて400字でまとめよ)

(ねらい) 大衆社会化の状況を、生徒が皮膚で感じていることから出発して、これを理論的に組み立てる。文章化により問題点を明確化させる。

設問2. 2-②にあげた、組織の管理・統轄を機能的に行なうための機構は何とよばれるか。またこの機構の発達が社会化を促す条件となるのはなぜか。要点を指摘せよ。

(ねらい) インパーソナルな機構のなかにおける人間関係の稀薄化によって、情緒に対する飢餓が強まり、この代償を組織外の生活に求めようとする傾向があることに目を向けさせる。

設問3. 2-④について、従来の社会階層にみられた異質な生活様式・価値観などが、画一化・平均化されてきたのはなぜか。要点を指摘せよ。

(ねらい) 生活状態、意識、行動様式の画一化が大衆化現象の中心であること、中間層の増大が大衆社会形成の重要な条件であること。したがって中間層のもつ特質と大衆社会の状況を結びつけて理解させる必要がある。

設問4 現代人が統合化あるいは機構化の面と、拡散化あるいは原子化の面を同時にもつということは、現代人が生きかたを考えるばあいに、いかなる条件となっているだろうか。400字程度でまとめよ。

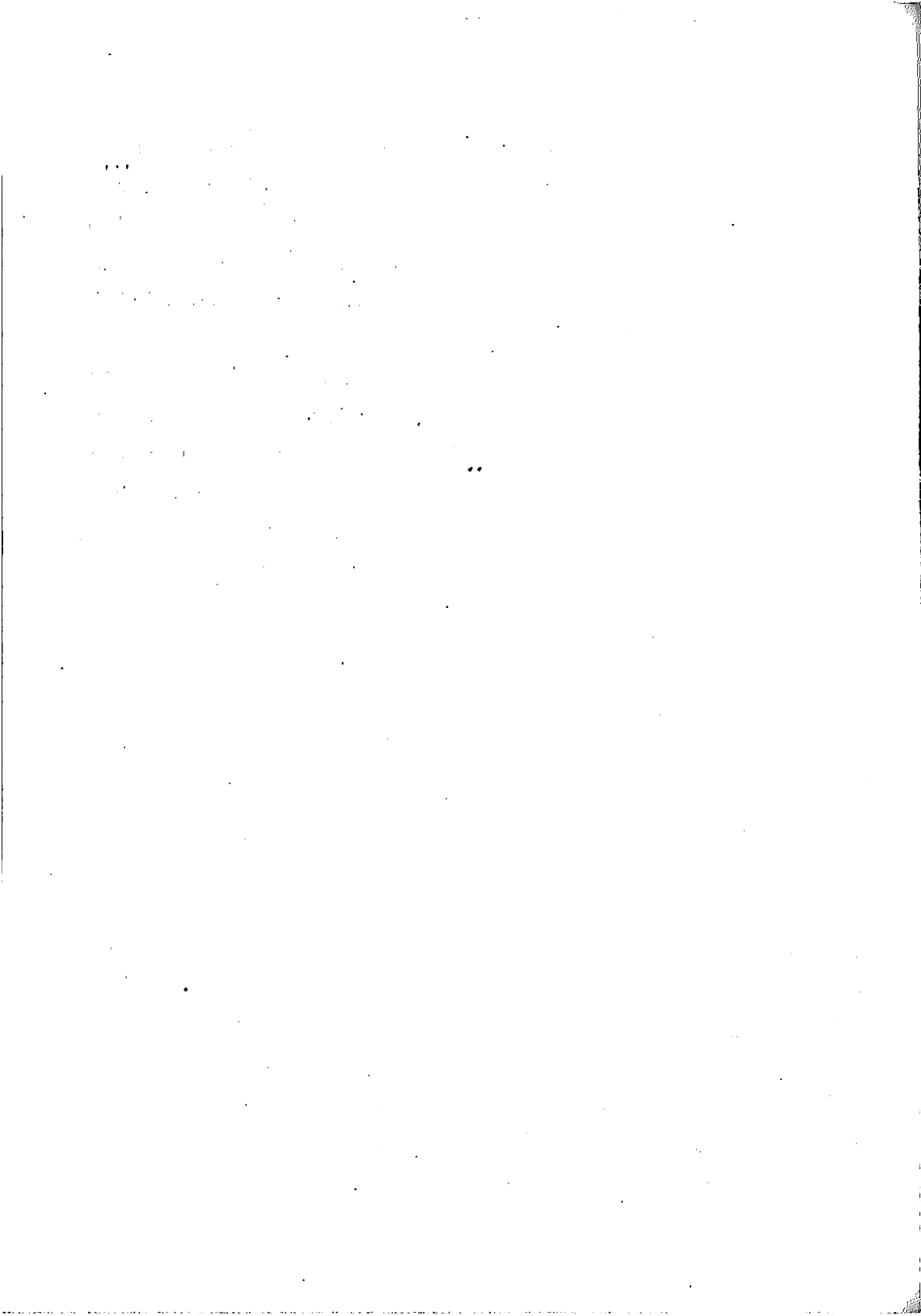
(ねらい) 産業化された社会における組織人としての人間と、大衆のひとりとしての人間の関係に目を向けさせ、大衆社会における個人の生きかたが、組織人としての生きかたと密接に結びついていることに気づかせる。

設問5 下線①、②のような消費生活におちいることなく主体的に生きるためには、どのような態度が必要であろうか。要点を指摘せよ。

(ねらい) 例えば職業生活のように、その人の生涯の根幹となる生活の充実と、自律性の必要について気づかせる。

〈発展的まとめ〉 大衆社会のとらえかたには多様な視点があり、一本化することは不可能であるが、ここでは、産業化した現代社会のもう一方の側面における危機的様相として、大衆社会をとらえようとする。したがって他の立場については、さらに現代社会の分野においてふれることが望ましい。

またここでは、大衆社会におけるさまざまな問題点を指摘し、問題意識を高めることに重点がおかれているので、解決への手ごかりは、さらに家族・職場・地域社会の学習展開のなかでも求めていく必要がある。大衆化した現代人は、家族への埋没か家族の崩壊かという二者択一の考えや、職場における疎外、故郷の喪失というような根なし草の状態におちいる危険性と向かいあっている。このような状況のなかで、われわれ自身が「根」をもち、主体的に生きるために、家族・職場・地域社会でいかに生きるかを考えていかなければならない。社会集団と人間関係の単元における学習のねらいの一つはここにあると思う。また、青年期における孤独感・不安感と、大衆社会のそれとは区別されなければならないので、いずれを先にとり上げるにせよ、この違いを指摘しておくことが必要であろう。



4. 巨大な組織と新中間層

都立一橋高等学校 塚田哲男

《重点的ねらい》 現代社会の特質の一つは巨大な組織にある。それは官僚制として特色づけられている。その官僚制のなかで、多数の新中間層の**人びと**が、社会的に活躍している。

官僚制といい、新中間層といい、それを社会的に分析し、解明することは、これまでしばしばなされてきた。しかし、それらを**実証主義的な社会学**でいくら研究してみても、そこからは現代倫理を導きだすことはできない。われわれが「倫理・社会」の教師であるならば、社会的な研究だけにとどまることなく、現代の巨大組織とそこで生きる人びとに焦点をあててみる必要がある。その試みの意図は、社会学の対象となる事象と人間の在り方を結びつけ、現代倫理を少しでも考えてみようと思うところにある。

それが至難な業であることはよく知っている。今後は、この方向で生徒指導の工夫をしていきたいと思っている。

《指導内容の具体的展開》 古くから、人間は社会的存在としてとらえられてきた。作業をするにも、人間は集団をつくり、協力しあってきた。大規模な組織は近代化以前から存在していた。

産業革命後の工業化の進行は、作業をいくつもの段階に分業させた。組織は、そのため、単純なものから複雑なものへと発展した。現代社会の組織体のおおくは、たんに大規模組織というだけでなく、構造と機能において複雑化し巨大化し、詳細な分業と明細な専門化を特徴としている。組織体には、「上から」つくられたものと、「下から」つくられたものがある。前者の例として企業や軍隊などがあり、後者には労働組合や宗教団体、^①クラブなどがある。「上から」つくられた組織体は上下の秩序を維持しようとする垂直的な人間関係を重視するが、「下から」つくられた組織体は仲間や同僚のあいだの水平的な人間関係をとうとぶ。現代においては、どちらの社会集団も、

会分業と専門化にささえられた巨大組織である。

官僚制（ビュロクラシー）とは、この巨大な社会集団という組織形態、あるいはそれを運営する仕組みのことである。官僚制は国家や自治体の行政機構だけにみられるものでなく、一定の目的を達成しようとする機能的集団のなかに、ひろくみることができる。官僚制はどんな特徴をもっているだろうか。官僚制は、複雑化し巨大化した現代の機能的集団のなかで、その組織が達成しようとする目的にたいし、効率性と合理性をはたらかせる。「上から」つくられた組織はもちろん、「下から」つくられた集団でも、組織体としていったん形をととのえると、目的達成のためにピラミッド組織がつけられ、分業をとおして各人の仕事の範囲がきめられる。各人はそれぞれの地位におうじて自分の役割をはたすだけの存在となり、職務の専門化がうながされる。さらに、公私の区別が強調され、また文書主義が徹底されて、官僚制は効率よく仕事をさせるよう各人に作用する。このような官僚制は、資本主義社会だけでなく、社会主義社会においてもみられるもので、今後の情報化の進展によりもたらされる管理社会ではいっそう顕著となる。

官僚制は、複雑で巨大な社会集団を合理化するものであるが、問題点をもっている。効率化をねらう官僚制は、個々人の職務を画一化し、また役割をこえた仕事をやることを好ましくないとするために、各人をして自分の職務のみにかじりつかせるセクショナリズムをもたらず。人間は、この状況の下で、社会全体を見わたすことができず、組織の部分品となっていく。そこから、人間の労働は質的に変化する。最初に生産部門におこった熟練労働から単純労働への移行は、事務部門の機械化、官僚制化にともなって、事務部門にもあらわれる。機械化のなかでの単純労働は、労働しているときの人間的な感情のはたらきをきらう。そしてそれはオートメーション化された技術的分業と結びついて、人間に労働を強化していく。官僚制がねらう効率性、合理性は、各人に労働の強化を気づかせないようにして推進されている。人間性の疎外は巨大組織に内在する官僚制のなかにみることができる。

現代社会が工業化し合理化をすすめるなかで、巨大組織には官僚制が強く

あらわれた。一方、その工業化は産業構造を高度化して、第3次産業の従業者や管理経営部門などの担当者を、現代に産出した。それらの人びとには、商業従事者、管理・事務担当者、公務員、研究者、自由業者などがある。これらの人びとを、資本をもちながらも自営によって社会に活躍してきた旧中間層と区別して、新中間層とよんでいる。

新中間層は、近代化がすすみ、「身分から契約へ」と社会関係が変化するなかで、すでにあらわれていた。しかし、初期の新中間層は社会の中心的な階層とはならなかった。現代の高度工業社会において、はじめて新中間層は注目されるようになった。しかし、高度工業社会よりも、高い知識や管理能力、創造力をいっそう必要とする情報化社会において、新中間層は今日以上に複雑な社会関係のなかで、社会的責任をもたされるものと思われる。

どのような意識を新中間層はもっているのだろうか。政府による昭和41年の「国民生活の世論調査」では、管理者・事務従事者^③・サラリーマンの88%が、自分の生活程度を「中の下」以上と答えている。2年後の43年の調査では、年間所得60万円以下の世帯は全国の63.3%もあることが知られている。この2つの数字は、管理者・事務担当者・サラリーマンという新中間層のなかに、実際には年間所得60万円以下でありながら、新中間層意識を根強くもっている者のあることを証明している。新中間層は戦後に増大したとよくいわれるが、ここからわかるように、これは経済繁栄のなかの所得が低い者で意識面だけ新中間層という人びとが含まれているのである。自己疎外にはかならない。彼らの政治への関心は、かなりの数が保守政党を支持し、革新政党の支持者は少なく、新中間層のおおくは政治的無関心である。現実の社会を改善する勢力としてあまり行動的ではなく、どちらかという現状維持グループといえる。そして彼らは現代を支配するテクノクラスにかなりの信頼をよせている。

このような新中間層は、官僚制をつうじて、現代の巨大組織に労働力を提供している。彼らは、おたがいのあいだで激しい出世競争をくりかえしながら、モーレッツ社員として行動する。ときに彼らは、他人をおとし入れるほど

の強いエゴイズムを発揮することもあれば、機械化による労働者をも我慢している。そこには、自分をあえて商品化する姿さえうかがうことができる。

官僚制の課題の一つに、支配性と服従性を、人間性の疎外を生むことなく調和させるにはどうしたらよいかがある。それは「上から」の命令と「下から」の労働意欲の一致の問題である。それを自己中心主義で解決することは自己の欲求を満たすことにはなっても、組織のよりよい発展には結びつかず、社会生活の改善に貢献しない。この意味での新中間層は、一つの問題をかかえている。今後、肥大し多様化していく新中間層だけに、彼らの社会的責任は大きい。

〈設問とそのねらい〉

設問1. 「上から」つくられた組織と、「下から」つくられた組織とでは、人間関係にどんなちがいがみられるか。具体的な例をあげ、説明せよ。

(ねらい) 垂直的な人間関係とはどんな社会関係か。同じように、水平的な人間関係についても考えさせる。

設問2. 官僚制のよい点と問題点をあげ、人間は官僚制にどう対処したらよいか、考えよ。

(ねらい) 現代の巨大組織では官僚制は不可欠のものである。それだけに、その長所と短所をしっかりと把握させる。また、官僚制のもつ現代的課題はなにかを考えさせ官僚制の理解をすすめたい。

設問3. 新中間層の意識と現代社会における彼らの在り方を考察せよ。

(ねらい) 新中間層を社会的に把握させるだけでなく、彼らの倫理について考えさせる。

〈発展的まとめ〉 今日、資本主義社会、社会主義社会を問わず、人びとは巨大組織——官僚制の問題に直面している。人間はその官僚制のなかでさまざまな問題ととりくみ、解決されないままにそのなかで苦悩している。現代理想はこの人間状況に対処しているが、その過程で新たな問題を派生させてもいる。巨大な組織と新中間層の項は、現代思想と関連させて指導したい。

5. 家 族 —その人間関係を中心に—

都立向島工業高等学校 小 川 輝 之

《重点的ねらい》 従来、家族は最も基礎的な社会集団のひとつとして取り上げられてきた。そこでは、家族とは何かが問われ、さらに家族の機能、家族形態、家族制度などが問題とされた。いわば家族の静的な側面（制度協約、構造論的な側面）の重視であり、また家族の変遷に力点がおかれるとしても、家族のあり方の変化が個別的にばらばらに論じられてきたきらいがある。ここでは、こうした従来の傾向を再検討して、第一に歴史的な家族の展開過程に基礎をおき、第二に各時代の家族のあり方を家族における人間関係を中心として批判検討し、第三に今後の家族のあり方を生徒自身で追求させることに重点をおくことにする。

こうして、きわめて社会学的なテーマである「家族」も、生徒達の身近な問題となり、倫社授業の目標である“考える場”を与えることになり、家族とその人間関係の研究が、個別的な人間関係のあり方の研究から、人間とは何かという普遍的な人間の問題へと発展する可能性をももつことになり、そのことが「思想部門」への橋わたしになり、さらに思想部門での研究が、あるべき現代社会とその中で人間関係という問題へと帰趨するのではなからうか。

《指導内容の具体的展開》 家族とは夫婦を中核としてその近親の血縁者が住居を共にして生活している小集団であり、最も基礎的な社会集団のひとつである。しかも家族は人間の生活にとって最も重要な役割をはたしている。それは男女の経済的協力と子女の養育とである。しかし家族の機能は時代と場所によって、さらに家族の形態的变化に応じて著しく変化する。

また家族はその形態から直系家族（世代家族）と核心家族（夫婦家族）にわけて理解することができる。直系家族は、「家」を中心としてつぎつぎと世代をかさねて次代にうけつがれ（直系親族）、たてのきずなを中心として

結ばれた家族である。日本およびアジア諸地域においてなお支配的な形態であり、ヨーロッパにおいても産業革命以前の家族の一般的な形態である。直系家族に類似したものに複合家族（拡大家族）がある。これは、ふたり以上の子女が結婚後もそれぞれの配偶者や子供（傍系家族）とともに親と同居している形態である。飛騨白川村の大家族はその最も典型的な例である。

核心家族は夫婦と結婚前の子供を中心として構成された家族であり、結婚によって成立する。そして、子供が成人になればその家族をはなれて新たな家族を構成する。それゆえ、そこには「家」という考え方は存在しない。ヨーロッパにおける近代家族がそれであり、わが国でも都市化の進展につれてこの傾向がみられるとともに、戦後の家族立法の根拠はここにおかれている。〔家族とその人間関係〕家族は、歴史とともに古く、人間にとって普遍的な集団として、非常に重要であったし、現在でもなお重要な集団である。それゆえ古くから社会は家族生活のありかたをいろいろなかたちで定めてきた。法律的に、あるいは道徳的、慣習的に決定された家族生活のあり方をさして家族制度という。

わが国では伝統的に儒教倫理に基づいた家父長的家族が重ぜられ、明治憲法や旧民法にも反映せられた。そこでは、「家」は代代うけつがれるものとして、なによりも重視された。「家」の代表者としての家父長の地位はたかく、民法でも戸主権としてその地位を保障し、戸主の地位をひきつぐ長男には家督がすべて相続された（長子相続制）。このように経済的に基礎づけられた家父長の権威に対して、家族、子供、妻は絶対的に服従しなければならない。たとえば貝原益軒（1630～1714）は『女大学』の中で次のようにいっている。^①

凡婦人は柔和にして、人にしたがふを道とす。わが心にまかせて行ふべからず。故に三従の道と云事あり。是亦女子にをしゆべし。父の家にありては父にしたがひ、夫の家にゆきては夫にしたがひ、夫死しては子にしたがふを三従といふ。三のしたがふ也。いとけなきより、身をおはるまで、わがままに事を行なふべからず。必ず人にしたがひてなすべし。

——貝原益軒、「女大学」

ところで戦後は日本国憲法の成立により、憲法24条にみられる「家庭生活における個人の尊厳、両性の本質的平等」の精神に基づいて、これまでの民法（旧民法）が改正され家の尊重と家長に対する恭順とに特徴づけられた制度的な家父長的家族が否定され、家族を構成するすべての個々人が尊重される近代的な家族になった。そこでは夫婦は対等の立場で、協力して家庭の運営にあたり、子供も成年に達すれば自由に結婚できるようになった。また長子相続制は均分相続制となって、子供は長幼男女の別なく、遺産相続権を均等にもつことになり、扶養についても親子兄弟のあいだで、相互に平等に義務をもつものとされた。このような家族形態の歴史的な変遷を、アメリカの社会学者パージェス（1886～）とロック（1900～）は「制度から友愛」へということばに要約している。

しかし、わが国の家庭生活は法律が変わったからといって、ただちに変わるという性格のものではない。実際の家庭生活においては、家族の相互の人格が十分に尊重されているとはいえない面がある。しかも「近代家族」（夫婦家族）じたいにも問題はある。近代家族は純然たる個人的な愛情と意思によって表現される家族であるところから、ともすれば永続性を保証しがたい不安定な家族となる危険性をもっている。アメリカの離婚率の激増はそのひとつの現われとみられる。また近代家族は、子供の結婚によって親子が別居し、親の扶養義務を確定的でないところから、いわゆる老人問題が発生する。老人問題の多くは経済的な困窮にその原因があるが、そればかりではない。家族は最も心が安らぎ、はなれがたい愛情をもとに構成されているところから、ふたりだけになった老夫婦にとって、これまで同居してきた家族とはなれて暮らすことは精神的に大きな苦痛をもたらし、ときとして不安定な精神状態にさえおかれる。アメリカの老人自殺の急増はこの現われといえる。

〔これからの家族〕今日では社会の規模が拡大し、その機能が複雑になるにつれて、各種の機能をそれぞれにはたす機能的集団も数多く生まれ、いままで家族内でおこなわれていたことも、部分的にそれらにとってかわられるよ

うになった。しかし、このことはけっして家族の本来的な意義が失われたことを意味するものではない。社会のしくみが複雑化し、ひとびとの社会的負担が大きくなればなるほど、健全な家庭生活を営むことは、かえって重要性をまじはじめてきている。そこでわれわれは新しい家族のあり方を、これまでの家族のあり方を検討しながら、現実の社会に適合した普遍的なものにする努力をしなければならない。

〈設問とそのねらい〉

設問1. 下線①について、『女大学』の文章を読んで、このような人間関係の是非を論じなさい。

(ねらい) 実際に資料にあたってみる習慣を養い、是非を考えさせ、さらに新しい家族関係のあり方の創造へと発展させる。

設問2. 下線②について、アメリカでは老人の自殺が問題になっているが、わが国では、普通自殺といえば青少年の自殺である。このような両国の自殺の相違に留意して、その原因を追求しながら両国の家族のあり方を批判しなさい。

(ねらい) 自殺の原因などを通して、わが国と外国の家族との相違に気づかせ、更に普遍的な家族関係のあり方を考えさせる。

〈発展的まとめ〉 従来の教科書では家族の問題はかなり社会学的な問題として構造的な側面に力点がおかれてきた。しかし倫社授業における「家族」の取り扱いには、その人間関係に中心がおかれなければならない。そうすることによって、人間のあり方、人間関係の普遍的なあり方を探求する思想部門へと有機的に関係づけることができるし、H・R活動、生徒会活動、クラブ活動などの諸活動にも関連させることができる。また思想部門で思考された人間のあり方は、現実の人間生活のあり方の問題に帰着するものであり、ここに倫社教育の本姿がある。それゆえ、指導内容には第一に家族の動的な展開過程に中心をおき、第二に資料を具体的にとりいれて思考時間を与え、第三に外国の家族事情を紹介することによって、はば広い家族観の形成をはかろうとしたものである。

6. 職 業

— 職場の人間関係・職業倫理 —

都立板橋高等学校 高橋定夫

《重点的なねらい》 職業における生き方、職域における人間関係での生き方も、おとなとしての人間の生き方の大切なひとつの領域であることを理解させることがあろう。人間の生活には、自分の私的、個人的生活を満足する欲求があり、また、地域やその他、生活の環境上の諸条件を住民として、あるいは市民として改善するのに関与していると感じることができるとともに、生産の面でも、生活手段を手に入れる方便だけでなく、人間として人間の生活に必要な一端をになつて、そこにひとつの役を果して自分の存在価値を見つけているということも生きていく張りあいを感じるひとつであらう。

次に、生産的関係において、自分の存在価値を発見し、またたしかめていける方法も理解させなければならないであらう。生産関係における役割からきり離して、自分の閉鎖的独善的満足にひたってしまう結果、自分の人間としての本質まで疑われてしまうのでなく、自分が価値を感じて手をかけ、しかも成果を客観的に評価されるように果すには、組織的生産の活動のなかで自分をなげかけていこうと関心をもっていることがらやその方向を明確にすることと、そこに生かしていく自分の特質を理解すること、そして、それらのいかしかたや、そのための資質のたくわえ方準備の進め方、あるいはあらわし方を考えさせる必要があらう。志望とその可能性、組織と自己との間には裂目を感じさせるものはあろう。しかし無力感も感じさせるこの裂目も、人間としての自分の可能的価値を自発的になげかけて方法を追求するスポイルされない立場でみつめていくこともたいせつであらう。

職務や職責を組織的に分担し、分担する役割も高度な知識や技術を伴う専門化の傾向をつよめている。これを理解して、もし人間が圧倒されスポイルされるなら、人間の福祉にどんな結果を招くかを考えながら、むしろ託されようとしている福祉の危機に対する組織化専門化のうけ入れ方をあきらかに

する必要があるのであろう。

《指導内容の具体的展開》 1. 人間的生活と労働について。自己との対面が、いっそうはっきりしてくる高校生の特に2年の発達段階では、さまざまな自己の欲望にまどわされて、自分自身そのしほり方に困っているであろうから、役割を組織的に分担し、しかも所定の効果をあげる計画的活動である労働は、強制的束縛であるとしか映らないかもしれない。しかし労働につくことは、自己をスポイルすること以外のものではないと考えるならもっと恐ろしい結果を招くであろう。働らく以外のところに自己があり、働らくところには自己を殺したロボットしかないとするなら、労働をすればするほど福祉を破壊するか、個人的な利益を満足させる単なる手段になりさがることを気づかせる必要がある。その意味で、さまざまな職務や職責について知識をもち、正しい理解をもって、人間生活にかかわる役割の重さを感じさせ、自分としてこれらにどうかかわるかを啓発させる必要がある。そこから労働が、人間を単なる猿から区別する創造的活動であることを理解させていくようにはかっていく必要がある。

2. 各自の担当するさまざまな役割の価値。ひとりびとりの分担する役割は、きわめて微々たるものであり、まして、自分の存在価値、自分の名譽をかけた価値のある抱負にくらべたら、さしあたって受けもつ役割はささやかなものとしか考えることができないであろう。しかし現代の役割を分担して福祉の創造に關与している生産活動の体系においては、その福祉は、だれかれの私的福祉にとどまるものではなく、われわれ多くの人々の一体の福祉ときりはなすことのできないものであることをみえるように図る必要があるであろう。ひとつひとつの役割はやはり大きな信頼關係の一環にあるのであって、役割をないがしろにできない影響を考えるなら、ひとつとしておろそかにできないものであることがわかる。ひとりひとりの人間性、良識に美しい幻想的期待をよせた時代ならともかく、おたがいの間に大きな裂目、分裂があることをかくせない現代においては、福祉の危機の根元をさぐって、一体でなければならぬ福祉と、それを創造する役割の連帯を追求しなければ

ならない。役割の重大さは、それを軽視したときに災いとしてあらわれるさまざまなことから、公害などをみればあきらかであろう。さまざまな役割でわれわれの生産的活動は構成されているが、それらをちくじ見ていくことによりあきらかにしていこう。

3. われわれはどのように自分の役割を発見するか。われわれの活動の効果、成果は、信頼感をもたれるとか、人間的なある価値を発見され期待をかけられる、あるいは地位、役割を信任されるとかなど処遇をうけるという具体的なかたちをとるところまで評価されることになる。しかしどんな信頼関係、信任関係が生まれるか、どんな価値を発見されているか、成果を評価するものさしはさまざまである。意図的な特定の目的や目標からみられた効果もあるし、暗黙のうちに直観されて反射的に求め、あるいは避けている効果もある。あるいは意識のうで気づかれていない効果もある。したがって、効果といっても、その正体を見きわめないで漠然とみていることも、固定した紋切りがたな判断でみていることもできないのである。まして本質的な価値をきりはなした当座の表面的な処遇を満足させる評価であってもよくないであろう。これらを考えると既製の固定的な目でなく、猿から区別されていく人間の本质をなげかけた創造的效果につながっていくことを考えなくてはならないことを気づかせる必要がある。自己の本質的価値をかけた創造的生産の関係がなんであるのか、自己において、世のなかを明るくし色あいをもたせるのには、どんなはたらきがあるかがあきらかにされ、そこから自分が手がけようとする役割が考えられていくのがよいと考える。

ある方向にみちを選んでいくばあい、それに伴ってさまざまな利害と対面しなければならぬが、この時考えなければならぬことは、自分の生活のひとつの分野として生産活動をみて、それが自分の意欲をかける対象であり自分のもつ一部でなく、もっているいろいろなものがひき出される対象であるとみるならば、やはり自分の意欲をできるだけ殺さないし自分のもっているものができるだけ生かされていく対象でなければならぬだろうということ、対象に対する理解と自己理解および必要な資質を培っていく可能性の

理解の啓発とあわせて理解させていく必要がある。こうしてともかく、自分の意欲と“RESPONSE”の自負心をかけた自己のみちの端緒をつかませて、生きがいを見つけるきっかけを作ることが図られなければならないだろう。

4. 自己探究の関心と自己開発の習慣化の動機づけ。すぐに「自己のみち」にめぐりあえるものでもなく、ましてすぐ簡単にできるものでもない。そこに「あたり」をつけて自己を探す遍歴と、入ろうとするみちと手がける役割をよりリアルに理解して自己を養いたくわえる習慣とが必要になってくる理由がある。自己をきりはなして貧弱にしスポイルする方法でなく、自分の意欲をかける方向をみつけて自己を養い育て、そして納得できるように自己をいかす道を掘りおこしていく方法にであわせる必要がある。

5. 生産関係のさまざまな実体を知らせること。生産関係のさまざまについては、「政治、経済」の扱う領域もあるので、手におえる範囲があるから、内容を精選・集約する必要があるが、技術革新、組織の合理化や巨大化などにスポイルされないで、むしろとりこみ方を考え福祉に役だてていく人間性を強める必要性を理解する学習と、そこから関心あるいは自己課題を発見して人間性を養う意欲が生まれてくる学習としなければならないだろう。

《設問とそのねらい》1. 生産関係、職場の人間関係を自己をあらわすひとつの場として見られるようになったか。2. 自分の心の向っている方向、志望や意欲の向っている対象を探り、自分をできるだけ生かしていける対象を発見する考えで職業、職責を考えることができるか。3. 与えられた職務に忠実であるだけでなく、そこに信託されている課題を考えて職務を改善していく価値を感じ、自分で手がける何かがかくれていることに気づいたか。

4. 職務を改善していくには、創意心と改善点を見つけ種々の条件をとりこんで打開策を合理的にみつけて他の人をも納得させていく批判力、推理力、判断力、説得力などが必要であり、さらに協力者の力をできるだけ生かしていくための調整力などが必要であるが、そのための人間的資質をどのようにたくわえていくか心の用意ができているか。5. 生かすべき自分の人間的本体に関心をもち、生かし方を考えて自己形成計画をたて始めたか。

7. 地 域 ー新しいコミュニティー

都立忍岡高等学校 伊 藤 駿二郎

《重点的ねらい》 人間は個人として存在すると同時に、近隣や市町村などの地方自治体に住む多くの人々とのかかわりの中で生活している。新しい指導要領では「現代社会と人間関係」の学習について、特に地域社会の学習を例示していないが、この単元について十分な学習効果をあげるためには、生徒にとって具体的な生活の場である地域社会の学習は、家族についての学習とともに欠くことができない。

しかし、地域社会の学習といっても、村落や都市の一般的特質について学ぶといったように、地域社会を固定的、平面的にとらえるのではなく、わが国の経済社会の発展に伴って、村落や都市がどのように変質し、またその中で人間関係がどのように変化してきたかを動的にとらえさせることが必要である。地域社会の現実を具体的に分析することによって、地域社会のもつ今日の問題点を把握させたい。そして、その中から真に民主的な地域社会（コミュニティー）とは何かを模索させ、その形成に積極的に参加する態度を養いたい。

《指導内容の具体的展開》 人間は、一定の地域に住み共同生活をすることによって、共通の生活様式をつくりだし、他の地域に住む人たちとは異った特徴をもつようになる。このような場合、その人たちの集団を地域社会と呼んでいる。村落と都市は、ふたつの典型的な地域社会である。村落と都市は家族とともに、集団としてもっとも基礎的なものであり 人間のパーソナリティーの形成においても、社会生活のしかたにおいても密接な関係をもっている。

地域社会としての村落と都市は、相互に比較できる対象的な特徴を備えている。村落は主に農・林・漁業などの第一次産業に従事する人々から構成されている地域社会であり、移動のない固定した生活共同体として、閉鎖的、

停滯的傾向をもった社会^②である。そこでは人々は生産活動から冠婚葬祭に至るまで、相互に助け合うなど強い連帯意識によって結びつけられている。また都市は、第一次産業以外の従事者によってその大部分が構成されている地域社会であり、人口の移動が激しく、開放的・流動的な社会である。したがって都市では、人間関係の上でも個人主義的色彩が濃く、そこから独立した人格をお互いに尊重し合い、むやみに私生活に干渉しないという長所が生ずるが、他面、連帯感や相互扶助の意識が薄く、利己主義に陥るといふ欠点も指摘される。^③

以上のように村落と都市には、地域社会としてそれぞれ異った特徴がみられるが、戦後の農地改革をはじめとする民主的諸改革は、地域社会とりわけ村落の社会構造および人間関係を大幅に変化させる結果となった。加えて近年における日本経済の急速な成長は、産業構造の変化および地域構造の変化を通じて生活の場に対しても重大な影響を与え、これを激しく変化させつつある。その変化の一つに地域共同体の崩壊ともいふべき現象がある。わが国では従来から、その名称はいろいろであるが、「部落会」や「町内会」などと呼ばれる地域組織が全国的に存在していた。これらの地域組織は地域住民の親睦、相互扶助といった自治機能とともに行政の末端組織ないしは下請機関としての機能をあわせもつものであった。しかし、近年このような拘束的な地域共同体に対する離脱や無関心が増大し、その結果、地域共同体は次第にその機能を喪失してきた。このような地域共同体崩壊の要因としては、つぎのような事柄をあげることができる。

- ① 交通・通信網の発達とモータリゼーションの進展による生活圏の拡大—地域共同体に対する人々の依存度を実態的にも心理的にも軽減した。
- ② 人口の都市集中—都市では地域生活に無関心の度合いの強い若年雇用者層の大量流入、村落では若年層の流出により、ともに地域共同体の機能が弱まり、あるいは維持が困難となった。
- ③ 生活様式および生活意識の都市化—経済の高度成長、所得水準の上昇、消費水準の向上などが進展するとともに、中流階層意識が広まり、個人中心

的、合理的生活意識が侵透してきた。

- ④ 機能集団の増大—従来地域共同体の果たしていたスポーツ、旅行、趣味、教養などの機能が諸種の機能集団に分化し、地域共同体の存在価値を相対的に低下させた。
- ⑤ 家族制度の変革—個人は家から解放され、家を通じて全人格的に結びついていた地域共同体に対する意識を変化させた。
- ⑥ 農村における生産構造の変化—農地改革により地主・小作人の身分関係がなくなり、最近では非農家や出稼農家が増加し、農業生産そのものが住民の共通目標ではなくなった。

このように、従来の地域共同体が崩壊していくこと自体決して悪い傾向ではない。地域共同体の崩壊は、住民にとっては古い束縛からの解放であり、地域共同体の中に埋没されていた人間性の回復を意味するものでもある。しかし、今日マイホーム主義という言葉に象徴されるような他人にわずらわされない生活にそれ自体としての価値があるとしても、われわれの生活の中には、地域の人々との交流や相互扶助、環境施設の整備など、人々の協力と信頼の上に展開される生活の領域が存在することは否定できない。今日最も問題なのは、古い地域共同体の崩壊のあとに、真に自由で民主的な市民の協力と相互信頼に基く地域集団=新しいコミュニティが成立していないことである。地域共同体の崩壊の中で、個人は拘束性から解放されると同時に、深い孤立感におちいり、個人では解決できない問題についての不満感や無力感に悩まされている。その他、このようなコミュニティの不在が青少年の非行化、犯罪の増加、老人問題、公害問題などさまざまな社会問題の要因となっている。現代社会の中で如何にして新しいコミュニティを形成し、その中で如何にして人間性を回復していくかは今後に残された問題であろう。

〈設問とそのねらい〉

設問1 下線④の村落・都市・家族について、それぞれの共通点と相違点を整理してみよ。

(ねらい) 三つの社会集団を比較させることによって、血縁、地縁の関係を

理解させ、基礎的社会集団の概念をつかませる。

設問2 下線②の閉鎖的、停滞的社会とは具体的にどのような社会であろうか。父母などが農村の出身であれば、戦前の村落社会のしくみなどについて話しを聞いてみよう。

(ねらい) 戦前の村落社会の構造について理解することによって、都市社会の特質や、戦後における村落社会の変化について理解を深めたい。

設問3 下線③にみられる都市社会の人間関係のもつマイナス面について、日常生活の中から具体的事例を指摘し、その原因を考えてみよう。

(ねらい) 日常生活の中から、都市生活のもつ問題点について気付かせ、それらを解決するためには、新しいコミュニティの形成が必要であることを痛感させたい。

設問4 下線④の新しいコミュニティとはどのような性格と機能をもった集団でなければならないか。また、その中ではどのような問題をどのように解決していかなければならないかを考えてみよう。

(ねらい) 現代の日本では、新しいコミュニティはまだ萌芽的にしか形成されていない。古い地域共同体に対する反発から背をむける人々もいる。このような中で、自由で民主的な市民によるコミュニティに対する展望をもたせたい。

《発展的まとめ》 この項目は「社会集団と人間関係」の一部として位置づけられる部分であるが、「現代社会の特質」における学習との関連が十分に考えられなければならない。特に、最近における地域社会の変貌を理解する場合、単に社会学的な側面からだけでなく、社会経済的あるいは政治的な観点からも理解する必要がある。そこから、政治・経済、日本史など社会科学の他科目への学習の発展を期待されようし、「現代社会における人間関係」の学習もいっそう豊かになり、総合的になるであろう。そして、そこにこそ、「倫社」での学習が社会的な実践と結びつく契機が存在するであろう。

8. 人間形成の条件 —パーソナリティの形成—

都立城北高等学校 松崎千秋

《重点的ねらい》 人間形成というのは実に大きなテーマで、いろいろな立場からアプローチできる。文学作品を使ったり、先哲の生涯からその精神の軌跡を追うことでも学べる。ここではどういう人間が人格的に良いのかという見方ではなく、矛盾だらけの自分に悩む青年期に、個性をもった一人一人の人間を独自の存在として価値の上下を離れて客観的に分析してみることは自他を理解し更に発展していくためにも充分意義があると思われるので、心理学的に自己認識を深める、ということに重点をおきたい。紙面の都合上、パーソナリティ形成の条件についてしかふれていないが、欲求と行動に関する心理的メカニズムも基本的な問題としてははずせない部門であると思う。

《指導内容の具体的展開》

1. パーソナリティ 青年期に入って、今までとはちがった目で自己をみつめるようになると、自分の性格のさまざまな面ににわかに意識されてくることがあるだろう。ときには現状の自分に全面的に不満でたたきつぶしたい衝動にかられることもあるし、すぐれた人に接して憧れとともに自分もあのようになろうと自らを励ますこともある。人には各々独特な行動の仕方や思考傾向があって、それをパーソナリティとよんでいる。性格といってもよいが、区別するとすれば、性格は感情的、意思的特性が他の人とどのようにちがうかを強調して使われることが多いのに対し、パーソナリティは、もう少し大きな見方で、文化的に共通な面も含んださまざまな要素が組み合わされた、全体として統一されたその人らしさといえる。

2. パーソナリティ形成の要因 はじめに、もし人が人間社会から全く孤立して育ったらどうなるか、ということから考えてみよう。1920年、インドで狼といっしょにいた二人の女の子が発見された。推定7～8才だった年上の方はその後10年近く生きたが、発見当時彼女は四つ足で歩き、昼は

眠り夜起き出て遠吠えし、生肉や腐肉を好み、手は使わず口を用いる。など狼の習性がみられた。言語は全くなくて、二～三のことは言えるようになるまで5年もかかったという。フランスで1800年頃発見された野生児の場合も、四つ足で歩く、言語の欠如、その後どのように教育しても一人前の社会人にはなりえなかった点は共通である。この例から次のことがいえよう。第一に、人は人(社会)によって人になるということ①、第二に教育に適した時期を失ってからの教育はほとんど進歩が望めないということである。他の動物は一般にかなり完成した形で生まれ、後天的に形成される面は少ないが、人間の場合は、その人間らしい成熟からみると、はるかにへだたった未完成な状態で生まれてくる。野生児の例でみるように、人間にとっては生後の育成条件が大きな意味をもつのである。

パーソナリティには何層かの厚みがあって、生涯を通して比較的変わりにくい深層に気質といわれる部分がある。敏感、社交的、短気、きちょうめんなどといった感情的特性のことで、先天的、遺伝的な要素の強いものである。^②
気質を基礎として、後天的な条件が加わりながらパーソナリティがつくられていくわけであるが、今度はそのことについてみていこう。

おのおのの社会には異った文化が存在する。日本とアメリカのちがい、また日本でも封建時代と現代ではちがいがあるように。社会、文化によって形成された個人の性格を社会的性格とよぼう。生まれて最初に接する家庭という社会環境の中で子供は親に保護されながら、ほめられたり叱られたりくり返しを経て、その社会の伝統的な行動の仕方や価値意識を身につけていく。他の国へ旅行すると、国民性のちがいをしみじみ感ずるというのも自分自身のなかの社会的性格と比較するからであるし③、男らしさや女らしさの基準も社会によってちがいがあるのは、それが生理的な条件によるものだけではないことを示している。その人の生きた時代が、パーソナリティに与える影響もみのがせない。④

さて、同じ文化環境でも、先にみたような生来の素質以外に、幼児期の親子関係や、社会での立場のちがいなども、多様なパーソナリティをつくる条

件となっている。たとえば甘やかされた子は身勝手に攻撃的、反抗的になりやすいことか、かまわれすぎた子は依頼心が強く、幼児的で自己中心、思いやりがなくなる、というような躰け方のちがいによるものや、一人っ子とか次男とかの兄弟順によるちがいなどは、世間でよく語られるところである。立場によるものでは、職業によってつちかわれていく性格がある。職人かたぎとかつていわれたものもそれであろう。役割性格ともいわれている。

3. 自我とパーソナリティ。生来のものと環境との相互のかかわりのなかからパーソナリティが形成されていくことをみてきたが、今度は自我の意識とのかかわりについて考えよう。人間は社会によってつくられるのだといっても、全く受け身につくられていくわけではない。文化には伝達と創造があるように、個人は社会の影響をうけながらも独立した主体性をもつ存在である。むしろ自我にめざめてのちは、その人がその生活においてどのような考え方、行動の仕方を最もすぐれたものとして評価し、選びとるか、の自覚が性格形成上の中核となるのである。たとえば、身体的欠陥があっても、それを非常に気に病み、自己の内部で常に大きな比重を占めている場合と、そのようなものを超えたところに価値を見出す場合とでは、その身体的条件がその人のパーソナリティに与える影響はちがってくる。環境的条件についても同じようなことがいえるだろう。パーソナリティは不変ではない。生涯にわたって変化していくものであるし、意志の力である程度変えうるものである。

そして人間には限りない自己実現の欲求がある。タグ・ハマースホルドの日記に次のような文がある。「(1956年、8月26日)、不安、不安、不安、なぜならば — 創造する可能性を、したがってそうする義務を有する立場にありながら、おまえはその日その日、一瞬一瞬の要求に応ずるだけで甘んじているからである。」できうる限りの心身の可能性を実現すべく、生涯にわたって努めていくなかに真のパーソナリティの形成がある。自己の現状について悩みながら客観的にみつめ直すなかに解決のいとぐちがあり、不安や迷いのなかに新しい自分をつくろうとする心がひそんでいる。

〈設問とそのねらい〉

設問1. 下線① 「人は人によって人になる」というのは具体的にどうい
面でそういえるのか。野生児の例から考えてみよ。またこの文には人とい
う言葉が三回使われているが各々どのように意味が異なるか指摘せよ。

(ねらい) 人間にとって後天的に獲得する部分がいかに重要であるかにつ
いて考えさせる。また人という言葉の多様な使い方から生物としての人の
複雑なあり方に思い至らせる。

設問2. 下線② クレッチマーの説など、気質の類型研究をいくつか調べて
みよ。(ねらい) いくらか専門的な心理学書を読む機会を与えたい。関心
は高いので読みこなせるし自主的学習を進めるきっかけにもなるだろう。

設問3. 下線③ イ、民族による行動基準のちがいを具体例で考えてみよ。
ロ、自分のなかの「日本人」を具体的に指摘してみよう。(ねらい) 抽象
化された文を現実^ニに即して考えさせる。また自己のうちの無意識な面をほ
り起こして客観的にとらえる目をつくる試みとしたい。

設問4. 下線④ 現代社会の特質のところをよく読んで、現代社会がどんな
パーソナリティ・タイプを要求し、また生み出しているか、考えてみよ。
(ねらい) これはやゝ難しいかもしれないが、大切なところである。充分
に考えさせ、また解説を加えてやる必要があるだろう。

設問5. 下線⑤ シュブラングーの価値領域の分類について調べてみよ。
(ねらい) この文を更にほり下げて、自己形成の参考にさせたい。ただ、
周囲の一般的な評価の仕方や社会通念も、その人の価値観や自己観に及ぼ
す影響が少なくないことも注意しておきたい。

《発展的まとめ》 パーソナリティ形成も、究極的には個人の主体性と責任
に帰することを確認し、そこから次の青年期の諸特徴、現代と青年の課題の
テーマにつなげたい。また、人間形成は体の発達のようにはなめらかにいく
ものではない。むしろさまざまな出来事や人との出会いによるものが大きい。
出来事や時代との関連では、世代論にもふれたい。出会いの点では、人生
観、世界観の章で、さまざまな思想と思想家にふれることの意義にもつな
がっていこう。

9. 学 校 — その人間関係 —

都立葛飾野高等学校 木村正雄

《亘点的ねらい》 最近、特に学校とは、教師とは何かという問題がだされこれらについていろいろと意見がかわされている。生徒の一番身近かな問題が不明確のままにされているのは現実の学校生活に対する一つの警鐘として受けとめてよいのではないかと思う。学校とか授業とか教師とかいうものの本質を追求していくことは大切だし、それらについて疑問をもち、問いかけ^{vv}ていくこともまた、大切だと思う。

さて、そこで、学校という集団を構造的、機能的に考察し、学校集団の特性を把握していさいたいと思う。このような構造や機能の分析の中から自ら価値の問題にめざめ、自分がおかれている高校生としてどんな課題があるかを気づかせ、その課題に積極的にとりくむ姿勢を養いたいと思う。また、異性との交際についてもふれてみたい。性の解放がやゝもすると誤ってうけとられ、性教育が不十分な現在ではますます性の商品化におどらされ、真の性の解放、男女の交際が確立しにくい。そこで、男女交際の根本的なものについて考えさせることも大切だと思う。その他、H.R.クラブ活動、友人関係などについても考えられるが、ここでは省略したい。

《指導内容の具体的展開》 学校はいうまでもなく教育機関であり、教育とはなんらかの意味において未成熟と考えられる人間に対して行なわれる意識的計画的な社会形成をなすもので、学校は人間に社会的形成を加える目的をもってつくられた機関である。すなわち、学校の機能は周囲の世界に対してアジャストするに必要な道具、技術、知識を生徒に伝えることであり、さらに集団がその生存にとって重要と信ずる社会的ならびに道徳的基準を伝えるという二重性をもっている。また、シンメル^①は「教育は不完全なのが普通である。そのそれぞれの働きによって二つの対立する傾向、すなわち、解放と束縛とに仕えねばならぬからである。」と、これは束縛が習慣への束縛^②であ

るのに対し、解放は習慣からの解放であると考えられる。

教育は一方においては人間を社会的につくるとともに、他方においては社会を人間的につくっていくことを機能とするものであり、教育における二つの側面の矛盾は古い社会と新しい社会との対立としてあらわれざるを得ない。教育は、この二側面をよく生かし、かつ調和させることによつてのみ教育としての機能を果たすことができるからである。

学校集団の特質としては、同一学級の成員間に水平的関係が実現されると同時に、教師と生徒の間には垂直的關係が維持されることによつて二つの関係は一つに総合されること、教師が生徒に示すところの愛情は両親の愛情とは異なり強固なる公的秩序^④であること、また、この集団は通過集団であり、各人は時間的に区画し一定の規律をもつて過ごしていかなければならないし、遊戯と生活との区別を知り、さらに、高校生になるにつれ古い習慣から解放するという意味が強くなり、教育者との協力を通じて学問の進歩をはかろうとする。教育者と被教育者との間には常に、一方的な関係でなく相互的な協力の関係が生まれてこなくてはならない。これは双方の側において、何ほどかの信頼と善意なくしては成立しうるものではない。このような特性を本質的にもつ社会関係の上にてできている学校は、情義的な関係がそこに形成されるあらゆる社会関係を特色づけ、人間的な雰囲気^⑤をそこに形成する。

すなわち、教師と生徒の関係は、両者に学習要求を満足させるために相互依存関係にあることが必要である。高校生になると、教師の絶対的な権威はくずれ、その命令に違反し、これを批判し反抗的態度があらわれてくる。しかし、一方では、権威の崩壊によつて不安、動揺を覚え、どこかによりどころを得ようとして、倫理的內面的個性的指導者としての教師を求め、これに対して非常な親和的傾倒的態度を示す。教師への反抗も実は、よき指導者を求めようとする要求の反面である。つまり、よき指導者への要求が強まり、人間性のめざめ、人格的なものへの要求と相まって、教師に対する態度も反抗¹と信頼の両極端にわかれる。しかし、結局、教師と生徒との間には、相互の信頼と愛がなければ成立しない。そのためには、両者の間に人格的な交わり^⑥

が必要であり、そこには、指導者と被指導者のきびしい関係もあることを忘れてはならない。今日のようにマスコミが発達すると、知識や技術は学校ばかりでなく、あらゆる機関からとりいれられるけれども、師弟間の信頼と愛は学校集団の中で生まれるものである。

異性との交際については、高校生ごろから、身体的合一をめざす性衝動が旺盛であるが、それらが昇華されたものが恋愛であり、より価値の高いものを求めようとするところに発生する。恋愛は男女間の存在共同における愛であり、真に一体感で貫ぬかれたものであるが、身体的愛としては永続きするものではなく、真に緊迫関係の持続を保証するもの^⑦は相互の信のみであり、相互の人格的信頼によって成立つものである。

このような考えから、健全な異性関係は相互理解でなければならず、男女の平等性にもとづいた人格的結合としての性関係であること、高校生の段階では、男女が合意の上^⑧でも性的満足だけを得ることは、社会学的、心理学的要素への関心をうばい、その正常な発達を障害する傾向をもつものである。男女の交際（性愛）はあくまで人間性尊重のもとに長い間の苦悩の過程を通じて築きあげるべきで、一時的な肉体的満足よりも、人間的結びつきの満足の方が優先し、より深いものである。また、時、場所、場合なども考え、他の人達との関係を無視して行なうべきものではない。これは、人間の社会的存在としても当然なことである。今日の性の商品化による性の墮落を排して、真の性の解放につとめなければならない。

《設問とそのねらい》

設問1. 下線①社会的及び道徳的基準を伝えることの、この基準はなぜ必要なのか、また、なんによってきまると思うか。

（ねらい） 学校集団の機能が地域社会など他の集団とのかかわりあい強いことを明確にさせる。

設問2. 下線②解放と束縛とは、具体的にどのようなことをさしているのか二つの面からのべよ。

（ねらい） 学校や教育の機能が消極的な意味をもつものでなく、積極的

な意味ももっていることに気づかせたい。

設問 3. 下線③ 水平的及び垂直的關係とは何か。これと同じような人間關係がこのなかにどのような集團にみられるか。

(ねらい) 学校集團の構造の特色について理解させたい。

設問 4. 下線④ 教師の愛情と親の愛情の愛情がなぜ異なるか、家族集團と学校集團の相違から考えよ。

(ねらい) 教師と親の愛情が異なることを理解させ、両者の愛情がそれぞれ大切な機能を果していることに気づかせる。

設問 5. 下線⑤ 情義的な關係は、学校以外にどんなところにみられるか。

(ねらい) 人間にはフォーマルなものだけでなく、インフォーマルなものも必要であることに気づかせる。しかし、タテ社会的な意味でとらえない。

設問 6. 下線⑥ 人格的交わりの具体的事例をあげよ。

(ねらい) 教師と生徒の断絶をなくす具体的な方途について考えさせる。

設問 7. 下線⑦ 身体的愛とはどういう意味か、本当に永続しないものか。

(ねらい) 恋愛は人格を高めることに価値があることを認識させる。

設問 8. 下線⑧ 人格的結合としての性關係とは何か。

(ねらい) 眞の性の解放とは何かを話し合い、考えを深めさせたい。

《発展的まとめ》 学校集團の特質や機能、構造は、家族、職域及び地域社会と共にとりあげるのも一方法であるが、ここではあえて青年の課題としてとりあげてみた。それは単に、集團の機能や構造を平板に理解させることをさげ、現実の学校集團でどう生きたらよいのか、どう考え、どのような行動をとるべきなのか、いわば実践的課題としてより深く考えさせていく。生徒と教師という人間關係の中で眞の愛情と信頼をうちたてるにはどうあるべきなのか、また、男女交際や性についても HR や他教科とは別の形で、より価値の高いものを追求していく、いわば原理的追求をめざしていくべきものである。社会的存在としての自己が、集團に与える影響と集團からうける恩恵とを常に実践的課題として自覚するようにしたい。これを科学的認識からさらに、倫理的哲学的思索へ橋わたしをする一つの課題として位置づけたい。

10. 現代の課題

都立赤城台高等学校 御厨 良一

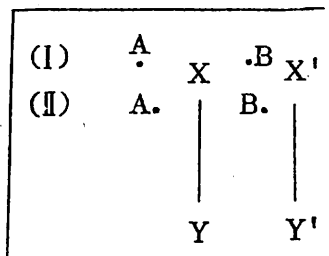
〈重点的ねらい〉 今回の新指導要領の改訂において、「現代と人間」が「人生観、世界観」の導入的な位置をしめていることは、あらためて指摘するまでもなからう。そして、この「現代の課題」はこれまでとかれて来た「現代と人間」の総まとめであるとともに、直接に「人生観、世界観」の項への橋わたしの位置をしめるものである。すでに、「人間形成と青年期」の項目あたりから、単なる事実 (sein) の説明にとどまらず、次第に青年期に何を身につけるべきか、というsollenの要素がかなり表面にとりあげられてきてはいるが、この項目で3の課題をまとめ、「人生観・世界観」において学ぶべき課題を生徒に自覚させるよう、指導していく。

世は情報化時代という。紀元元年に人類のもっていた情報(知識)の量を1とすれば、それが2になったのは1850年前後、4になったのは20世紀初頭、その2倍の8になったのが1950年頃、そして、10年後の1960年にはすでに16にまで増大したという。とすれば1971年の現代は、32倍どころか、50・60倍になっていると考えられる。このように増大していく情報の量の中にあって価値観の変動も激しいものがある。3・4年前からの青年・学生の造反の一原因は、社会の急激な変動にともなう価値観の変化、そして、この中でどこに生きがいを見い出していくかという不安にこそ求められるべきであろう。

客観的な価値観の樹立の必要性を自覚させることに、この項目の主眼点において、指導していく。

〈指導内容の具体的展開〉

(I) 図をみて、「点A・Bはどちら側にあるか」という問いには、正確に答えられない。なぜか。それは基準がしめされないからである。(II) 図においてははっきり答えることが出来るが、XYに



基準をおいた場合と、 X^1Y に基準をおいた場合では、答えが違ってくる。 XY の場合にはAは左、Bは右側である。 X^1Y の場合にはA・Bともに左側である。これを現実問題に移そう。戦争はいっさい悪であるとする立場もあれば、ある戦争（解放戦争）は認め、ある戦争（侵略戦争）は否定する立場もある。さらには戦いは人間の本能であるし、生存競争のためには必要悪であり、場合によっては戦争によってはじめて科学も発達すると、全面的に肯定する者もいる。それぞれ基準のおき方の違いから生ずる考え方の相違であろう。さらに、身近かな生徒自身の問題に移して考えてみよう。親や先生や友人を批判する基準と、自分自身を反省する基準に違いはないか、自分には甘く他人には厳しい基準で接するという首尾一環しない態度を、とることはないか。

このように価値観とは、Aを右といい、Bを左とする基準についての考え方、つまり、善悪・美醜・正邪を判断する基準についての考え方である。人間はこの基準に照らして、より良いもの、より美しいもの、より正しいものを、つまりより価値の高いものを求めていくところに「生きがい」や「幸福」をみいだそうとするから、価値観はそのひとの生き方・考え方・心のもち方を根底から支えていくものと言ってよからう。

ところで、価値観を求めようとする模索は、^②青年時代にはじまる。青年時代が第二の誕生といわれるのも、自己の価値観に立脚して、自覚的に人生を歩みはじめようとするからである。心理的離乳とか第二反抗期といわれる青年の心理も、歩みはじめようとする青年の心のトラブルに外ならない。「あせり」「不安」「劣等感」などの心理も、「自主的に価値判断をしたい。しかし、どうもうまくいかない」という心情から発したものと言えよう。だから「教師は弾圧ばかりして、われわれの自由を認めない」という反抗的^③な生徒の、その同じ口から「教師は教師らしく毅然たる態度をもって指導すべきだ」という声がかんてくるのである。

自己の人生観の根底ともなる価値観を確立することは容易ではない。われわれは第一にこれらの心の悩みと戦わねばならない。さらに、世は情報化社

会といわれるように、さまざまな情報がわれわれの周辺には洪水のように渦巻いている。その中から、われわれは自分に必要な情報を選択し、整理し、新しいものを形成していかねばならない。そのうえ、社会は、父母の時代よりもはるかに急スピードで転回している。この状況の中で、価値観を樹立することは至難の業と言う外はない。しかし、われわれを力づけるものがある。それは、われわれの周辺に、ひたすら音楽・演劇・絵画の道にいそむ友人がいることである。教会や寺院、はては坐禅という宗教的修業にうちこむ友人、文学や哲学の本を読んで、口角泡を飛ばして激論する友人、激しいスポーツに自己を忘れてうちこむ友人——彼らはその実践を通して、自らのうちに価値観を樹立しようと強い意欲をもつ人びとである。そして、自分自身の中にも、それらをみながら、負けるものかという衝動を感じることでもあるはずである。ゲーテはいう—「人間は努めている間は迷うものだ」「絶えず努めて倦まざる者を、われらは救うことができる」と。

ところで、価値観について、民主主義の立場から絶対に忘れてはならないことがある。それは、価値観にはいろいろの立場があつて、そのいずれも絶対に正しく、また、絶対に間違っているものはないということである。幾分の真理と幾分の誤りを含むゆえに、討論の可能性があり、そして、このよう⁽⁴⁾な余裕のある態度が同時に人格の尊重にも通ずるのである。ファシズムとか全体主義という立場は、おのれの価値観こそ正しく、他のすべての価値観は誤りであり、それはいかなる手段を用いても打倒すべきものであるとする。このような考え方は民主主義とは相容れないものであり、民主主義そのものを崩壊さすものである。

われわれは、この点を充分心にとどめたいうで、より正しい、より豊かで合理的な価値観をきついでいかねばならない。そして、そのためには、先哲がどのような価値観を展開しているかを知る必要がある。次々にあらわれ、そして、次々に消えていったいろいろの価値観を、まずは自分のものとしよう。そして、その中から自分自身の価値観をきついでいくことにしよう。いそいではいけないのである。

…〈設問とそのねらい〉

設問 1. 価値観とは何か。

(ねらい) 価値ということばは日常つかいなれたものであるが、価値観というと、なかなか生徒は理解しない。ここにあげた具体的な問題の外にも幸福などをとりあげ、真の理解に導きたい。

設問 2. 価値観を樹立することがなぜ大切なのか。

(ねらい) 人生観・世界観のうえでの、価値観の位置づけをはっきりさせ、次の編への導入としていきたい。

設問 3. 価値観を求めようとする場合や、青年の心の中にどのような徴候があらわれてくるか。

(ねらい) 青年心理を解説的に、箇条書き風に書いても効果はうすい。価値観の樹立という点から、もういち度青年の心理を反省させる。

設問 9. 民主主義の価値観の基本原則はなにか。

(ねらい) 相対的価値観の立場にたつ民主主義の基本原則を、はっきりと理解させるとともに、反対意見を暴力によって打倒しようとする立場は、左右のいずれを問わず否定されるべきことを理解させる。

〈発展的まとめ〉

すでにのべたように、この節は「人生観・世界観」への直接の導入部分である。「人生観・世界観」の主要目的は、生徒の主体的な客観性をもつ価値観の育成にあることは言うまでもない。そのような意味で、青年期の精神的葛藤も不安も、この節で価値観という観点からまとめ、価値観を確立することがいかに大切か、また、そのことはいかに難しいものであり、軽々しくできるものでないということ、を自覚させ、価値観樹立へのモチベーションを与える。

第2分科会 思想の源流

1. ギリシアにおける思想のめばえ —ものの考え方の基本的問題中心—
—テオリア・フィロソフィアを中心に—

日本大学第二高等学校 小笠原悦郎

〈重点的ねらい〉すでに「現代と人間」の学習はおわり、いよいよ「人生観・世界観」の学習にはいるわけである。この部分は、そうしたつなぎ・はしわたしの役目をおっているのだから、“これから思想を学ぶのだ”といった気おいはきんもつであろう。むしろ導入として、できるだけやさしく、問題点を指適し、心がまえができればよいと思う。思想のめばえはどのようなところにみられるのか、思索するとはどのようなことであるのか、哲学を学び倫理を求める意義はどこにあるのか、などといった点について、気づかせ、さらに理解を深めるようにしむけることができれば、それでよしとなければなるまい。

できれば、この部分においては、さらに学習するギリシア思想の序曲となり、さらには、西洋人のものの考え方・認識のし方の特色といったものがだせればよいと思うのだが、言うは易く、行なうは難しであろう。

〈指導内容の具体的展開〉「朝は4本足で、昼は2本足となり、夕方になると3本足となる動物はなにか」、これは有名な「スフィンクスのなぞ」といわれるものである。とおくギリシアの昔から、人間とはなんであるのか、という問いに答えるために、さまざまな人たちがそれぞれ答えを求めてあゆみつづけたもの、それが人間の歴史ではなかつたろうか。

人間にとって人間ほどわからないものはない。人間にとって人間は未知なる存在である。わたくしたちの出生は、わたくしたちの関与すべからざるところでなされた。わたくしたちのひとりびとりは、投げこまれた存在である。生まれてくる先きもわからなければ、やがて死んでいく先きもわからない。気がついてみたら生きていたのである。そして、このことだけはたしかであ

る。それは生をうけたものが、いつかは死ぬということである。人間とは、死への存在なのである。

やがて死ぬ、こうした人間の有限性を知るがゆえに、人々は恐れや不安をいだき、「いま」・「ここに」・「このように」生きている自分が、どのような生き方をするべきかが、必然的に問われてくるのである。なんらかの形でわたくしたちを包む世界、宇宙とか自然とか社会、対し、また、人生に対して、なんらかの統一ある見解を求めようになる。このように、わたくしたちが現実^に生活を営んでいる世界全体についての統一的な見解、さらには、人生に対する統一的な見解、つまり、世界観や人生観が、人間らしく生きていくことにふさわしいかどうか、これを考えることが、哲学であるといえる。

このような哲学は、古代ギリシアにおいて、おこった。⁰¹¹当時のギリシア人たちは、気候に恵まれ、明るくおだやかな気候風土のなかで、静かに、ものを見つめながめる閑暇をもっていた。ピタゴラスが語ったと伝えられる話がある。オリンピアの祭りにやってくる人々には大別すると3種類の人たちがいる。まず、もっとも低劣な人たち、これは、祭りに集ってくる人たちを目あてに、ものを売ってもうけようとする人たちである。第2には、競技に参加して、名誉をかちえようとする人たちである。第3には、もっとも高貴な人たちであるとして、競技そのものをみるためにやってくる人たちがいる。というのである。この話からピタゴラスが、人生においてもっとも高貴であるとする人たちは、実利性・実用性をはなれ、純粋にものを見るということではなかったのではないのだろうか。もう1つ、哲学の祖とつたわれるタレスにまつわる話も伝えられている。貧乏なくらしをしているタレスをある男があざけわらった。哲学者などといったってなにもできないではないのか、と。日食を予言するほどの天文の知識をもつタレスは、翌年のオリーブの豊作を予想して、町中のしほり機をかりあつめ、人々が必要になったときに高い値段で貸しておおもうけした。そして、「哲学者だって、その気にさえなれば、いつでも、もうけることができるサ」といったという。

人間が人間であるのは、人間だけのもの理性をはたらかせて、ものごとの真理をとらえることにある。理性をはたらかせるということは、商売そしてひともうけをするとか、土地を測量するためとか、建物をつくるためにというような、なにかの目的のための手段とするためではない。1つ1つの事物をながめ、理性をはたらかせることによって、そこに真理をみいだすのである。真理をみいだすこと自体が目的である。1つ1つの事物のなかにある普遍的・本質的・客観的原理をみいだすために、理性をはたらかせるのである。直接の利害をはなれて、ながめられた事物を超えたところに、普遍的な原理や本質的なものを求める。このような態度はテオーリア(観想⁽²⁾)と呼ばれる。実利をはなれ、真理のために真理を追求するという知ることをずることをフィロソフィア(愛知)といい、これが哲学の語源となっている。このようにしてとらえられた法則がロゴスであったのである。

ロゴスをとらえるために、知を愛するというのは、たんに知ることではなく、自分で自分に納得できるまで追求するということであり、考えに考えぬくことが、その特徴となっている。その考える対象は、すべてであって、哲学とは、いわば哲学することからはじまっているのである。

つぎに先輩たちは哲学をどの(3)ように考えたか、いくつかおもなものをとりあげてみよう。

① 哲学がなんであるかは、だれもがすでになんらか知っている。もし、まったく知らないならば、人は哲学を求めることはしないであろう。ある意味においてすべての人間は哲学者である。いしかえると、哲学は現実の中から生まれる。そしてそこが哲学の元来の出発点であり、哲学は現実から出立するのである。

—三木 清—

② この驚き疑うという心情こそは、まさしく哲学者のものなのだ。すなわちそれ以外に哲学の端緒はないのである。

—プラトニー—

ギリシアにおいては、哲学はまず、宇宙や世界の根源の探求からはじまった。やがて、紀元前5世紀ごろになると、自然の一部として、その中に吸収されていた人間や社会が思索の対象となったのである。思索の対象は、神か

ら自然へ、自然から人間や社会のロゴスへの探求へと転換した。このようなみちびきをした人々をソフィストと呼ぶ。その代表的人物はプロタゴラスであった。やがて、そのなかから、人間の正しい生き方を求め、人々に人間の正しい生き方をはじめて説いたソクラテス⁽⁴⁾があらわれた。

〈設問とねらい〉 設問1、哲学はなぜ古代ギリシアにおこったのか、そのわけを考えてみよう。

(ねらい)、風土的なもの、また、社会的背景といったものに気づかせたい。

設問2、テオリアの特徴をとりあげてみよう。

(ねらい) 哲学する者の態度について気づかせ、人間の本性として真理を求めるところがあるということまで発展して考えさせたい。

設問3、哲学は哲学することからはじまるとはどんなことなのか。

(ねらい) ここで、哲学の対象について考えさせ、哲学における思索の採色をとらえさせたい。

設問4、人間の正しい生き方とは、別の表現をすればどうなるか。

(ねらい) ここで、哲学と倫理の相異点を考えさせたい。

〈発展的まとめ〉 やがて、あとで学習する古代ギリシアの思想、それは、ソクラテス・プラトン・アリストテレスの3人において、ソクラテス1人で代表されるか、この3者を平均に扱うのか、いずれにしても、ギリシアの思想の序曲としての役割をはたし、自然哲学者たちやソフィストたちの思想史的意義へのみちびきとなるはずである。

思索とはどのようなものであり、真理とはどのようなものでなければならぬのか。こうした点がおさえられれば、このような西洋人のとらえかたに対して、さて、東洋の方では、どれにあたるかと考えたとき、梵我一如として、説きあかすことができるのではないだろうか。

いったいに、東洋には思想がないといわれたりするが、東洋的思考法の特徴といったものを考えるには、テオリア、フィロソフィアの考えが、大きなみちびきとなるのである。

2. インドにおける思想のめばえ —基本的なものの考え方中心—
—梵我一如を中心に—

都立井草高校 増田 信

〈重点的ねらい〉 世界の二大宗教として、キリスト教と仏教があげられる。キリスト教は主として西洋で、仏教は主として東洋で信じられている。日本も宗教分布では仏教圏にはいることはいうまでもない。ただ、一口に宗教といて、キリスト教と仏教をひとまとめにはするが、両者はきわめて異質な面をもっていることも事実である。キリスト教はまさに信仰であるが、仏教は単なる信仰ではなくて、知的・哲学的な教えという側面が強い。日本人は仏教によって哲学的思索力を鍛えられた。仏教を生んだ種族とギリシア哲学を生んだ種族は、ともにアーリアンで同祖といわれる。哲学ということで、ひとまとめにして、ギリシア哲学と仏教をくくってもよいくらいである。仏教の源流にウパニシャンドの哲学があった。これが仏教の背景となる。インド的思考を考えるにあいには、そこまでさかのぼらなければならないといわれる。ただ高 倫社ではあまり深くは立ち入る必要はないであろう。仏教をより深く知るためのたてとして取りあげていどでよいと思う。その意味で、梵我一如を中心として、それに触れていきたい。

〈指導内容の具体的展開〉 1. 古代インドの社会① アーリアンがパンジャブ地方に移住してきたのは、紀元前13世紀末のころであったろうといわれる。先住民としてドラヴィダ人らがいたが、かれらは征服されたり、追払われたりした。服属したドラヴィダ人らが、最下層のスードラ階級を構成することになるのである。移住してきたアーリアンは、きわめて宗教的な種族であったらしい。神々をたたえて神々をよろこばせ、神々のめぐみによる現世的幸福に与かろうとした。生業は主として牧畜で、かたわらに農耕をいとなんでいたが、家畜の増殖、豊かな収穫、健康、長寿、戦勝、子孫の繁栄などが、神々に祈られた。この神々を祭る司祭階級がバラモンで、バラモンは最も尊

貴な階級とされ、祭司に関することを独占していた。その下に王族クシャトリヤがあり、一般庶民はヴァインヤとよばれた。こうして時代が進むほどに、インド社会の特徴であるカスト制度が形成確立してくるのである。

2. ヴェーダ聖典①祭祀が重んじられると、儀式などの形式的なことがやかましくいわれるようになり、バラモンはそれに関する文言を集めて、その知識を独占し、ますますその社会的地位を不動のものとした。その集大成されたものが、ヴェーダと呼ばれるバラモン教の聖典である。ヴェーダは、神々讃歌の集成であるリグヴェーダ、歌謡の集成であるサマニヴェーダ、祭文の集成であるヤジュルヴェーダ、呪文の集成であるアタルヴァニヴェーダの4種類から成り、各ヴェーダは本集、祭儀書、森林書、奥儀書に分れる。奥儀書がウパニシャッドといわれるもので、古代インド哲学の内容を最も豊かに包蔵している。

3. ウパニシャッドの哲学②ウパニシャッドとは、「近くに坐する」「秘密の会座」という意味で、それから秘説・秘教という意味ももつようになり、さらにそれらを集めた文献を指すようになった。こんにち、その文献について奥儀書と訳するのである。

ウパニシャッドの哲学は、比喩や比較によって述べられていて、体系的な理論ではない。したがってこの哲学を単純明快にまとめることはむずかしい。もともと理論的思索によって構築されたものではなくて、神秘的な靈感によって得られた確信を表明したものだからである。そしてこの確信は、ひそかに師から弟子へと語り伝えられたり、思想家どうしの間でこっそり耳うちして伝えられたものらしい。語義はこのことを指す。

4. 梵我一如③ウパニシャッド哲学の中心問題は、ブラフマン（梵）とアートマン（我）の関係とその同一の議論である。ブラフマンというのは、もともと靈妙不可思議の力のことであり、アートマンとは氣息のことである。このことからブラフマンを宇宙の原理、アートマンを人格的原理とするようになった。そして一般に現象の統一相においてブラフマンを、雑多相におい

てアートマンを考え、この両者の統一と分化の関係において、両者の同一を考えたのが梵我一如の思想である。

ここではウ ッダーラカというウパニシャット学者の説を紹界する。ウ ッダーラカは「宇宙はそのままブラフマンであり、またブラフマンはそのまま、われわれの本体アートマンであるとする。したがってアートマンでいえば、アートマンは大といえば宇宙にみなぎる極大であり、小といえばわが一身に納まる極小である。「この万有は、この微細なるものを本性としている。それは真実である。それはアートマンである。汝はそれである。」

それではブラフマンなる根源的一者が、どうしてアートマンの雑多な差別相を呈するのか。このことについてウ ッダーラカは神話的な説明をする。かれによれば、ブラフマンは有である。有から有は出てくるが、無から有は出てこないからである。この有は、まず「われ多とならん、繁殖せん」という意欲をおこして、火を作り出した。つぎにその火がまた同じ意欲をおこして、水を作り出した。ついで水は食物を作り出した。そして最後に、有はさらに意欲をおこして、生命としてのアートマンとなって、火・水・食物のそれぞれの中に入って、それらの多様な結合によって、万物を構成した。

したがって人間も、他の万物と同様、火・水・食物の3元素から成り、この3元素の組合せによって、多様な心身現象が生ずることになる。そしてその中核が、生命を司る氣息である。しかし氣息そのものは真実の自己ではない。真実の自己はアートマンであり、有としてのブラフマンにほかならない。人は目ざめているときは本来の自己から離れているが、たとえば、熟睡すると、アートマンとブラフマンは一致する。われわれの根柢にアートマンがあり、そのまた根源にブラフマンがある。それは水の中にとけた塩のようなものである。アートマンとブラフマンの一致において、生の理想が見出される。以上がウ ッダーラカによる梵我一如の考えである。

〈設問とそのねらい〉

設問 1. ①に関連して、人間における信仰心ないしは宗教というものが、ど

のような歴史的事情のもとで芽生え、または形成されてくるものか、考えてみよう。

(ねらい) 人間における宗教心の発生について、正しい認識と理解を得させようとする一つの手がかりとするものである。

設問2. ②に関連して、ヴェーダ文化、ウパニシャッドについて、もう少しくわしく歴史的事実について調べてみよう。

(ねらい) ヴェーダ文化、ウパニシャッドは釈迦出現以前のインド文化を理解する重要史実なので、世界史的内容について若干自学自習をさせたい。

設問3. ③に関連して、ブラクマンとアートマンは、本来一つの実体なのか、別個の2つの実体で、一定の状況のもとで合一するものなのか。

(ねらい) 両者が別々のものであるならば、故あって結合すれば、そこに新しい第3の実体ができることになる。一如とか一体とって結合といわないのはそのためで、一にして二、二にして一という仏教の如や即の思考に馴れさせる前奏として、この梵我一如をとりあげたい。

〈発展的まとめ〉 仏教以前のインドの思想についての教養もないし、手もとに手ごろの参考書もない。こういう状態においては、博引傍証をてらうよりも、一冊と心中する方がよかろうと覚悟をきめ、わずかに手もとにあった1冊、中村三著「インド思想史」をたよりにし、この稿を草すについても、この本だけを種本にして苦吟したことを明らかにして、中村先生への謝意もここで申し添えたい。授業では、梵我一体ということを、いとも簡単に言っていたのだが、この著に触れて、なにも知らずに大それたことをしていたものだと思う。梵我一体といっても、学者によって、理論のたて方、ニュアンスにちがいのあることは当然であろう。ここでは中村先生の紹介される何人かのうち、ウッターラカという人のものを採引きさせていただいたが、生徒にはもちろん名前までも教える必要にないであろう。いずれにせよ、つぎの仏教学習の橋渡しとなることが肝腎であるが、任を果たしたようにも思えない。発展的まとめというよりも、低迷的結びといった方がよさそうである。

3. ソクラテスの死と哲学 —先哲の基本的考え方中心に—

都立葛飾野高等学校 秋山 明

〈重点的ねらい〉 キリスト教の教理にはイエスの十字架上の死が要点になっている。と同じように、ソクラテスの哲学は彼の死のうちに結集されている。そのため彼の死を理解することは、彼の哲学を理解することになる。プラトンが『パイドン』で伝えるところによると、崇高なまでに喜びと安らぎをもって死に当面している。この従容とした死の偉大さを、後世の哲学者達は激賞している。ある者は「ソクラテスの死は、彼の事業の最高の勝利、彼の生命の輝かしい最高点、哲学と哲学者との聖化であった」といい、またある者は「彼の死が我々を感動させるのは、激情的な調子が少しもないことである。迦教者の悲劇的感情もなく、死にゆく勝利の凱歌もない。死のうとする情熱的な意志もなく苦しみもがくこの世からの脱離もない。恐怖も苦悩もなく、執着も別離もない」と。この崇高な死を彼にもたらしたのは彼の哲学である。そこで彼の静安と明朗な死に照明をあて、彼の思想の学習を進めたい。

〈指導内容の具体的展開〉

1. ソクラテスの死の意味

彼は死からのがれようとすれば、のがれ得る機会が二度あった。一度は、裁判の時裁判官に譲歩妥協すれば生き得た時であり、他は脱獄する気になれば容易にできた時である。しかし、ソクラテスはこの二度の機会を自ら放棄した。それは生命以上の価値あるものの存在を信じたからである。もちろん彼も日頃から節制と鍛練で健康を守り、死の危険のある公職につくことを拒否したりして命を大事にしていた。ただ正を行ない、不正を行なわないという点は一步も譲れなかった。今までと同じように、今後も知を愛究（哲学）していく覚悟であるから裁判官が彼に人間吟味と知の愛究をやめれば放免してやろうと言ったとしても、それはやめられないと決意の程を示した。人間吟味と知の愛究をやめれば生きるに値しない人生となる。そこで彼は、生命

か、知の探究かの二者択一に迫まれて後者を選んだ。ところで命より高価だと彼が判断したところのものはどのようなものであったろうか。

それは普遍的、恒久的、絶対的な道德の本質である。タレス以後の自然哲学者は万物の根源を探究したが、ソクラテスは道德の根源を追求した。砂上に描かれた円と定義のうちを考えられた円とに大きな差があるように、世俗の道德と、本質的道德とには大きな差がある。描かれた円は無数にあるが、定義のうちを考えられる円は一つしかないと同じように、ソフィストが考えた道德は無数にあるが、真の道德は一つしかない。ソクラテスが求めたものは一つの道德である。それは、超個人的な最高の道德的理性であり、主体的に何びともがそれに服従すべき道德的概念である。これは後にプラトンのイデア論に、さらにアリストテレスのテオリア論に発展した。

2. いかにか生きるべきか。① 問うこと。彼の最大の関心事は「いかにか生きるべきか」である。いささかでも心ある人間にこの「問い」以上に真剣になれるような問題が何かほかにあるだろうかと自問する。そして、正義をはじめほかの徳をおさめつつかつは生き、かつは死ぬというような人生のあり方がよい生き方である。しかし、正義を知らずにこれを行なうことは不可能であり、知っていて行なわないこともまた不可能である。それは、徳を行なうこと自体が福であるから、正義だとわかればだれでもが実践するはずである。そこで先ず「何であるか」と問うことが大切である。敬神・不敬・美醜・正・不正・思慮・狂・勇・怯懦・国家・政府・統治者等は何かと自らに問い、また他人にも問いかける。真理は対話によって帰納的に発見されていき定義の形で表現される。例えば、勇氣とは、戦時においても平時においても畏るべきことと、畏るべからざることを判別する知識である。敬虔とは神々に対して正しく善処する知識である。正義とは人々と自己との間の妥当な処理をなす知識である。結局、勇氣も敬虔も正義も一つの知識であるということになる②その真知が得られない時は、大胆に無知を告白し、さらに熱烈に真知への渴望憧憬に燃えながら鋭い問いを続けていく。彼の場合、問うことがよく生きることであった。

② 魂を氣遣うこと。哲学史上「魂」の概念を創造したことも彼の大きな功績である。彼の言う魂はいま（氣息）とか亡霊とかではなく、肉体のうちにある道徳的自我のようなものを意味した。つまりその人の正邪・善悪・賢愚等がそれによってきめられるのであった。人間の行為は肉や骨によって決定されるのではなくて、善であると判断する魂によって決定されるのである。肉体が健康によって栄えるように、精神も正しさによって栄える。そこで魂を氣遣うには、純粋な道徳的自我を、財産・名誉等に優先させ、また神的な道徳的自我を「善の実践」によって潔めることが大切である。

3 道徳と宗教。彼の死の背後には宗教がある。ソクラテスは「国家の認める神々を信奉せず云々」という訴状は全く誤解である。彼は国家の神々はもちろん、それ以上の神をも熱心に信仰していた。『弁明』において彼は、一見狂言者のように情熱的に信念を吐露している。ときにはどう慢尊大と思われるような言葉もある。それは彼の信仰の強さを示すものであろう。彼は神について多く述べている。「私は私の告発者よりも神を信じている者である」「神への奉仕の事業のために極貧のうちに生活」「賢明なるはひとり神のみであろう」「それは神の命じたもうとえろであるからである」等と。彼の神はギリシヤ人の神々よりはるかに高次であり強力なものであった。宇宙を創造し支配する神であり、人間の肉体に宿る魂でもある。つまり、超越神でもあり、内在神でもある。この全知全能の神を敬しその命令に従うのが最高善である。ただ神命だからそれに隷従するのではなく、それを自分で正しいと判断して行為するのである。神の加護を信じ、魂の不滅を信じていたからこそ何の悲壯感も恐怖感もなく死に得たのである。

〈設問とそのねらい〉

設問1 ソクラテスのような善人がなぜ告訴されたのか。

（ねらい）① 「雲」が上演されてソクラテスは無神論者、道徳破壊者と誤解された。② 人間吟味される人の立場からすると憎むべき男だと思われる。③ 彼の弟子のうちアルキピアデスはアテナイに謀反し、またクリチアスは強欲残忍の政治家になった。④ アテナイの政界には派閥の対立が深

刻であったので、どちら側についても反対側から敵視される。⑤ 政治そのものが腐敗堕落していたので善人ソクラテスはその犠牲になった。

設問2 逃亡すればできるのになぜ刑に服したか。

(ねらい) ① 彼の死生観。死はすべての感覚の消失であり、夢一つ見ない眠りに等しいものであれば死は嘆賞すべきものである。また善人に対しては生前も死後も悪事は起り得ないという信念があった。② 不正に報いるは不正を以ってすべきではないと考えていた。③ 悪法も法なりと考えてやむを得ず服従したのではなく、この法こそアテナイを守り育てたものであり自分もこの法が好きで、今日まで生きてきたのであるから、今さらそれを踏みこじめることはできない。要は法に従うことは良心に従うことである。

設問3 人間吟味や知の探究をしない生活はなぜ生きるに価しないか。

(ねらい) ① ポリスから見て。人々は労働を蔑視。政治に能力も識見もない者が政界に進出。ソフィストによって思想界が混乱。このまま放置すれば祖国は崩壊するかもしれない。だまってはいられない。② 個人的に見て。人は無知不徳不完全可死的な存在であるから、完全なもの、永劫なもの、神聖なものを憧憬しそれに向って努力することは限りない喜である。

設問4 果して知と徳とは合一するであろうか。

(ねらい) 日常の現実生活では両者は矛盾する場合が多い。知るは易く行なうは難い。義理と人情の衝突もその一例である。しかし知が徳であり、福であるならば実行せざるを得ないはずである。もし実行できない人間がいたとしたらそれは真知をまだ十分に理解していないのである。

〈発展的まとめ〉 彼は臆見を徹底的に吟味した。「何であるか」とつねに問いを發した。体面や体裁に気をかけず本質的なものを氣遣った。自己の仕事に命を賭けるほど情熱をもった。人間の内面は無限の深さをもつことを洞察した。生涯、永遠にして不滅なものを求めた。良心に忠実であった。正を行ない不正を行なわないという最も素朴にしてしかも至難なことをやりとげた。自由に思索し、行動し、そして死んだ。ソクラテスの肉体は死んだが、彼の精神はいっまでも生きている。

都立国分寺高校 菊地 堯

〈重点的ねらい〉 儒学を封建的身分秩序の合理化であるとして、表面的に反撥したり、他の源流思想との学説比較や、単なる対象的な「仁」概念分析に終始することを避けて、現代に生きる青年としての自己に迫り来る問題は何かという教材の提示をねらいとする。そのために、完成した理論体系としての学説紹介よりも、そこに至る学問的態度、真理・道徳的価値への畏敬・探求への孔子の初志、またそれをめざした努力の積み重ねの中から、生徒が誠実な生き方への示唆を感じとり、読みとつて自己の内面的原理として定着することをめざす。

〈指導内容の具体的展開〉 1. 孔子がとりくんだ課題

① 春秋時代の現実と問題 孔子は、周代の末、春秋時代に活躍した人である。春秋から戦国にかけての時代は乱世であった。古来の社会制度は周王朝の衰えと共に崩れていき、王朝を守る筈であつた諸侯たちは、武力や策略に訴えても、自分こそ天下の覇権を握ろうと、互いに争いをくり返していた。

孔子がとりくんだ問題は、まさにこの時代の現実についてであった。この現実をはなれた、奇蹟や人間ばなれした超能力とかスキャンダルや神秘などについて語ることはなかった。現実からつきつけられた課題はあまりにも切実であつたらう。

春秋・戦国の現実にとりくんだのは、孔子だけではなく、諸子百家とよばれる多くの学者たちが、それぞれにこの現実への対処のしかたについて考え、提案していた。たとえば、後に秦の統一の原理となった法家の立場は、法律・制度を整えて君主の政治権力を強化し、全国を支配する方法を諸侯に説くものであった。これと反対に政治そのものを自然に反する人間の思いやりとして否定し、小さな村落社会の原始的な生活に自然ととけあつた平和な幸福を求める、老子の立場もあつた。

② 春秋時代への孔子の態度 孔子の考え方は上のいづれとも違い、政治の根柢に道徳をすえることによって、人間の真の幸福を実現しようとするものであった。孔子は、この道徳の原理を、現実の人間生活の中に求め、人間の個人的・社会的な生活全体に貫くその原理を「仁」とよび、「仁」の実現を自分の一生の課題としてとりくんだ。

孔子は、現実の乱世の底に「礼」の乱れを見てとり、礼の再興をめざすことからその課題に迫っていた。礼とは、身近かなことでは、おじぎなどの礼儀・作法から、冠婚葬祭の儀式、ことばづかい・服装など一切の慣習をさし、さらには今日の法律が規定する内容までを含む、社会規範（集団生活でのきまり）であった。周王朝のさかんであったときには、礼は日常生活の中で自然に守られ、特に深くその意味を論じるまでもなかった。しかし、乱世にはいつて、礼は武力・財力ある諸侯やその臣下たちによって無視され、無視されない場合も形式化して本来の意味からかけはなれたものになってきた。孔子は、このような礼の乱れを憂い、憤ることからその再興をめざす決意を固めていったのである。

2. 孔子の基本的な考え方

① 仁と礼 礼は人間の行為そのものの規範である。これを回復するには単に規範として定められている個々の箇条をこまかく解説するだけでよいであろうか。それよりも、礼がなぜ定められたか、なぜ現在も必要であるかの意味や理由を探求することが、根本的な問題として大切なのではないか。どんなに儀礼が表面上整っていても、それが人に対する愛や敬の心から生まれたのでなければ、本当の意味で礼といえるだろうか。

孔子は、礼を内側から支える根本精神、原理をつきとめ、「仁」の徳を説いた。仁とはどんな考え方であろうか。孔子のことばを集録した「論語」の中にそれはあらゆる角度から語られている。私たちはこれについて、古典・漢文の学習でもふれることができる。

② 忠と恕 孔子と高弟の曾子との会話で、孔子が「^{しん}参（曾子の名）よ、私がこれまで求めてきた道はひとすじであったね」というと、曾子が、「は

い」と答えた。孔子が去った後、若い弟子が曾子にその意味を尋ねると、「先生の道は忠（自分をも他人をもいつわらない誠実）と恕（思いやりの愛）の心なのだ」と曾子が答えた。自己を正しく保ち、人間関係を温かく秩序あるものにしようと、主観・客観の正しくゆたかな結びつき・まとまりを求めてやまない仁の心がここによくあらわれているのではないか。②

③ 知と行 論語では、仁についてその全体を抽象的に定義する態度をとらず、仁の徳をそなえた人はこのように行い、そうでない人はこのように行うというように、多くの具体例をあげている。このような説き方自体に孔子の知や学問と徳・人間の行為とのかかわりについての考え方・態度があらわれているのであろう。仁について美しいことばで完全な定義を示しても、“その定義が体得され、実践され、実現されることに役立たなければ何の意味があるか。「先生がいわれた、ことば巧みでど気嫌とりの顔色を使う人には仁の徳をそなえた人は少い。」「意志が強く、むつつりとしてことば少い人は仁に近い。」孔子は実践を伴わない単なるおしゃべりを最も排斥した。真の知と行とのむすびつき、ことばと行為の関係はどうあるべきなのだろうか。③

③

3. 人生と学問

① 学問への態度 実践に結びつかない知識は無意味だとしても、知識の意義を全面的に否定して、学ぶこと自体を拒否すべきであろうか。論語の冒頭に、「ひろく先人に学び、時折それを身につけるように復習することは、なんと嬉しいことではないか」とある。また、「朝、正しく生きる真実の道を聞けたら、その夕べに死んでもよい」ともいう。さらに正しい勉学の態度の問題について、「他人や教師からいろいろ学んでも、それについて自ら求めて深く考えることをしないならば、真の知は自分のものにならない。反対に自らいろいろ考えても、他人や教師から学ぼうとせず、自分勝手な考え方で行動するならば、客観的な法則や秩序を無視することになって、自分にも他人にも危害をもたす。」「私はいつか一日中自分だけの考えにふけたが得るところはなかった。やはり学ぶことが第一である」と指摘する。

学ぶことと習うこと、学ぶことと考えることとの正しい結びつけ方の問題をこれらのことばからとりあげ、私たち自身がこれからの人生を正しく生きるための問題として考える必要があるのではないか。人生と学問への私たちの正しいとりくみ方・態度について、孔子が提案しているのはどういう点であろうか。④

② 学問への初志 何事もはじめが肝心である。

「私は十五才で学問に志し、(中略)七十才ではじめて自分の欲する通りに行動すればそれがそのまま、礼の規範に一致することができるようになった。」私たちは高校に入学し、体は学校の一員として属している。心はどうであろうか。自ら学問に志しているであろうか。孔子のような非凡な人と比較してもしかたがないと、本当にいえるだろうか。意志の弱い弟子が「先生のお話は私にはとても実行できそうもありません」と申し出たとき孔子は、「もし本当に力が足りないのなら、努力するだけして途中で放棄することもやむを得ない。しかし、お前ははじめからできないときめてかかっている。その考え方がお前を怒力できなくしているのだ」といしめた。また、「人間の本来そなわった可能性は似たりよったりなのだが、学んで、それを身につける努力をするかどうかで大きな差ができる」⑤と、孔子は自分の努力で一貫した人生から生れた確信を語っている。

立志は十五才に限らない。未来に正しくゆたかな人生を求めるなら、この現在にこそ、そのための真の知を求め、それによって生きる努力を決意すべきではないか。

③ 学問の方法 「ひろく古典に学び、その学んだことを、実際の生活の中で自分なりの礼としてまとめ、身につけるならば、道にかなりであろう。」
「先生は勝手な考え方、むりを通そうとすること、がんこに自分の考えに執着すること、我をはることを、これら四つのことはしなかった。」
「ひろく学び、正しいことを求める強い意志をもち、一生懸命に問題を考え、すべて自分の問題として追求するならば、そういう態度そのものの中に仁はある」⑥
「正しく学ぶなら、決してがんこにならず、真理をうけいれる広い心をもつ

ようになる。」孔子は、礼のように人々が古くさく価値がないときめつけて深く考えようとしなないものに対しても、誠実にしかも柔軟な態度で、その中にひそむ人生の真実を探求すべきこと、また一貫した強い意志でその努力を重ねることを提案している。このような人生への態度は、現代に生きる私たちの生き方の問題と無縁だといえようか。

4 実践への道⁽⁷⁾

① 行為と内省 仁を身につけるには、正しい知への努力と、自分のなすべにことは必ず実行する勇気が必要である。「自分がなすべきことと知りながらしないのは勇気がない」のである。しかし、「仁をそなえた人は必ず勇者であるが、勇者は必ずしも仁者ではない。」自分のなすべきことを実行する、仁の実践と結びつかない勇気にどんな意味があり得ようか。

つぎに、自分の行為への正しい反省が必要となる。仁は怨、すなわち人への思いやりの愛ではあるが、それは人に対しての正邪善悪の価値判断をすてるものではない。善を愛し、悪を憎むことを正しく行のが仁者である。このような人に対する愛憎が、もし自分への厳しい反省を欠いたらどうであろうか。孔子に学んだ曾子は、「人に対して真心で接したか。人に真心で話したか、聞きかじりで、まだ自分が理解もしないのに自分の考えのように伝えはしなかったか」と毎日反省しているといった。

正しい反省なしに行為を改善することができようか。もう一人の弟子、子貢は、「徳をそなえた孔子のような人にも過ちはある。日食や月食のように人々はこれに注目する。しかし、きつとすぐに改めるから、人々はそのりっぱな態度に感心して仰ぎみる」といっている。過ちそのものはだれにもある。すぐれた人間とは過ちをしない人ではなく、過ちを謙虚に認め、誠実に克服しようと努める人である。私たちは青年特有の批判精神を自分への正しい反省にどう向わせ、自分の生き方の中にどう位置づけるべきであろうか。⑧

② 孝悌から始めよ 仁の実践はどこから始めたらよいか。孔子は、自分の最も身近な家庭生活の中から始めよと主張する。孝（両親への愛情と尊敬による接し方）悌（兄弟姉妹、仲間への愛情と尊敬による接し方）が仁の

本である。家庭生活での愛と敬の心とそれによる実践から始めて、次第に一村、一地方、天下全域へと広めていくべきである。仁は個人的生活から社会生活全般の原理として実現されたとき、完成する。⑨現代は、よき家庭人としてのあり方と、よき職業人・社会人としてのあり方との間に矛盾があるかのように感じられることがないだろうか。この問題はどうか考えるべきだろうか。⑩a 個々の場面で求められる具体的な行為に違いはあるだろう。ただ、現代でも、人に対しての愛と敬の精神は、家庭・社会全体という場面の違いをこえて、人間生活に共通する原理となり得ないだろうか。⑩b 現代の状況の中でその原理がいかにして実現し得るか。学習を広げ深めてその道を求めたいものである。

孔子は、「仁の徳をそなえた人は決して孤立したままではない。きっとその理想に賛同して共に協力する仲間が現われる」という。そしてそのひろがりから、仁が社会全体の生活の原理として実現すると確信して、その生涯を遊説と教育に捧げたのである。

〈設問とねらい〉・・・(本文に疑問形で提起したものは問の文を略す)

下線① 私たちの法やその他の規則について、それが生れた精神を考えてみよう。(法による他律から法への自律的態度を礼から仁の過程に学ぶ。)

下線② なぜ、忠、恕の一方だけではいけないのであろうか。(道徳の本質にかかわる、主観・客観のきり結ぶ行為の意義を考えさせる)

下線③(ねらい: 知の意味、ことばの意味をこれによって深めさせる)

下線④(" : 生徒の学習への態度について、自己の現状への反省とその改善をめざす)

下線⑤ そうであらうか。努力した経験から考えてみよう。

下線⑥ 人間の徳とは完成した状態のことなのか、それをめざす態度のことなのか、これらのかかわりはどうなのであろうか。(答え方はいろいろあっても、それを通して人生についての広い視角の必要を感じさせる)

下線⑦ 私たちの学業のあり方について、教えを受ける点はどんな点であろうか。(真理に対して謙虚・柔軟の態度、価値追求の熱意をひき出すこと)

下線⑧ (ねらい: 自己反省の大切さ、反省による自己改造の意義に気づかせること、他人への批判には自己へのより厳しい反省を裏うちすべきことに気づかせる)

下線⑨ a b (ねらい: 単純に現代の状況では一致しない、矛盾するという答え方に安住しないで、別の原理によってでも、一貫したとらえ方、探求をめざすようにする。完結した解答よりも現代と思想への課題意識として位置づける)

〈発展的まとめ〉

孔子が提起した問題は、行為における主・客の関連、愛と敬、愛と規律、個人と社会、知と行、人生における学の意義の実践的課題であった。孔子はこれらについて当時の状況の中で極限とも思える解答を示した。しかし、そのことは、われわれがその既成の解答の受容だけで現代を律し得るのではなく、孔子自らがそういう態度をきびしく拒否しているように、実践的な課題は、自ら考え、自己のものとして定着させるべき主体の問題なのである。

思想の源流でとりあげた問題すべてが、時代をこえた課題とその解決への示唆であったように、孔子から提起された上の諸問題は、西洋思想の源流、西洋近代、現代、仏教、日本の各思想の分野で当然対比されるし、特に現代日本の道徳生活との正しいむすびつけ方が考えられなければならない。

他の思想と対比する場合、たとえば「能ク人ヲ愛シ能ク人ヲ悪ム」仁の愛が、アガベや慈悲にくらべて次元が低いなどと単純な割りきり方をすることを戒めたい。怪力乱神を語らない孔子の問題へのとりくみ方を、現代日本人の宗教・信仰への態度で受けとめて、愛を考えるのでないと、倫社で人間を考える意味がないと思われる。本文で敢て強調したように現在の高校生には孔子の学問へのとりくみ態度に学び、以下の各思想への態度の根本を正させたい。

以上。

5. キリスト教の考え方

—思想史的扱い方中心—

—愛と信仰—

東京都立文京高等学校 渡辺 梧郎

〈重点的ねらい〉 キリスト教思想が、西洋思想の二大源流の一つとして世界歴史に及ぼした影響と、現代思想の中で占める意義とに着眼し、イエス・キリストを中心にキリスト教思想のあらましについて学習する。さらにキリスト教はどのようにしてユダヤ教から脱皮していったのか、また本来異質なギリシア・ローマ思想とどのようにして融合していったのかということについても明らかにする。

1. ユダヤ教の特色を明らかにするとともに、ユダヤ教との対比において、キリスト教の発生の由来、基本的な考え方を理解させる。
2. キリスト教の人間観は、旧約聖書から新約聖書を通じて、神とのかかわりにおいてとらえられていることを理解させる。
3. イエス・キリストの教える「神の愛」について理解させるとともに、十字架上の死の意味について考えさせる。
4. キリスト教の思想が、ギリシア・ローマ思想との対立と調和をないまぜつつ、ヨーロッパ中世の思想を形成していった過程を理解させるとともに、理性と信仰の対立の問題を考えさせる。

〈指導内容の具体的展開〉 1. ユダヤ教の思想 古代オリエントでは、さまざまな民族がそれぞれ固有の神を信仰し、それらの守護の神を中心に団結していた。それらの一つに、パレスチナ地方を本拠とするアラム族の分派イスラエル民族（後のユダヤ民族）のユダヤ教があった。

ユダヤ教は、偶像をしりぞけて、目に見えない超越的な唯一絶対の神を信仰していた。この神をヤハウエ（イエホヴァ）という。ヤハウエはイスラエル民族がエジプトを脱出した時、かれらを選び、かれらを救うことを告げた神である。そのかわりにイスラエル民族はヤハウエの意志に従うことを誓った。つまり、ユダヤ教はヤハウエの神とイスラエル民族との契約にもとづく

民族宗教であり、神は不正をきびしく罰する正義の神、怒りの神であった。その契約は、具体的には律法として神から示された。モーセの十誡がこれである。

しかし、まもなくイスラエル民族が、カナーン（イスラエルの古名）の地に定住し、生活が安定すると、以前の苦しかった日々ことは速くかすみ、律法の精神は忘れられ、形式的に律法を守ることだけが求められるようになった。そしてイスラエル王国の分裂、滅亡、バビロン捕囚、帰還、この時期に多くの預言者たちが現われ、盛んに活動した。

やがてイスラエルの国は滅びたが、このことがかえって民族的団結を強め、その中核としてのヤハウェの信仰はますます固まりユダヤ教が成立した。

もともとユダヤ教には、世界史の進行のうちに神の意志のはたらきを認める摂理観があったが、ローマの支配に属するようになった紀元前1世紀ごろ、切迫した歴史の終末観が発生し、やがて救世主が出現して、神の選民であるにもかかわらず、不当な運命にさいなまれている自分たちイスラエル民族を救ってくれるであろうと待望するようになった。この待望のうちにこの世に出現し、すでに形骸化していた律法の遵守すなわち神と人との古い契約を更新し、新しい契約に生かしかえたのが、イエス・キリストにはほかならない。

2. キリストの出現　ローマ帝国の属州とされ、亡国の悲哀をかみしめるユダヤには、救世主を求める気持が痛切であった。そのころ、ヨルダン川のほとりを、「天国は近づいた。悔い改めなさい。」と説いてまわる人物がいた。かれは、熱烈なことばで救世主の出現を預言した。かれを洗礼者ヨハネといった。人々はそのことばに応じ、罪を告白し洗礼を受けた。イエスもその中のひとりであった。イエスは、旅先ユダヤのベトレヘムの民家の厩の飼い葉桶の中で、大工のヨセフとマリヤの子として生まれ、ガリラヤの小村ナザレで貧しい人々と美しい自然に囲まれて育った。洗礼者ヨハネの洗礼を受けたイエスには、突然天職の自覚が生まれ、荒野における試練によってかれ

自身それを確認したといわれる。その後、イエスは宣教に従い、貧しい漁夫や世間からいやしめられていた取税人などといった人々の中から12人の弟子が生まれ、イエスを中心に、カファルナウムやガリラヤ湖の周囲を巡回して宣教した。

3. ユダヤ教とキリスト教の相違 キリスト教はユダヤ教から派生した宗教であり、唯一絶対の超越神への信仰という性格を継承したが、同時に大きな相違も見られる、

第一に、ユダヤ教の正義の神に対して、キリスト教の神は愛の神である。第二に、ユダヤ教が律法の宗教であるのに対して、キリスト教は福音の宗教である。第三に、ユダヤ教が民族宗教にとどまっているのに対して、キリスト教は全人類の救済を旨とする世界宗教へと発展していった。

4. キリスト教の思想 ① 旧約聖書の間観・ギリシア思想が「人間」と「人間を含む世界」に統一ある原理や秩序・理性などの存在することを認め、人間を調和的・肯定的にとらえるのに対して、旧約聖書では天地創造や楽園喪失の物語に象徴されるように、人間や世界を越えた神の存在を信じ、この神との関係においてのみ人間とその歴史を考える。そして万物の創造主であり、人間に生命を与えた絶対神の意志にしたがうことによってのみ、人間は真に人間らしくあり、かつ幸福であり得ると考えた。このことによって、人間を支配してきたいろいろの神々を拜む偶像崇拜から解放され、種族や国家などの權威を代表する権力をすべて相対的なものにしてしまうこととなった。この唯一絶対の神の意志に従うとき、人間は地上のすべての權威や権力に対して自由の人間となるが、神の意志に従わず、神の意志にそむき、人間が自己を絶対視し、自己中心的な生き方をするとき、これを罪とよんだ。

② 新約聖書の間観 自己中心の人生は、さまざまな自己欺瞞、自己正当化にもかかわらず孤独であり、生きかえを見出だすことができない。こうした人間すなわち罪人に対して、神の側から今一度人間に呼びかけ、神との

正しい関係に立ち返らせようとして、神のひとり子であるイエス・キリストをこの世に送り、イエスを通してよきおとずれすなわち神の福音を全人類に伝えさせた。旧約では神との契約を破る人間に対する神の義による裁きが強調されたが、イエスの犠牲による新しい契約は、キリストの愛をもって新しい律法として示された。

③ 神の愛 新しい律法は、「主なるあなたの神を愛しなさい。」これが第一のいましめであり、「自分を愛するようにあなたの隣人を愛しなさい。」①これが第二のいましめである。この二つだけであった。

イエスはその生涯を通して、神の愛を説き、神の真理を示し、神に従うことを教えた。イエスの教えに心を傾けるようになった民衆は、イエスを救世主と仰ぐようになったが、イエスによって攻撃された祭司や社会的指導者たちは、イエスを憎み、さらに地上的権力を畏れぬ人類の救い主であるイエスの権威を恐れて、ついに十字架にかけて盗賊とともに殺してしまふた。しかし、イエスは十字架上に血を流しながら、全人類の罪のゆるしのために、父なる神に向かってとりなしの祈りをささげた。このイエスの愛は、アガペー②と言われる。このような愛のみが、人間をほんとうに「人格」と呼ぶことのできる人間、人間の尊厳を持つ人間にするのだとキリスト教では考える。それはイエスによって示された「新しい人間」の姿である。こうした愛によってつながるとき、新しい人間関係が生まれてくる。自己中心的な自己愛、自己の目的のために他人を手段とすることを畏れない利己主義の孤独、こうしたキリスト教で言う罪からの救いや人類愛は、イエスの十字架上の死——契約更新の血の犠牲によって贖われ、かつ模範として示された、アガペーの愛。②によってもたらされる人間の新生と、新しい人間関係の出発を意味している。

5. キリスト教の成立 イエスの弟子の中で、ことにめざましい活躍をしたのは、パウロであった。かれは民族の差別を越え、あらゆる人々に伝道した。またすぐれた組織者として後のカトリック教会の基礎を定めるとともに、信仰を真理としてあらわす神学の出発点をも伝えた。パウロの努力によっ

て、キリスト教は普遍的世界宗教としてヘレニズム世界に、ついでローマ世界へと発展していった。

6. キリスト教の展開 ① キリスト教とギリシア・ローマの考え方との融合 ヘブライズムの伝統から生じたキリスト教の考え方は、ギリシア・ローマの考え方——特に理性を重視するヘレニズムの考え方を取り入れつつ発展していった。このような背景の中で、プラトンの哲学(新プラトン派)を導入しつつ福音の信仰を核心としてキリスト教独自の神学——教父神学をつくりあげたのは、神によって創造された人間は、善のみをなすはずであるが、人祖アダムの犯した罪の遺産のため、生まれながらにして罪を有するものとされる(原罪説)。その罪はイエスの愛により救済されるが、この地上におけるキリストの権能の継承者は教会(エクレシア)であるから、人々は教会の力によってのみ原罪から救われることが可能となるという。

かれは古代世界の崩壊を身をもって体験し、それまでの歴史を顧みて、興亡盛衰のはげしい地上の国家のはかない運命に比し、永遠の生命を持つ神の国——教会を現地にしっかりうち立てることを構想した。

② 理性と信仰 神を中心として信仰を重んじるキリスト教の思想は、人間を中心として理性を重んじるギリシア・ローマの思想との出会いによって、反発対抗ののち、異質の思想の吸収とそれとの調和がはかられた。パウロ、ヨハネ、アウグスティヌスからはその代表的人物である。

ヨーロッパにおいて、教会が文化の中心となり、キリスト教文化と呼ばれる中世文化が展開するにつれ、中世キリスト教の理論の体系づけ——スコラ哲学がうち立てられた。その代表者はトマス・アクィナスである。かれはアリストテレスの哲学を取り入れつつ、人間の理性と信仰との一致と調和を主張した。すなわち、人間は善をなしうる理性を持つが、その力が弱く、神の助力によって完全なものになる。神がこの世に遣わしたイエスを通して、人間は神の恩恵にあずかり幸福に至るものである。

〈設問とそのねらい〉

設問1. 下線①の「あなたの隣人を愛しなさい。」に比べて、イエスの説話に示される「あなたの敵を愛しなさい。」には、大きな飛躍があるように

思はれるが、この点について話し合ってみよう。

(ねらい) キリスト教的な愛は「隣人を愛せよ」から「敵を愛せよ」への発展において、本能的感情的の愛の持つ限界をつき破り、普遍的愛徳に広げられ高められる点を強調する。

設問2. 下線②の「アガペー」とは、既習プラトンのエロス、アリストテレスのフィリアやストア学派の世界同胞・博愛と、どちらがうのか。またこれから学ぶ仏教の慈悲、儒教の仁とどちらがうのか、話し合ってみよう。

(ねらい) 愛の種々相のなかにあつて、アガペーは自発的無条件的絶対的無差別的愛であり、人を救し人を生かすためのものであつて、愛と憎しみが表裏をなすのではなく、愛と無関心とが表裏をなしていることを考えさせたい。

設問3. 下線③の「神の国」について話し合ってみよう。

(ねらい) 神の国という考え方は、後期ユダヤ教で発生し、イエスが継承発展させたものである。イエスの教説の中心は神の国であつたが、かれはさまざまな意味に使つた。このため後に、神の国は、世界の終末に実現するとか、教会において実現されるとか、人々の心の中において形成されるとか、世界人類の平和によつて社会の中に具現されるとかいろんな考え方があるが、要はこのことを通して信仰と実践の問題を考えさせたい。

〈発展的まとめ〉 1 キリスト教の発展の跡付けを世界史の学習と関連させて把握するとともに、特にキリスト教精神の軌跡とその現代文化に及ぼした影響を適確におさえること。

2 理性と信仰の問題は、ヘレニズム・ヘブライズム以来、スコラ哲学を経過し、ジャンセニストのパスカルを通して近代実存主義につらなる点をおさえること。

3. ヘブライズムの超越神の考え方を、ヒンディーズムの梵我一如の考え方と対比しておさえること。

4. ヘブライズムの摂理観・終末観を、ヒンディーズムの輪廻転生観、鎌倉仏教の末法史観と対比させておさえること。さらにヘーゲルの歴史観と摂理観、マルクスの革命観と終末観の系譜を考えること。

6. 仏教の考え方 —先哲の基本的な考え方中心—
— 仏教における悟り —

都立江戸川高等学校 海野省治

〈重点的ねらい〉 「仏教」ということは、更にブッダ、ホトケ、サトリ、寺、お経等々のことばは、日本人には日常化された言語である。こうした仏教用語の本来の意味、そして今日では人間の死に際してのみ身近なものとなっている仏教が本来何をねらいとしていたのかということを探ることは、今日の仏教の有り方、そして我々の生き方のヒントを得る意味で決して無駄ではないであろう。又仏教系統の新興宗教の多い日本で、その根源にさかのぼってみることは、意味のあることでもある。そして根源を探ることで我々がいだいている仏教についての考え方の不十分さを指摘することとなる。ここではゴータマ・ブッダという一人の人間が、何を考え、何を理解し、何を行ったかということを中心として、今日残されている仏陀の言葉を参考にしつつ語ろうと思う。仏教思想といつてもいわゆる哲学的分野から、倫理的実践の分野にまで広範囲にわたっており、すべての分野を網羅しえないので、ここでは特にブッダの「悟り」という点を浮きぼりにしていきたいと考えている。又最後にキリスト教との比較を簡単に試みることにする。

〈指導内容の具体的展開〉 前六世紀、インド北部のマガダ国に一人の人間が生まれた。名をゴータマ^①シッダルタといった。彼はシャカ族の王子であった。生れて間もなく母を失ったりした生活体験は、やがて自分を、人間を自覚し、意識するようになるにつれ、種々の悩みにとりつかれるようになる。自分は何不自由のない生活を送っているのに世の中には貧しい人、行き倒れの人、病気で死ぬ人、老いて苦勞のたえぬ人等々が沢山いる。楽しいことも^① 沢山ある。しかしそれは長続きしない。愛する人とは別れねばならなかったり、嫌いな人に会わねばならなかったりなど苦しみの種はつきない。王子は自分自身の問題として、こうした諸々の苦しみからのがれることはできぬかと深く思索するようになった。そして29歳のときに、地位と名譽を棄てて、

放浪の旅に出るのである。諸々の修行を重ねた末に、35歳にして彼は悟りを開くに至った。このときからゴータマシッダルタは「仏陀（覚者、悟りを開いた人）」になった。シッダルタはキリスト教におけるイエスのように神から使わされた存在者としてではなく、一人の人間として生れ、苦しみ、悩みぬいた人間であるところに特色がある。

さて、彼が悟りを開いたというとき、それは何を悟ったのであろうか。それは端的に言えば、諸行無常、諸法無我、一切皆苦ということであった。すべてのものはうろろい変りゆくのに人間は、それをあたかも恒常不変のものと考えること（「無明」—無知ということ）から諸々のことに対する執着や又執着が達成できないがための苦というものが出てくるという。だから人間は、まず「無明」を「明」にせねばならぬ。そうすることで苦の状態から離脱できるのだということを知ったのである。このようにして彼はまず苦からの離脱をし、心が平靜になった状態に入ったのである。この状態を涅槃寂靜（Nirvana）^②といひ欲望のない精神の状態である。この境地が仏教の究極であった。この涅槃の境地についての考え方はギリシャ思想のうちのエピクロスの快樂説に相通ずるところがある。エピクロスの考え方を思い出してみよう。

今日ブッダのことばを伝えている最古の仏典の一つに法句経がある。この中から、涅槃についていくつかのことばをあげてみよう。

「誰でも、もろもろの感覚器官が静まり返ってあたかも馭者によってよく馴らされた馬たちのように、高ぶりの心を捨てた、悩みなき者たち、このような者たちを神々すらも羨やむ。」（94「真理の花はば・法句経」官坂有勝・筑摩書房）
「もろもろの森林は楽しいところにちがいない。食欲を離れた人びとは、どこでも人びとの楽しまざるところで楽しむであろう。かれらは欲望を求めものではない。」（99）

「瞑想に専念し、賢門で、〔欲望からの〕解放の静安を喜び、正しく目ざめて思慮深い賢い者は、神々すらもこれを羨やむ。」（181）

彼は悟りを開いて後、自己が悟った内容を説いてまわる。「人を見て法を

説いたといわれるように一人一人に仏教の真理をわかりやすく説いたのである。子供を失くした母親に「葬式を出したことの無い家からケシの実をもらってきなさい、そうしたら子供を生き返らせてあげよう」と説いたことはすなわち人はすべていずれは死なねばならぬという無常観を具体的に示したことに他ならない。

仏道修行者は当時あとをたたなかつたものと思われる。しかし修行者のすべてが出家することは社会の崩壊をもたらすことであったから出家者と共に在家の修行者も存在することとなった。在家の人々はいくつかの戒律を守って生活を清らかなものとするように努力をはらっていた。戒律はその基本的なものが五戒としてまとめられた。すなわち(1)生きものを殺すな。(2)嘘をつくな。(3)人のものをとるな。(4)淫らなことをするな。(5)酒を飲むなである。こうした戒律の多くが、すでに学んだユダヤ教の十戒の中にも見られることはおもしろい。

最後に宗教という同じ基盤に立っているキリスト教との比較を考えてみよう。キリスト教における神に相当するものが仏教の場合に存在するのだろうか。いわゆる仏(ホトケ)様ということばには、キリスト教の神に類似した概念が今日では一般的に考えられている。しかしはじめに述べたようにゴータマ=シッダルタは一人の人間であったのであり、悟りを開いた人のことを仏陀(仏)といったのである。従って修行に励むことで、何人と言えども仏陀になれる可能性を持っていたことをわすれてはならぬ。この考え方は原始仏教の段階では明確なものであった。つまり今日考えられているホトケの概念は全くなかつたといつてよい。今日では禅宗の中にこの考え方が受け継がれている。仏教は長い歴史を持っている④。時代が下り、各地に広まり、諸派が成立するにつれて内容的に変化していく、仏陀という普通名詞が固有名詞化していったのもこうした長い歴史の中においてなのである。

〈設問とそのねらい〉 設問1 下線部において、当時のインドの様子がうかがわれるが、王子の生存していた時代の特色を略記してみよ。

(ねらい) 思想とその基盤となっている時代との関連づけを試みる。当時の

インドにおいてはカースト制度及びその思想的基盤としてのバラモン教が盛んであった。これらはしかし諸矛盾を含んでいた。そして矛盾を解消せんがために仏教やジャイナ教が成立したことを考えさせる。

設問2 「欲望のない……」というときの「欲望」とはどんな欲望であろうか。本文に即して考えてみよう。そして又涅槃の境地と死との関係についても考えてみよう。

(ねらい) 仏教の基本に即して考えさせる。欲望や生・死をすべて知りつくし、生きることを願ったという点をつかませる。

設問3 ユダヤ教の十戒をあげてみよう。仏教の五戒とどの程度重複しているか。そして五戒と十戒の類似ということはいかなる理由なのだろうか。

(ねらい) ユダヤ教との比較をここで試み、相互の内容の関連性を見る。共通項目が、社会を構成する人間としての生き方にはじまっていることを考えさせる。

設問4 仏教の広まり、歴史、内容的変化について調べてみよう。

(ねらい) 特に内容については大乘と小乗のちがいについて、それから日本への伝来はどのような経路をたどってきたかという点について学ばせる。

〈発展的まとめ〉 仏教を学ぶ以前にギリシャ思想(特にソクラテスの無知の知や、エピクロスの快樂説—アタラクシアの概念)やキリスト教(特にイエス=キリストという人物について)が理解されていることが必要である。こうした内容についての理解があって仏教思想が浮きぼりにされよう。又各思想を単独に学ぶのではなく常に関連づけて理解することが、印象を強くするのに役立つと思う。仏教に限らず比較という点を考えつつ指導するのが良いと思う。仏陀について学んだあとは、日本の仏教を学ぶことが必要である。日本に伝来した頃—聖徳太子—や鎌倉仏教については是非扱かわねばならない。次の段階として日本の新興宗教のあり方を日本仏教の現状とあわせて考えたい。そして最後に、キリスト教と仏教を学んだあとで、現在の日本人にとって、宗教というものがいかなる意味を持っているかという迄を全体のまとめとして考えてみたい。

7. 東洋人の考え方の特徴　—基本的なものの考え方中心—
—西洋人の考え方との比較において—

都立羽田工業高等学校　原　崇　雄

〈重点的ねらい〉我々はすでに「インド思想」「儒教の思想」「仏教の考え方」を勉強した。そこでこの節では、それらの思想を踏前て「東洋人の考え方」の特色について、「西洋人の考え方」との比較を通して考察してみよう。

普通、「東洋人の考え方」は「西洋人の考え方」と対立的なものとされているようである。例えば、自然に対する態度に関して西洋人の考え方は人と自然を対立させ、能動的な意志をもって自然に働きかけ克服していく、これに対して東洋人は自然に融合し、自然と人間との一体化を求めると。しかし「東洋人の考え方」と「西洋人の考え方」とを明確に区別する絶対的な尺度は存在しないのではなからうか。確かに対立的な見方にはそれなりの妥当性；が存在していると思われるが、それらは東洋の若干の種族・民族について、あるいは歴史の一時期、あるいは特定の思想家・宗教家について顕著であるが故にそれらが東洋人の考え方一般についていえるごとくみなされているだけにすぎない。

そこで、我々は、従来対立的解釈に立つ見解を列挙しそれらを検討することで「東洋人の考え方」の特色を追求しよう。

〈指導内容の具体的展開〉 1. 東洋人の考え方は非合理的であり、他方西洋人の考え方は合理主義的であるといわれている。西洋の言語に比較して日本語・中国語などは表現が不正確であり、歴史的に「論理学」の発達がみられなかった。しかし非論理的なことと非合理的であることは必ずしも結びつかない。①インドの思想は極めて合理的であり、古代・中世のヨーロッパのものよりはるかに綿密な思索を行なっている。②例えば、自然科学こそ西洋よりもおとるかもしれないが、心理の分析、言語構造の分析、過去・現在・未来に一貫する永遠の理法に従うことを理想とした思想、等々であり、いわんや

非合理性なるが故に信ずるといった傾向は全然現出しなかった。

2. さらに東洋人の寛容宥和の精神に対して西洋人の対立的契約的精神が対比させられている。③ 確かに原始仏教は形而上学的論争の無益さを説き一つの立場に固守して他の者と争うことをきらい、中国人は現実的政治的見地から妥協融和をはかり、日本人は仏教、儒教の受容の際にみられる諸々の思想の社会的、風土的特殊性を強調する傾向が強い。他方、西洋においても、改革の実現が無知と迷信との駆逐、人民の啓蒙によって足りるとする楽観にさええられた啓蒙思想家によって寛容宥和の精神が唱えられた。④

3. 東洋においては、人間が一個人としての自覚が希薄であり、個人が普遍者に従属的であるといわれている。例えばヘーゲルは、東洋の諸宗教とキリスト教との相違について以下のごとく概括している。「ただ一つの実体そのものが真なるものであって個人は絶対的な有者^{イニ}に対立して自己保持する限り、それ自身ではいかなる価値をも有しない。個人はこの実体と一つになることによってのみ真なる価値をもちうるが、そのさいには個人はもはや主体たることをやめる。これに反してギリシヤの宗教やキリスト教では、主体が自由であることを知る」確かに東洋においては、政治的に「アジア的専制」といわれることに示されるごとく權威に対して盲目的服従という歴史現象が顕著であった。⑤ しかし、東洋においては西洋の中世にみられる權威に対する絶対的全面的盲信、同時にそれにもとづく異質的文化の破壊現象はおこらなかった。

4. 東洋人は自然に融合し、自然と人間との一体化しようとするが、これに対して西洋人は自然を対立させ、克服しようとするといわれる。しかし東洋でも中国、インドの歴史がしめすように運河、堤防、城塞などを建設した粉れもない事実が存在する。⑥ 他方西洋においても、自然に従っていき自然を憧憬する考え方が現出している。

5. 東洋思想は形而上学的でありその根底は〈無〉であり、〈東洋的無〉であることがしばしば唱えられている。確かに老子・荘子の哲学は「天地自然の道」「自由の境地」において〈無〉をといた。しかし、インド哲学概し

て<有>について追求している。さらに仏教、とりわけ大乘仏教では一切皆空を説いたけれども、この空観がインド・中国の仏教徒が強調しているように<無>とちがうのである。^⑦

6. 東洋人の対象の見方は直観的であり、組織的に大系化しようとしなが、西洋人の見方は、推理的・論理的に体系化しようとするといわれている。なるほど、具象的表現を重視する傾向のある中国人、単純な象徴的表象を愛好し客観的秩序に関する知識の欠如した日本人の物の見方には<直観的>との規定が成立する。^⑧しかしインドのアビダルマ文献学者の議論などは<直観的>とは決していうことができないし、内面的・反省的な科学である心理学・言語学の発達したことはそのことを立証している。

7. 東洋文明は西洋文明が物質的であるのに対して「精神的」であるという意見がある。しかし非宗教的な民族が精神的であるはずがない。^⑨この説は近代西洋思想が自然とその利用にすぐれ、それをテコにして政治的経済的に東洋進出してきたことを反映したものである。つまりその進出の脅威に対して東洋人の対応であり、反対にその意味で後進性の著しい東洋に対して「精神的」なる特徴をつけたにすぎない。^⑩

<設問とねらい> 設問1. 儒教思想に対してマックス・ウェーバーは、どんな見解をとっているだろうか。またヴォルテールはどのような見解をとっただろうか。

(ねらい) 西洋の思想家が、東洋思想に対して合理的側面を認めていることを紹介し、設問2.への導入とする。

設問2. マックス・ウェーバーは上記のごとく東洋思想にも合理性が存在することを認めている。だがさらに彼は「ルネサンス以後」なる区分を持ち出し西洋の合理性には伝統の権威に対する否定があり、東洋思想のそれと区別している。そこで設問なのだが、ほんとうにマックス・ウェーバーの規定するどおりであろうか。

(ねらい) 東洋思想にも伝統の権威否定の思想が、中国春秋時代末期、インド古代都市社会に存在する(『ブラーナの道徳否定論』『アジタの唯物論

』『サンジャヤの懐疑論』『原始ジャイナ教』等々)こと、又「ルネサンス以後」なる区分はまさに市民社会の成立に規定されており、程度の問題で西洋に分があるにすぎないことを把握させる。

設問3 この対立的見方の根拠には、風土的要因があげられているが、どのようなことなのか。

(ねらい) 風土と思想との関係について考えさせ設問4への導入とする。

設問4 啓蒙思想家の「楽観」と「寛容宥和」の関係について具体的にどのようなことなのかをのべよ。

(ねらい) 風土的要因説の妥当性と限界性を考えさせる。

設問5 「アジアの専制」の基礎は「村落共同体」であるが、この関係について具体的にのべよ。

(ねらい) 「村落共同体論」は、元来、フランス型の市民革命を経験しないドイツにおいてドイツの統一は市民的平等の基礎においてもたらされなければならないという主張を含んでいたことを提示し、東洋におけるこの克服は19世紀以後の現実的な課題であつたことを考えさせる。

設問6 「事実」と「自然との一体化」との関係についてのべよ。

(ねらい) 「自然との一体化」なる理論が東洋思想の中のどこにあるかを復習させ、同時に「村立の見解」(西洋と東洋との)の妥当性及び限界性についてまで発展的に考えさせる。

設問7 すでに勉強したバラモン教の自然崇拜・ベダ・ウパニシャッド哲学・原始仏教・孔子・孟子・老子・荘子・等々の思想を整理してみよう。(〈無〉をテーマにしてそれらの諸特徴を復習してみよう。)

(ねらい) 〈東洋の無〉が東洋的思想全般のものでないことを考えさせ、人倫秩序を重視することから自分的階級秩序を肯定し、尚古的保守的性格の強い儒教のさかえた地域(中国・日本)が西洋よりも非形而上学的であることを追求させる。

設問8 具体的にどんなことを意味するのか。

(ねらい) 中国では象形文字の具象性・概念に対する具象的表現の愛好

・仏教の禪宗への中国受容における非論理化、日本では自然科学の発達の遅延・シャーマニズムの古来有力であったことを、等々を提示し、中国人・日本人の思想史的特徴の一端を追求させる。

設問9 宗教に対する態度に関してインド人・中国人・日本人・西洋人等は歴史的にどんなものであったろうか。

(ねらい) インド人は極めて宗教的であるが、日本人・中国人は宗教的とよぶことができないうし、西洋人の方がはるかに宗教的であることを、生活史的に考えさせる。

設問11 西洋文明に対するアフリカの住民・アメリカ原住民の対応はどんなものであったろうか。

(ねらい) シュヴァイツァの『アフリカ物語』などを提示し、東洋のみに規定する意見でないことを理解させる。

〈発展的まとめ〉 以上東洋思想の特色として従来指摘されてきたものを列挙し検討したものであるが、そのいずれも東洋と西洋を区別する絶対的な尺度とはならない。これらを総合しても西洋の思想と対立させることは不可能である。ただ東洋思想の諸特色として、これらのものがあげられた理由は、既に〈重点的ねらい〉のところで述べた通りである。したがって東洋思想のこれらの諸特徴には部分的に眞理性が存在していることも確かなことである。問題は思想をその時代やその社会の中に正確に位置づけることであり、思想の諸特徴を没歴史的に一般化・通俗化してはならないということである。正確な理解なしには理想的な行動も決して実践することが出来ないであろう。

そのような意味においても我々はこの章で勉強した経験を生かすべく次の章における諸思想家の時代や社会へとびこみそれらの世界観・人世観を追求してみよう。そうすることが我々の世界観・人生観を確立する何より方法となるであろう。

第三分科会 <現代と思想>

1. 功利主義

—先哲の基本的な考え方中心—

都立小平高等学校 井原茂幸

<重点的ねらい>

1. 功利主義の人間観は、生まれたままの自然的人間から出発する。これによれば、人間は生来快樂を求め苦痛をさけようとする本性を与えられており、総ゆる人間の行為は、快樂と苦痛の二つの原理によつて支配されているとみる。功利主義は、自己の経験を通して得たこのような自然的人間を支配している原理から導き出された思想であることを理解させる。
2. 快樂を増大させ苦痛を減少させようとする自然的人間を支配する功利の原理に道徳的価値を見出すことによつて功利主義の倫理は成立するのである。こうした生き方のめざすものは個人の幸福の実現にあるが、市民生活においては、個人と社会の幸福は必ずしも一致しない。そこでこの統一の手がかりを政治と教育に求め、最大多数の最大幸福の道徳的理想を実現しようとするのが功利主義思想である。このような功利主義の道徳説を理解させると共に幸福について深く考えさせる。
3. 自由と平等の実現をめざす近代市民社会は、自由の名のもとに放縱に流れ、利己に傾くきらいがあつた。ことに産業革命後の社会においてはこのような傾向は経済の発展に伴つて顕著になつた。この近代から現代への過渡期において責任倫理の確立によつて社会改良を図ろうとしたのが功利主義であつて現代にも大きな影響力をとどめている。功利主義の時代的意義にも着目させると共に現代における個人の自覚と責任について深く考えさせる。

<指導内容の具体的展開>

自我をもつ現実的人間の考え方が確立され、近代市民社会が発展して産業革命後の資本主義社会が台頭してきたとき、功利主義思想があらわれた。功利主義というのは、人間は本来快樂を求め苦痛をさけるようにつくりられてお

り、この快苦の計算に基づいて快樂を増進させるように行爲を選択して生きることこそ賢明な生き方であるとする考え方である。この功利の考え方を道徳的に基礎づけ、これによつて法律や社会のたて直しを図ろうとしたのがベンサムであつた。

かれは『われわれの行爲を支配するもの、行爲選択の指標となるものは、快樂と苦痛という二つの原理である』とのべ、①快樂を善、苦痛を悪とし、快樂を助長し、苦痛を減少させる生き方、すなわち幸福を増大させる生き方に価値を認めた。しかもかれは、人間の快苦はみな同質のものであるとして量だけを問題とし、それは計算できるとした。

さらに②個人の集合体が社会であると考えたかれは、社会の幸福は個人の幸福の総和であつて、個人の幸福より価値の高いものとし、③『最大多数の最大幸福』を道徳の基本原理とした。しかし市民生活においては、個人の利益の追求が必ずしも社会の幸福に役立つとは限らない。そこでかれはこれを調和させる力として制裁を説いた。かれによれば、個人と社会の間には、アダム・スミスの神の「見えざる手」のような両者を調和させる力が働いており、個人が社会の幸福に反するような行爲をしようとするときには、個人に苦痛を与えてその行爲を中止ないし修正させ、社会の幸福に一致させるのだという。このような力をかれは制裁 (Sanction) と呼び、④それを自然的、道徳的、政治的、宗教的制裁の四種に分類し、その中で政治的制裁を最も重視した。

ベンサムの説いた功利主義を発展させ、大成したのが J. S. ミルである。かれは人々の味わう快樂は、決して同質のものではなく、しかもそれは計算できるものではないとしてベンサムの考え方を修正した。かれによれば、人間には肉体的、精神的にさまざまな快樂があり、われわれが求める快樂は⑤『満足した豚や愚者が求める快樂ではなく、人間としての品位を高める快樂である』として、質の高い快樂を追求するところに人間の正しい生き方があるとした。そのような高級な快樂は、高い教養と連帯感 (道徳的自覚) から生まれるものであるとして、利己心の克服の必要を強調した。

さらにかれば、本来人間性の中には、利己心だけでなく同時に他人に対する同情心や慈愛の心が備わっており、この道徳心こそ自己の幸福と他人の幸福を結びつけるきづなであるとして、『人にして貰いたいと思うことを他人にもしてあげなさい。自分を愛するように隣人を愛しなさい』というイエスの教えこそ、われわれが守らなければならない道徳の最高のものであるとした。

よりよい市民社会の実現のために、人々の道徳心を高めることが基本であると考えたミルは、その方法として、法律や社会組織の改革を通してより完全な社会の実現を図ること、教育と世論の力によつて⑥個人と社会の幸福は不可分であり、社会の幸福を増進させるための献身的行為は、社会的に賞賛されるべき価値のあることを自覚させることが必要だと説いた。

さらに幸福の問題について深く考えたかれは、『自伝』の中で、⑦「われわれは幸福を求めて果たして幸福が得られるであろうか」という疑問を提出し、われわれが幸福になる道は、自己の利己心を克服し、教養を高める努力を怠らず、『幸福を人生の目的とするのではなく、何か幸福以外の目的物を人生の目的とするにある』とのべ、われわれが何かに生き甲斐を求めて努力するとき、幸福は自ら来るものであることを示唆した。

〈設問とねらい〉

設問① 功利主義では、人間の行動の結果もたらされる快楽と苦痛を考え、快楽を増大させ苦痛を減少させる行動を選択する功利の原理に価値を認めるのであるが、人間には正義や愛や平和などのために苦しみをいとわず、自己の幸福を犠牲にして生きる生き方もある。このような生き方は功利主義からはどのように説明されるだろうか。考えてみよう。

(ねらい) 幸福説と道徳主義、結果説と動機説を対比して考えさせる。

設問② 功利主義では、社会の幸福を個人の幸福の総計と考えているが、社会と個人の関係をそのように考えてよいか。話し合ってみよう。

(ねらい) むづかしい問題であるが、社会は個人の集合体であるとする考え方だけでは説明のつかない問題がある。功利主義に対する批判をも含めて、社会認識について目を開かせたい。

設問③ 最大多数の最大幸福が政治的にどんな意味をもっているか、社会福祉の理念や多数決制と関連させて考えてみよう。

(ねらい) 最大多数の最大幸福の原理が道德原理としてのみならず政治原理として民主政治の目標とされているのは周知の事実である。この原理がめざすものは社会福祉の実現であり、その方法が多数決制である。しかしこの理念は個人の尊重を無視しては成立たないことを理解させる。

設問④ 自然的(物理的)制裁、道德的制裁、政治的(法律的)制裁、宗教的制裁とは具体的にどんなことか、またベンサムは政治的制裁を重視したのはどのような理由によるものか。

(ねらい) 制裁の意味をよく理解させると共に、ベンサムは法律家として社会改良のために、道德原理の確立を企てたこと、社会正義の実現のために政治の力をかりなければならぬと考えたことを理解させる。

設問⑤ J.Sミルのこのことはどんな意味か、また人間にとつて何が低級な快楽であり、何が高級な快楽であるか話合ってみよう。

(ねらい) 自己の生き方を反省させると共に、より高い目標に向つて努力しようとする意欲と態度を養う。

設問⑥ 個人と社会の幸福はどのような不可分の関係をもっているか、自己の経験をもとにして話合ってみよう。

(ねらい) いろいろな考えが提出されようが、基本的には個人と社会の一体感こそ人間としての高い自覚であり、連帯感や利他心が大切なことを理解させる。

設問⑦ この問題について話合い、現代における真の幸福を考えてみよう。

(ねらい) 生きがいと幸福という問題を深く考えさせる。

〈発展的まとめ〉

功利主義は、近代市民社会における責任倫理の確立に大きく貢献したが、その中には心情倫理の考え方に対する少なからざる批判を含んでいた。責任倫理と心情倫理、道德における結果説と道德説は、倫理学の二つの基本的な考え方であるばかりでなく、現代に生きるわれわれの課題でもある。

2. 人生における宗教の意味 —ものの基本的考え方中心—

育英工業高等専門学校 コンプリ=ガエタノ

〈重点的ねらい〉 テクノロジーと産業文化の発展によつて、現代社会は物質的な価値に魅力を感じ、精神的な価値を軽視する傾向がみられる。特に宗教は人間疎外の一つの原因として否定されたことがある。

しかし人間は物質と経済成長にあきたらず、その中に生きがいが見出されないことをしだいに感じるようになってきた。「人間はパンだけで生きるのではない」と私たちが悟るとき、宗教を再評価する必要を感じる。生徒の中にも自分の人生を考えるにあつて、この問題を真剣に考える人が多い。これらの生徒に答えを見出すヒントを与えるのが、このテーマのねらいである。

各人の信仰の自由を尊重するために、歴史的な宗教団体を超越して、このテーマをとりあつかうのは、適当と思われる。宗教を世界観、人生観として紹介するのがよからう。とりあつかいは無神論、汎神論、一神論を比較しながら行なう。

〈指導内容の具体的な展開〉

1. 問題提起—人間一人一人の存在は一時的である。いつか生れ、いつか死ぬことに決つている。他の生物も同様であつて、全てが過ぎ去る。だが自分のあとでも存在の流れが続くと言えるし、自分の前にも存在があつたことを否定できない。この存在がどうしてあるのか、どこに向うのか、またその中の自分は何の意味があるのか? ① 時間を超えてこの一時的な自分を世界に位置づけ、一つの意味を与えようとするのが宗教である。宗教というときすぐ宗教団体や宗派を考える必要はない。それよりも、ここでは世界と人間の存在の問題に対して与えられている三つの種類の答えを紹介することにする。

2. 無神論 — 無神論というところから宗教の否定のように考えられがちであるが、無神論者の心情を分析してみると、彼らにも世界と人間の問題に対する一種の答えと言えることがあることがわかる。彼らは神を否定するが、そのかわりに物質とエネルギーの永遠性を信じているだけではなく、人間に到る物質の発展が盲目であつて、偶然または必然の働きであることを信じているのである。ときにはこれが科学的な考え方であると言われるが、実際には科学と無関係を一種の信仰と言えよう②これを人生に適用して考えてみると、人間にどんな意味があるかが容易にわかることができよう。

コントはこのような思想に基づいて、一つの宗教団体を作ろうとしたことが知られている。

3. 汎神論 — しかし人間は盲目で命のない自然の法則の中に生きることの意味を見出すであろうか？ これに一種の冷たさ、無意味を感じる人が、全ての時代にあつた。自然はそんなに盲目的なものに見えない。むしろ、自然はかえつて命の母体であり、暖い心で全てを配慮しているように見える。その中に人間には理解できない神秘に包まれた計画性と調和が見られる。これを説明するには、変化しつつある現象の世界の根底に、全てのものが一つの大存在に結ばれていることを認める必要がある。この表面的な現象の下にひそんでいるこの大存在こそ、全ての現象のもととなり、全てに意味をあらしめるものである。人間は現象の世界の中にも自分の中にもこの大存在を悟り、それに従つて生活し、感謝のうちに生きて行かなければならない③これこそ世界と人間に「内在する神」なのである。

この考え方に基づく一群の宗教がある。特に「梵我一如」④というバラモン教の一句はよくこれをあらわしている。バラモン教から仏教に入り、東洋の宗教の中心となつている。

4. 一神論 — 以上の立場に同調しながらも、違つた結論に立つ考え方がある。汎神論者の神は非人格的なものであつて、私たちが互いに愛し合い、相

手になるように、私を愛する方ではない。「誰か」ではなく、自然そのもの、世界そのものである。

そこで永遠の存在が理解し尽くされないにしても、（神はあくまでも神秘であるが）、神が知恵と愛の持ち主で、唯一で、永遠から存在する人格的な方であるとする。この神は全ての物の存在と発展の源であり、全ての物に法則と目的と意味を与えているのである。人間には分からない事があるにしても意味の無い物が無いだろう。物と人間自身に内存するこの法と目的を理解することこそ、私達の重大な務めであり、神にいたる道なのである。こうして神に感謝しながら、その愛に応えることは宗教である。^⑤

一神論のたちはにたつと、神は世界と人間に「内在する神」（汎神論）であるよりも、世界と人間を「超越する神」なのである。^⑥神は他者である。

まさに神と世界は、「創造」^⑦によつて結ばれている。創造の概念はむずかしいが、その意味は神が創造によつて私たちに自分の愛を表わし、すべての本源でありながら、神は私達の存在に実存的に一番深く結びついているということである。「私たちは、神の中に生き、動き、また存在している」（使徒行伝17₂₈）。この考え方はとくにユダヤ教、キリスト教、回教の宗教心の中心である。

<設問>

- ① 宗教の問題はどこから生れ、またどのような問題であるか考えてみよう。これについて、自分の体験と疑問を書いてみよう。
- ② 科学と宗教の関係を考えてみよう。
- ③ 汎神論的考え方にもとづく宗教は、どんな形をとるかを考えてみよう。
- ④ 「梵我一如」という言葉は何をあらわしているかを考えてみよう。
- ⑤ 一神論的な考え方にもとづく宗教は、どんな形をとるかを考えてみよう。
- ⑥ 「内在する神」と「超越する神」とは何を意味しますか。
- ⑦ 「創造の概念」を説明してみよう。
- ⑧ ③と⑤の宗教の違いを明らかにしよう。

- ⑨ 「創造」(⑦)による世界の見方と、「無神論」「汎神論」のそれぞれの世界の見方を比較してみよう。

〈発展的まとめ〉

1. あらゆる時代と思想をみれば、その中に、宗教の占める比重が大きいことがわかる。宗教がないように見える現代においても、信仰がないとは言えない。いわゆる「科学的世界観」の中にも、科学的(実験・実証科学的)でない内容がどれほどあるかが、上に見た通りである。無神論は一つの信仰であつて、「物質の崇拜」と言える。この観点から、科学と信仰の関係を考えなおす必要がある。多数の科学者が、はつきりとした信仰を持っていることは、その良い例である。ただ、歴史で学ぶように、宗教の乱用と墮落と言うべきものがあつたことは、否定できない。これを正す必要がある。
2. 汎神論的宗教の例は、西洋ではストア学派にみられる。東洋では、バラモン教と仏教の他に、老、荘思想と現代ヒンズー教にもみられる。日本では特に日蓮宗と禅宗が、その著しい例であらう。
3. 一神論の理解は、キリスト教の理解の為だけではなく、西洋のほとんど全ての思想家の理解の為に必要である。ソクラテス、プラトン、アリストテレスから始つて、パスカル、デカルト、カント、キルケゴールに至るまでさらにキリスト教と対立しているマルクス、ニーチェ、サルトルなどの理解のためにも欠かせないものである。
4. 最後に、道徳の理解の為に、道徳と宗教との関係を考える必要がある。カントの結論はよく知られている。道徳生活の最後の要請は、神の存在である。神がいなければ、道徳を説明することが出来ないと彼は言う。

3. 人間的自由の確立（人為的な教会からの離反）

—思想の歴史的展開中心—

洗足学園第一高等学校 高野 啓一郎

〈重点的ねらい〉 ルソーが「社会契約論」の冒頭に「人間は自由なものとして生れている。しかも、いたるところで鉄鎖につながれている」といつたとき全ヨーロッパの王侯君主たちは内心の深い衝撃を禁じえなかつた。ヨーロッパはすでにルネサンスと宗教改革とを体験し、市民としての政治的自由にとつて教会制度と絶対王制と相矛盾するものであることを知りはじめていたにもかかわらず、完全にその意味を把握してはいなかつたのである。だから『自然法思想』が完全に市民のものとして政治の上に実現されてゆく過程が『啓蒙思想』だといつてもよい。この思想の系譜はイギリスでは、経験論哲学の影響下にホブズ、ロック、ヒューム、アダム・スミスがある。ドイツでは、レツシング、カント、ゲーテらがある。けれども、その多様性と獨創性と徹底性とにおいてもつともみごとな花を開かせたのはフランスであつた。オランダから渡つたグロチウスをはじめ、モンテスキュー、ボルテール、ルソー、ケネー、チュルゴー、そして多くの芸術家たちによつてフランス啓蒙思想はその後の世界の近代思想の震源地となつたのだ。もちろん、震源地のエネルギーというものは急に蓄積されるのではない。あくまでも人間の立場に立つた知的探究の過程のなかで培かれてきたのである。まずガリレイ・ニュートンの科学的認識の探究があつた。彼らは自然を客観的で経験的な倫理によつてとらえ、自然をつくる神の存在をみとめはしたが、自然それ自体を神の計画や目的とはきりはなした数学的力学的実在として認識したのである。この認識はやがて人間とその社会への認識に発展しないではおかない。ここに人間が神に向つて自立する時代が始まつたのである。

〈指導内容の具体的展開〉 デカルトによる自我の発見と、自我の自由な働きによる情念の克服、そして確実な理性的存在としての自我への確信にもとづく論理的明晰、そのような考え方の基礎の上に、イギリスのホブズやロ

ソクノ考え方がフランスに移入され、ブルボン王朝の絶対専制下にあつたフランスには、モンテスキュー、ヴォルテールらを中心とする啓蒙主義が開花した。けれども、この時代の思想家のなかで、ルソーこそ後世への影響においてもつとも傑出した思想家であつた。彼の生い立ちはその晩年の著作である「告白」にくわしいが、彼は生後九日で母を失い、十才で父と生別した。十六才まで親類知人を転々として時計、彫金の徒弟をし、やがて生地ジュネーブを出てフランス、イタリアの各地を放浪して、貴族たちの気まぐれな好意や悪意のなかで苦勞を重ねる。そして壮年期に作家としての地位を固めるまで全くのただひとりて生き、ただひとりてたたかいぬいた人であつた。そのなかで彼はかたときとしてみずみずしい感受性を失うことはなかつた。彼は理性の人ではなく、意志の人であり、より一層心情の人であつたといえよう。にもかかわらず彼の著作はすぐれて哲学的内容をふくむのである。彼の前半生は貧困のための放浪であり、その後半生は政治的迫害のための放浪であつた。

前半生からえた個人としての人間の倫理観と、社会人としての人間的な反省とが、彼をして巧まず飾らず卒直にしかし愛情深く、農民を商人を女性を貴族を王を語らせる。そしてそのとき彼のなみはずれた想像力と感受性とが、当時の非人間的な制度を告発し、正しく未来を予見することになるのである。

1. 自然に帰れ「ちようど私の上に夜鶯が一羽いて、その歌をききながら眠りに落ちた。眠りのところよさ、それにもまさる目ざめのところよさ。すつかり明るくなつている。眼をひらくと、水と緑とすばらしい景色。起き上がつて、からだをひと振りすると空腹を感じる。」（「告白」）このような自然描写はかつてヨーロッパの文学史上に見られたかつたものである。彼の自然美への嘆賞は、流浪の生活の中で培われた。そしてそのなかでみたのは疲弊した農村の姿であつた。「自然がゆたかに恵みを与えているのに、それが野蛮な収税吏の食いものになるだけという、この美しい地方の運命をいたましく思つた」（告白） 農村を荒廃させる文明社会、パリの支配者たちへの怒り、さらにそのようにして作られた学問、芸術の發達が、かえつて人間

の自由な感情を抑圧し、魂のはつらつとした道徳の力を失わせる。人間の自然の状態は、自由で平等であるのに、社会をつくり文明が発達するにつれて、人間は社会制度という鉄鎖につながれて、不平等と悪とが始まるのである。人間のつくりだした文明と社会と法律、そしてその根源としての封建的な王権が人間の貧富や戦争を生み出す原因となる。『すべては造物主をはなれるときは善であるが、人間の手にわたるとすべて墮落する』（エミール）

2. 一般意志による社会契約 ルソーはこのような体験に立つて熱烈に道徳を追求する。よき心と理性と自由をもつ人間が、なぜ悪におち理性と自由をみずから権力者に与えてしまうのか。いかにしてそれを避けることができるか、それにはいかなる手段があるのか、を問うている。彼によれば、国家の存在する正当な理由は、個人が相互に契約を結び、一つの団体をつくり、個人の権利をその団体に保護してもらう。このような国家としての団体に働く国民全体の平等と自由の保護を目的とした公共的意志を「一般意志」といい、単なる個人的私利の総和としての「総体意志」とは区別される。このような一般意志によつてはじめて「人民主権」が確立し、この理想国において完全な自立性を保ち、自己自身とのみ結束し、自己の意志を他人にゆずつたり、分割したりすることのない、つねに正しく、他と争うことのない人格の具現が可能になるというのである。この政治論を後年のフランス革命も全面的にうけ入れることになるが、彼はまた、自然の創造者としての神の存在をみとめると同時に、人間の自由と活動とを強調し、教養や宗派にとらわれないうい、いわば存在そのものとしての神をみとめている。彼の自然法思想もこのような宗教情操にうらうちされているものと見るべきであろう。

vvv

〈設問とそのねらい〉

1. 「エミール」「社会契約論」「告白」「孤独な散歩者の夢想」など、彼の著作をよんで教科書の内容を深めよう。

いずれも文庫本でかなり読みどたえのするものだからじっくり腰をすえて読むことが必要だが、フランス革命の理論的確立者、ロベスピエールによつてその遺骸がパンテオンにまつられたこの孤独の英雄の生い立ちや思考、喜

び、怒り、焦立ち、妄想などという個人生活の面と、高く強く飛翔する革命の呼び声とがこだまし、呼びあいして、生き生きと現代によみがえるのを知るのである。公害や物価高になやむ工業化社会の我々は、まさにルソーの予言のそのもののなかに生きる思いがする。

2. ルソーの啓蒙思想はモンテスキューやボルテールとはかなりおもむきの違い面がある。どんな点だろうか。彼のロマンチズムの由来を考えよう。

ロマン・ロマンが「ボルテールは百科全書家という多くの星をいつばいかかえた星座のなかのもつともよく光る星であつた。ルソーはただひとりで生き、そしてただひとりであつた」といつている。彼はただひとりで自分の教養と地位をかちとつた真の思想家であるというばかりでなく、自らの体験と自由な発想とを偽ることのできない真の詩人でもあつた。またモンテスキューが、社会をそれぞれのままに分析したのに対し、ルソーはあくまでも主体的にいかにして社会と人間とを再構成し、再生させるかを問題としたことが重要である。

3. 彼の社会契約説の概要を説明し、その背景としての自然法思想の歴史を、百科事典などで調べてみよう。

自然法思想が遠くギリシャ・ローマにさかのぼり、キリスト教中世を経て、啓蒙期にどのような変容をとげるかは興味深い問題だ。同時に「自然」という考え方が、実に複雑な内容をもつことをおさえておこう。

〈発展的まとめ〉 フランスの啓蒙主義が、デカルト以外の合理主義哲学の土壌に立つ人間精神の明晰性を何よりもとおとびながら、ルソーによつて内的・靈的に深められて、政治、教育、芸術へと大きな影響を与え、さらに各国の政治史に深く強い原則を刻印してきたことが、以上のことからいくらかでもつかみえたであろうか。カントが、規則正しい毎日の日課をただ一度だけ狂わしたのは、「エミール」を読んだときであつたというし、またフランス革命をとおして、社会契約、一般意志、人民主権などという用語がひろく普及し、それは日本国憲法の基本理念にも伝わっているのである。この素朴で卒直で繊細でしかも自信に満ちた幻想家は、その真摯な体験によつて未

111

来を適確に予見し、彼自らの予期もしなかつた大きな影響を後世に残しているのである。

4. 近代市民社会とカントの思 策 —思想の歴史的展開中心—

都立大山高等学校 中 村 新 吉

〈重点的ねらい〉 カントが生きた時代は、ふつう、近代市民社会と呼ばれているが、言うまでもなく、イギリスやフランスにおいて市民階級が抬頭し、資本主義社会が形成されて近代市民社会が成立しつつあつたのに対し、ドイツはヨーロッパの後進国であり、封建的社会にとどまつていた。カントの思索はこうしたドイツの現実をみつめながら、ひろくヨーロッパ社会の近代化にまで視野とし、ギリシア以来の思想上の普遍的課題に答えようとするものであつた。カントの思索は宗教学・美学・人間学・哲学・倫理学などの広大な領域にわたっている。ここでは、倫理的諸問題にどのようにカントが取り組んだかについて考えてみたい。

ここでは、カントは、近代市民社会をどのように批判的にとらえたか、そしてどのような社会を理想としたか、さらに真に自由なる人間のありかたをいかに考えたか、そしてそれに関連して道徳と幸福をどう考えたか、などに視点を置いて、自由・道徳・幸福をめぐる諸問題を解明してゆく上での考え方を明らかにしたい。

〈指導内容の具体的展開〉 18世紀のヨーロッパは、市民階級がしだいに社会的実力をきづきあげ、市民社会が形成されつつあつた。自由と平等の高い理念が政治的、経済的、文化的に標ぼうされた。活発な経済活動や議会政治、自由な文化の興隆が近代社会をいろどつた。しかし、現実の社会を動かしているものは貪欲でみにくい人間性であつた。合法的活動の底で利害打算が働き、自由な人間は実は自分だけの経済的な富や財あるいは名誉を獲得しようとすることに躍起となつていた。理念としての自由や個人主義が現実には放縦と利己主義となり、自由競争の社会は実は闘争の場にすぎなかつた。法的契約社会を与えられた人々は、自由をかくれみのにして、法にふれないかぎり、利己的な欲望の充足に走つていたのである。^① 封建的体制の鉄鎖か

ら開放されつつあつた大衆は、自由の眞の意味、自由を生かすあり方、よく生きるあり方についてなお未熟であつたといつてよからう。

思想的な面でも、人生の目的は幸福にあり、幸福が善であり、道徳も幸福に役立つかぎりにおいて善であるという幸福主義が通念となつている面が強かつた。ところが自己の幸福を追求する努力はけつして道徳的な心情を生み出すものではなかつた。かえつてその努力はみずからの人間性を幸福や欲望追求の奴隷とさせ、善(道徳)に無関心な心情を生み出させてしまふ結果となりがちであつた。自由も幸福も人間にとつて望ましいものでありながら、自由な状況がいよいよ現実化し拡大するにつれて、人間性が墮落し腐敗し、幸福への願望が強まれば強まるほど、尊厳であるべき人生が汚濁に染ちたものとなつたのである。

かかるヨーロッパの歴史的現実をみたカントは、社会を秩序づける法的法則(法律)が成立したにもかかわらず、いまなお人間の精神(意志)を秩序づける道徳的法則が近代市民社会に正しく定立されていないと判断する。この認識にたつて、カントは、人間の精神(意志)を秩序づけ支配しうる道徳的法律が命ずるものを探究する。この探究の結果が「道徳的法則はいかにして幸福になるかを教えるものではなく、ただ幸福に値する生きかたをせよ、と命ずる」^②という命題に結晶する。法的法則(法律)が人間社会の平和と幸福を促進するものであつたのに対して、道徳的法則は幸福に値する生きかたを人間に命ずるものであつた。けだし人間はだれからも命令されなくとも幸福を求めるが、命令されなければ幸福に値する生きかたを求めようと努力しないからであらう。

かかる「幸福に値する生き方」とはどのような生き方であろうか。カントはこれに対して「尊敬に値する生き方」をすることであり、そしてそれは「尊敬に値する人間」にならうと努力することによつてささえられる、と答える。彼の人生への情熱はつぎの一節にもみられる。「道徳性(Moralität)を喪失するよりは生命を犠牲にする方がまさつている。生きることは必須ではないが、しかし生きる限り尊敬に値するように生きることは必須である。

… 生きる限り幸福に生きることは必須ではない。生きる限り尊敬に値する
ように生きることは必須である」。この文章からもわかるように、「尊敬に
値する生き方」は道徳性を喪失しないで生きる生き方であり、道徳性を体現
して生きる人生への真摯な態度にとつて、幸福は第二義的な意味しかもたな
かつたのである。

では道徳性すなわち道徳的価値のある生き方や行為は、カントにおいてど
のように考えられたのであろうか。当時、行為が法にかない、その結果が幸
福や利益をもたらすならば、その行為は善であると考えられがちであつた常
識に対して、カントはその行為の生じてくる動機が善をめざすものかどうか
によつて行為の評価が定まると主張する。すなわち道徳的に価値ある実践は
善を実現しようとする純粋な意志からなされなくてはならない。なぜならば
行為の外表面がよくとも、目に見えない心の動きが思惑や打算をしのばせてい
るならば、その行為の主体たる人間はいつそ人間性を失ひ、精神において
犯罪を重ねていることになるからである。こうしてカントは善意志に絶対的
の価値をおき、それは道徳性に不可欠なものとし、善意志を欠いてなお善しと
される適法性の行為とを区別する。かかる区別によつて、カントは近代市民
社会に生きる人間のあり方を、合法的なものから道徳的なものへと深化させ
た。

善意志と諸徳すなわち知性・機智・勇気あるいは権力・財産・健康などの
関係について考えるならば、諸徳も善意志によつて徳となり、それを欠く
ならば諸徳は徳でありえなくなると考えられたのである。

人間はとかく自己の幸福や欲望の充足に走りがちであることを思えば、善
への実践を意欲することはもつともよく良心を発動させている状態である。
この良心を発動させている状態こそ、悪への傾向性と戦いながら、理性への
声に従おうとするものであつた。これこそ自律としての自由の確立であり、
それは道徳性の実現に責任を負うて行為しようとする独立可憐の高潔な精神
によつてささえられ、生きてくる自由であつた。啓蒙思想家の説く法律的（
社会的）自由が個人の利己主義を残存させる結果となつた。これに対して、

カントの説く自律としての自由は自己の利己主義と戦い撲滅し、善を実現するための自由である。あくまでも自律としての自由であるから、道徳法則によつてみずからを規律し、みずからの決意と責任によつて行為する自律的人間への脱却が理論づけられたのである。

ところが、人間は不完全な存在であり、悪への衝動を本性としてもっているから、道徳法則へ自己規律する自由に耐えがたい。この人間性の理解にたつて、カントはあるべき理想社会すなわち「目的の国」を実現するために、各人は道徳法則の精神に自己の心情を適合させるように、努力し前進するほかないと説く。そしてそれは現在の自己の心情を否定し、変革し、純粋な清浄の心をつくり上げる歩みであり、善に向つて不断に歩みつづけることであつた。カントはこうして近代人の「心の革命」を訴えたのである。

〈設問とそのねらい〉

設問1. 下線①に関連して、近代の法的契約社会がなぜ人間性を鈍化し高めるところか、腐敗・墮落させたか。その問題点を指摘せよ。

(ねらい) 道徳よりも幸福が優先し、社会が法的に近代化されても人間が道徳的に自覚する面が欠落していたことなどに着眼させ、カントが近代市民社会に取り組んだ根拠を理解させる。

設問2. 「道徳的法則は……ただ幸福に値する生き方をせよ、と命ずる」(下線②)とある「幸福に値する生き方」とは、どのような生き方を指しているか。全文を読んで5行以内にまとめよ。

(ねらい) カントの倫理的精神の本質を示していることばである。全文をくり返し精読させることによつて、学習のねらいを把握させる。倫理的な文章を忍耐強く読み、考え、表現する能力を養おうとするものである。できれば「道徳哲学」または「道徳形而上学の基礎づけ」を読ませて、レポートにすることも考えられよう。

設問3. 道徳性のある行為と適法性のみ行為(下線③)とはどのような点

で異なるか。具体的な例を日常生活のなかから取り上げて説明せよ。

(ねらい) 抽象的な論理もじつは日常の身近かな、だれしも体験し討論しているところから積み重ねられたものを理解させる。日常の問題と結びつけて思索する態度を養う。また、真に善なる行為の意味を自覚させようとするのがこの設問のねらいである。

設問4. 下線④の部分、日常の具体的事例でもつてわかりやすく説明せよ。

(ねらい) かなり難かしい問題ではあるが、抽象を具体的なものにひきおろして思考する力を養う。

設問5. 自由はたやすいあり方と一般に考えられやすいが、なぜ人間は自由に耐えがたいのか(下線⑤)、またなぜ社会的(法律的)自由よりも道徳的自由が人間社会にとって必要か、現代人の行動のしかたと結びつけて論じなさい。

(ねらい) 自由が与えられるものではなく、各人が責任もつて作り出すものであること、自由に応じて責任がまた増大すること、自由は人間性を高めるためにあるものであること、などに気づかせ、カントの思想がなお現代人にもきびしく反省を迫るものであることをうけとめさせる。

〈発展的まとめ〉 カントの思想はドイツ的な厳密な論理の整合性に貫かれながら、崇高はパッションを発露させている、きわめて難解なものとされている。それゆえ、指導内容の展開にあたっては、具体的な日常生活から説きおこすことを忘れてはなるまい。ここでは近代社会と近代人のいわば道徳的には無政府状態であつた現実に、カントがその克服のためにどのような取り組み方をしたか、を明らかにしようとしてつとめた。思想の歴史的扱い方を中心とする取り上げ方であるから、特にロックらの社会契約思想および幸福主義との関係で考えさせたい。善意志と諸徳との関係についてはアリストテレスの思想と比較して考えさせることもできる。なお、ここで充分に取り上げられなかつたが、よく生きるためには、理想の社会を実現するには、なぜ各人が自分の幸福を追求することを道徳的あり方に優先させてはならないか「善と幸福」の関係を軸として考えさせるように展開することも考えられる。

5. 原典からみたデカルト —先哲の著作・言行中心—

都立東村山高等学校 村 松 悌二郎

〈重点的わらい〉 都倫研紀要の第8集(844年)に、同じデカルトについて書かせていただいた。そして、本年度、生徒とともに「方法序説」を通読してみて、また、新たなものを感じとつた次第である。

今年は、新指導要領がでたこともあつて、「人生観・世界観」の展開の一つの型として、「原典からみたデカルト」をどう取扱うかを問題としたい。デカルトをどのようにみるかは、学者の間でも、いろいろの意見があると思われる。しかし、私は、この際、デカルトを、どのような視点からとらえ、それをどのように現実と結びつけるかということを除外した指導は、高校の現場の指導においては、まだ困ると思う。

とするならば、「デカルトを、なぜ、近代の、しかも、もつとも西洋的な典型として考えるのか? そして、どの点で、現代と、かかわりあいをもっているのか」という問題意識をもたねばなるまいと考えたのである。

「なぜ、近代の哲学者といえるのか」ということに関しては、「方法序説」第1部にみられる、〈書物による学問〉としてのスコラ哲学批判をへて、〈世間という大きな書物〉の発見という点に一つの帰結があるととも、第2部にみられる、徹底した自己変革にあるといえるであろう。

また「もつとも西洋の典型として考えられるのか」ということに関していうならば、徹底した合理的思想、身体と精神、存在と心、自然と人間という二元論的な立場にたつて、対象を理性的に、論理的に分析したことにあるといえるだろう。それは妥協をしらない「われ」の追求にあつたといえる。

こうした「われ」とは、もはや、ギリシアのポリス的人間像でもなく、また、中世の神とともにある人の姿でもない。デカルト流に言えば「単純に人間である人間」の発見にあつたともいえるのではなかるうか。

さらに、最後の問題、すなわち「どの点で、現代とのかかわりあいをもつ

ているのか」という問題に関しては、さききのべた「世間という大きな書物」の発見や、自己変革における主体性の発見とでもいえるものなのであろう。まさしく、これこそ近代フランス文学の真髄に流れ、現代実存主義を形成する動因ともなつたものといえるのである。さらに、第3部の暫定的道德の第1格率の「穩健な意見」と、変化してやまない情報化社会での適応方法、第3格率の「足ることを知れ」という克己主義は、大消費社会の中で、何に重点をおいて消費するかということを強いられている現代人の生活感覚と大きくかわりをもつているといえるのである。

〈指導内容の具体的展開と設問〉 …教科書を考えながら…

批判的懐疑主義 道義を論じた古代異故人の書物を、砂の上か泥の上に立っているだけの宏荘で華麗きわまる宮殿と比べてみた。かれらは徳なるものをおそろしく高くひきあげ、この世にあるいかなるものにもまして、尊重せらるべきものとして見せるのである。が徳を会得する道を十分には教えてくれなかつた。……私どもの神学に私は深い尊敬の念をもつていた。そして天国に到ることができるならと、だれしも同様に願つていた。けれども、そこへ導く啓示的真理は私どもの理解を越えたものであることがいずれも確かなものと知つた。……そして私自身のうちにか、あるいは世間という大きな書物のうちに見いだされるであろう学問のほかは、どのような学問にするもはや求めまいと決心し、……私は残りの青春時代を用いたのである。……学者たちが書齋であやつる推論においてよりは、一つの判断をあやまればすぐにも処罰されねばならぬ結果をきたすような、者のれにとつて重大なことのために各人がこころみる推論においてこそ、はるかに多くの真理に出会うことができようと思つたのである。

註 ストア主義者の書物をさす。

デカルトは、「方法序説」という書物のある箇所^①で上のようにいつています。ここで、彼は、ヨーロッパ中でも屈指の学校で学んだ学問は、実は真理とはいえないのではないかと疑うようになり、外国語、歴史、詩、数学、

道徳、神学、哲学など、あらゆる方面に懐疑の目を向けるようになったので
す。この文は、その中で、道徳と神学について論じている所ですが、私た
ちも、デカルトとともに、次のような点か考えてゆきたいと思います。

◆設問◆ 1. ①の部分を読んで、道徳とは本来どのようなものでなくて
はならないかを考えてみましょう。

2. ②の神学はいつ頃におこつた、なんという神学なのでしょうか。また
その頃の時代の思想的状況を復習してみましょう。

3. 宗教とは③にあるようなものであるとしたなら、このような精神を示
す、聖書の中のことばを、想いおこしてみましょう。

4. 宗教は、知識とはちがうという④の文を皆で討論してみてもどうで
しょうか。

5. このように、諸学問に疑いの目を向けた、デカルトは、結局⑤のよ
うな結論に達したのです。これを現代流にいうと、どういえるでしようか。ま
た、このような、考え方を基礎においた現代の思想は何でしようか。

われの存在 ① 日常の道徳についていえば、きわめて不確実なものとわかつ
ている意見にも、人はあたかも、それがまったく疑うべからざるものである
かのように、それを疑うことが時としては必要であることを私は久しい以前
から認め、そのことはすでに述べておいた。けれども、今この場合としては
私はひたすら真理の探究に没頭したいと願うのであるから、② まったく反対の
態度を取らねばならぬであろう。いささかでも疑わしいところがあると思わ
れそうなものは、すべて絶対的に虚偽なものとしてこれを斥けてゆき、かく
て結局において疑うべからざるものが私の確信のうちには残らぬであろうか。

これを見とどけならねばと私は考えた。……私の心のうちにはいつてきた
一切のものは夢に見る幻影とひとしく真ではないと仮定しようとした。
けれどもそう決心するや否や、③ 私がそんなふうに一切を虚偽であると考えよ
うと欲するかぎり、そう考えている「私」は必然的に何ものかであらねばなら
ぬことに気づいた。そうして、「私は考える、それ故に私は有る」という
この真理がきわめて堅固であり、きわめて確実である。……このことからし

て、私というのは一つの实体であつて、この实体の本質または本性とは、考
えるということだけである。④

㊦ 序説の3部に、デカルトは、生活上の指針として3つの道徳上の基準を示している。第1は宗教を守つて、穩見な意見に従ふこと。第2は行動においては断呼たる態度をとること。第3には、欲望を抑えて、足ることを知れということであつた。そして、この結論として、最善の努力をして、ひたすら真理の探究のため、生涯を使い果そうと決意するのであつた。

《設問》 1 どうして、行動の面では不確實なものでも、確實なものであるようにふるまわなければならない時があるのでしょうか。

2 デカルトは、序説の2部で、学問研究の規律を4つ示しました。それがどのようなものか、しらべてみましょう。

3 問3の「私」は必然的に何ものかであらねばならぬ、とはどんなことをいうのでしょうか。

4 人間を、自己という面からとらえて、その本質を、思考することと定義するデカルトの立場を、他の代表的な思想と較べてみましょう。

さて、以上のように、デカルトの思想を考えてみますと、ギリシアや、中世キリスト教にはみられないような点に気づくと思います。それは、私たちの周囲にある、あらゆるものを、本当にそうなのだろうかと疑つてかかる懐疑精神にあると思われまゝ。私たちが、疑問を感じるのは、そのことを本当に知ろうとする、知的・理性的関心からです。デカルトは、それを徹底して、疑わしくないのは、疑つているのは自分自身だけだということから、自己の存在、人間の主体性といったものを追求した人であつたわけです。外的な権威をしりぞけ、自己にめざめることは、青年期の特徴でもありますが、同時に、歴史的にみまると、近代という時代の特色でもあります。そして、そのことがまた現代の思想、とりわけ、実存主義に大きく影響を与えたといえます。また、徹底して、理性を追求する態度は、わたしたち東洋人からみると、大きなへだたりに感じないわけにはいかないのでしょうか。その意味で、デカルトの哲学はまさしく、西洋的の典型ともいえるものなのです。

6. 実存主義 —先哲の著作および言行を中心に—
(キルケゴール)

都立忍岡高等学校 渡 辺 浩

〈重点的ねらい〉 現代人として、どのような考え方と生き方を求めたらよいか。現代思想とは、現代人に課せられた特別の課題を解決しようとする生き方をさすものであろう。19世紀の前半、西欧を支配したヘーゲルの思想は、その後半、二つの方向においてきびしく批判された。それは、人間の外から「社会革命」をめざすマルクスの主張（唯物弁証法）と、人間の内から魂を変革しようとするキルケゴールの立場（質的弁証法）とである。同時代を“疎外された精神状況”として摘発する点で、二人の眼には共通のものがある。この視点に現代思想の源流としてのスポットをあて、そこから“疎外された人間性の回復”という現代人の課題をさぐることにしよう。

キルケゴールは、人間存在の主体性に真理を求め、孤独・不安・絶望などの内面的な事実を問題とした。ひとはひとり（単独者）で生きなければならない。どんな悲しみも喜びもひとりで背負うのである。たとえ最愛の夫婦・親子でも、生死を代ってもらわねばいかなない。かけがえのない自己の真実のあり方を問うことが実存主義の立場だといわれる。

実存主義の考え方には、神を求めて信仰に生きる立場と、神の存在を認めない立場と、二つの流れがある。まず、実存主義の先駆者であり、神を求める立場の代表としてキルケゴールを取り上げ、いつばんに「実存」とはどういうことであり、「実存主義」とはどんな考え方であるかを理解させ、さらにさまざまな実存主義の思想家、ニーチエ、ハイデッガー、ヤスパーズ、サルトルらの立場を理解させることがねらいである。

〈指導内容の具体的展開〉

1. 実存思想の誕生 「ギーレライエの手記」

私に欠けているのは、私は何をなすべきか、ということについて私自身に決心がつかないでいることなのだ。それは私が何を認識すべきかということ

ではない。だいじなことは私が自分の使命を理解し、私が何をなすべきかの神の意志を知ることである。私にとって真理であるような真理を発見し、私がそのために生き、そして死にたいと思うようなイデーを発見することが必要なのだ。いわゆる客観的真理などをさがし出してみたところで、それが私に何の役に立つだろう。哲学者たちのうちたてた諸体系をあれこれと研究し、それぞれの体系内に見られる不整合な点を指摘しえたところで、個々の多くの現象を解明しえたところで、それが私自身と私の生活にとってそれ以上の深い意味をもたないとしたら、それが私に何の役に立つのだろう。

……私に欠けていたのは、完全に人間らしい生活を送ることだった。単に認識の生活を送ることではなかったのだ。かくしてのみ、私は私の思想の展開を私自身のものでないもののうえに基礎づけることなく、私の実存の最も深い根源とつながるもの、それによって私が神的なもののなかにいわば根をおろして、たとえ全世界が崩れ落ちようともそれに絡み^{から}ついていて離れることのないようなもののうえに基礎づけることができるのだ。私に欠けているものはまさしくこれなのだ。だから私はそれを求めて努力しよう。

——人は他のなにものを知るより先に自己みずからを知ることを学ばなくてはならぬ。こうしてまず内面的に自己みずからを理解し、そのうえで自己の歩みとそのたどりゆく道を知ったとき、そこではじめて人間の生活は安息と意義を得るのである。このように自己みずからを理解したときのみ、人間は自己の独立な実存を主張することができ、自己自身の「私」を放棄しない^②でいられるのだ。(キルケゴール、1835年8月1日の日記)

2. 実存的決断 —— 「あれか、これか」

1837年、24才の時、キルケゴールはレギーネ・オルセンという美しく愛らしい少女にめぐりあい、三年後に婚約した。ところがそれから一年あまりでかれは自分の方から婚約を破棄した。キルケゴールのこの行動は両家の人々を憤激させ、レギーネを深く悲しませた。なぜかれは婚約を破棄しなければならなかったのであろうか。かれの心の秘密は複雑微妙であり、局外者の推察しがたいものであるが、かれの破約が世の常の破約のようなもので

なかったことはたしかであろう。かれの行動はおそらくかれがレギーネを深く愛するが故の悲痛な行動であったのであろう。

当時のかれは、神を信じようとしてなお信じられない状態であり、心は罪の意識と不安の暗雲にとざされ、憂愁の病のいやされるあてではなかった。信仰なき愛は真の愛ではなく、真の愛なき結婚は偽^{ぎまん}瞞である。かれは苦しみに苦しんだあげくついに、真にレギーネを愛し、真にレギーネを尊敬しているなら、そのあかしとして③レギーネと結ばれてはならないと決心し、「巨人のごとく」たちあがって恋人を突きはなした。それは「あれか、これか」の二者択一に煩悶を重ねたあげくの、いわば「実存的決断」であった。（山崎・成川共著、あなたの哲学）

3. 絶望は「死にいたる病」である。

人間とは精神である。しかし、精神とは何であるか？ 精神とは自己である。しかし、自己とは何であるか？ 自己とはひとつの関係である。関係そのものではなくて、その関係がそれ自身に関係するということである。

絶望という病にかかりうる可能性は、人間が動物よりもすぐれている点である。人間は動物よりまさっているからこそ、いいかえれば人間は自己であり、精神であるからこそ、絶望することができるのである。この病の可能性は動物に対する人間の長所であり、この病に気づいていることが自然のままの人間よりもキリスト者のすぐれている点である。この病からいやされていることがキリスト者の幸福なのである。

④ 絶望は死にいたる病である。自己のうちなるこの病は、永遠に死ぬことであり、死にながらしかもしないということである。なんとという苦しい矛盾であろうか。いつたい、死とはそれが過ぎ去ったということである。ところが死を死ぬというのは、死を体験することである。これがほんの一瞬間でも体験されるものなら、それは死を永遠に体験することである。人間が病気で死ぬように絶望で死ぬものならば、人間のうちにある永遠なもの、すなわち自己は、肉体が病気で死ぬのと同じ意味で、死ぬことができるはずである。だがそれは不可能である。絶望の死はつねに生へ移りかわる。絶望者は死ぬ

ことができない。「剣が思想を殺すことができないように」絶望もまた、その絶望の根底にある永遠なもの、自己を、食いつくすことはできない。

(キルケゴール、死にいたる病)

〈設問とそのねらい〉

設問1. 全文を読んで、下線①「私にとって真理であるような真理」とはどんな意味をもつものと考えられるか。

(ねらい) キルケゴールは1835年の夏、シエラン島北端“ギーレイエ”への旅をした。この岬の先端には、かれの決定的な思索を記念し、「真理とはイデーのために生きること以外の何であろう」と刻まれた石碑がある。22才のかれが体験した“心の変革(実存の核心)”を感じとらせたい。

設問2. 下線②の部分で、自己自身の「私」とはどんなことか。また「自己の独立な実存を主張する」ことは、現代人にとってどんな意味をもつか。

(ねらい) “自己を放棄する(自己喪失)”が現代の精神状況にどのように現われているかを考え、青年キルケゴールはこの問題といかに取りくんだかだかを調べよう。

設問3. 下線③「真に愛するがゆえに結婚してはならない」というのはなぜであろうか。また婚約破棄が「実存的決断」とされるわけはなぜか。

(ねらい) 恋愛の喜びと破約の悲運を通して深められたキルケゴールの実存体験について、その深い境地を考え、主体的真理の問題に触れる。

設問4. 全文を読み、絶望とはどんなことかを考えよ。

(ねらい) 絶望とは人間が神から離れ、神を見失った状態、つまり人間疎外の状況をいう。この恐ろしい病を治療することが現代の課題となる。

〈発展的まとめ〉

実存主義の思想は、その人の体験と深くつながっている。キルケゴールにとって、かれの父と恋人、かれの生活と事件を切り離すことはできない。かれの日記や主著はみな、かれの体験を綴ったものといえる。一世紀前のかれの時代批判は、新鮮な今日の課題を示し、不安・絶望から自己回復の道をたどるべく、現代人への貴重な踏み台とも見られるであろう。

7. 仮説と調和の真理観 —先哲の著作・言行中心—

—ジュームズ・デューイ—

東京都立四谷商業高等学校 永上 肆朗

〈重点的ねらい〉「米国では戦後一貫して物質万能主義ないし实用主義（プラグマティズム）に対する反省と不信の動きが強まってきており、日本でも「昭和元祿」と呼ばれる環境の中で物質中心の価値観への疑問と新しい文明への模索が始まっている。これは戦後二回目の意識革命の幕あけといえる。」（日本リサーチセンター分析45：12・22）確かに、プラグマティズムが今世紀のアメリカの思潮を支配し、よりアメリカ的な世界観として現代文明をリードしてきたし、従って今日の文明がプラグマティズムの限界と終焉を意味するとされており、アメリカ体制護持のイデオログとしての元凶と捉えられる事実を否定することはできない。プラグマティズムはマルキシズム・実存主義など今日的哲学の狭撃にあって魅力が減ってきたようである。しかしプラグマティズムとその幅広い成立過程、その多元的で豊かな考え：その柔軟な対応の姿勢として改めて問い直すとき、人間一教々の弱点と野心をもち才能に満ち溢れる生物としての一を再び世界をパースペクティブなものとしてブラクティカルに再構成していく可能的存在者たらしめていくものとして捉え直していくことは留意されていくであろう。従来プラグマティズムは伝統的普遍哲学の概念を否定し、人間を何よりも経験の地平に引きもどすところに成立した世界観であり、そこから皮相な功利主義原理のエゴイズムとして受けとられがちであるが他面においてそれ自身にさまざまな人間の主体的、社会的諸契機を内在しているのである。ここではジュームズとデューイの考えを中心としながらプラグマティズムの特色を明らかにし、特に行為を通じて宗教・道徳・環境を広くとらえながら調和・適応を導き出していることとするプラグマティズムにみられる精神を今日にマッチさせて追求努力したい。

〈指導内容の具体的展開〉 パースは観念を明確にするには行動を通じて事物が確かめられねばならないとした。すなわち行為は無上命法のように抽象

的なものでなく、条件命題に変えられるものでなければならず、この実験的行動が合理的実際的なアメリカ人氣質によく反映している。パースのこの規則をジェームズは次のように要約している。

「およそ一つの思想の意義を明らかにするにはその思想がいかなる行為を生み出すに通しているかを決定しさえすればよい。①その行為こそわれわれにとってはその思想の唯一の意義である。すべてわれわれの思想の差異なるものは、たとえどれほど微妙なものであっても根柢においては実際上の違いとなつてあらわれぬほど微妙なものは一つもないということは確かな事実である。」(J. プラグマティズム)

「プラグマティズムは例えばつねに特殊に訴える点では名目論②に一致し、実際的見地を強調する点で功利主義③に、形而上学的抽象を軽蔑する点で実証主義④と一致する。」(J. プラグマティズム)

パースはプラグマティズムを科学主義的実証主義的な行動主義として特色づけたが、ジェームズは実証の立場を広く考えた。すなわち彼は観念は、それによって経験がうまく導かれていくかどうかを広く問題にしたが、このことは観念の有用性に個人的主観的なあいまいさをもたらすことになったが、却つて人生の諸相に多面的な目を向けさせることになった。

「プラグマティズム的原理に立つと神の仮設はそれがその語のもっとも広い意味で満足に働かなくなれば真である。⑤神の仮設に伴うさまざまな困難はなお未解決であるが、この仮設がたしかに働いているということそしてその問題は他のすべての働いている真理と満足に結びつくようにこの仮設を作り上げ規定していくにある、ということは経験⑥がこれを示している。」(同上)

1 「わたしたちの経験の世界⑥は、客観的な部分と主観的な部分とからなり立っていて客観的な部分の方が主観的な部分よりも量り知れないほど広大ではあるが、しかし主観的な部分もけつして無視することはできない。客観的な部分はいっさいの事物の総計であり、主観的な部分は内的状態⑦である(中略)。内的な状態はわたしたちの存在そのものである。内的状態の実在性とわたしたちの経験の実在性とはひとつである。(中略)もしこれが真であ

るなら、経験の自己中心的要素は削除されるべきであると科学がいうのは、不条理である。実在の軸は自己中心的な場所⑦しか通過しない。(中略)わたしたち個人の運命につながる特殊な問題がどう答えられようともそのような問題こそ本当の問題であると認めて問題が開発する思想領域のなかで生きることによってのみわたしたちは深い人間になるのだとわたしは考える。ところがこのような生き方をすることが宗教的であることなのである。(中略)個性は感情にもとづいている。そして感情の奥底⑧すなわち性格のより暗く盲目的な層⑧こそわたしたちが真の事実の生成過程をとらえ、事象がどのようにして起るか、業が現実的にどうしてなされるかを直接に知覚する世界における唯一の場所なのである。」(J・宗教的経験の諸相第20講)

デューイによればプラグマティズムは基本的には「適応(アダプティション)」という行為である。人間が有機体と自然環境との間の相互作用による営みのみならず、人間のあらゆる活動や経験による。これから人間の知的活動である学問的認識はけっして認識のための認識としてはたらくものでなく、広く適応行為の一環としてとらえられたのである。

「子供は熱いものに出会い、痛みを感ずる。能動と受動とが手を伸ばすこと、火傷が結びつく。一方が他方を暗示し、意味する。この場合は生きた意味での経験⑧がある。」(D・哲学の改造)

2.「経験の過程そのもののうちに能動的計画的思惟の位置を認めると、個別と普遍・感覚と理性・知覚的と概念的という専門的問題の伝統的地位が大きく変わってくる。なぜなら理性とは実験的知性⑨であり、科学を手本として考えられ、社会生活の技術を作るのに使われるものであるから。(中略)それはより良い未来を描き、人間がそれを実現するのを助ける。そしてこの活動は経験によってテストされる。それらは実践のうちで作られる仮設⑨であって私たちの現在の経験に必要な手引きを与え得るか否かによって拒否され、修正され、拡張されるものである。それは行動のプログラムと呼んでよいが元来私たちの未来の行為を盲目的でないものにする柔軟なものである。知性は、一度で手に入れられるものではない。知性⑨は不断の形成の形成過程に

あるもので、これを保持するには絶えず油断なしに結果を観察する態度、素直な学習意欲・再適応の勇気が必要である。」(同上)

「道徳というのは、行為のカタログでもなければ薬局の処方箋や科学の本が教える方法のように使える一組の規則でもない。道徳の必要とは、研究および工夫の特定の方法の必要^⑩ということにほかならない。つまり、困難や弊害の所在を明らかにする探究の方法・また・それら进行处理する場合に有効な仮設として用いられる諸計画を案内する方法のためである。」(同上)

プラグマティズムは自己の立場を世界の完成はそれを必然的とみなすオプティミズムや不可能とみるペンシズムにおいてではなく、蓋然的であるとみる改善主義(メリオリズム)の立場の中に見出しているが、この限り人間の無限の向上発展を確立しようとする開かれた世界観であるといえよう。

〈設問とそのねらい〉

設問1 長文の引用例1および2について50~100字以内で要旨をまとめよ。
(ねらい) 引用は長いかもしれないが、前後の流れを汲みとる必要がある。言葉で表現するあいまいさをさけて難解な文から著者の強調せんとするところを文章表現させることは、理解を確実ならしめる上で重要である。

設問2 ①思想が行為によって確かめられるとは具体的にどういふことか。
その関係をさまざまな例から検討せよ。

設問3 ②③④の語句を思想史の観点から説明し、関連用語(対概念)を比較せよ。

(ねらい) 設問2, 3は主としてプラグマティズムの特色、位置づけを原理的に理解させようとするものである。

設問4 ⑤真理を経験の世界に見出しているこうとするときの問題点を指摘せよ

設問5 ⑥および⑥⑦という経験の意味を考え、現実と理想・普遍化への志向という立場から「人生における経験の意義」について考えなさい。

設問6 ⑦⑦および⑧⑧で強調されている人間の深奥の世界について多くの例を調べて(体験・引例)人生の経験の豊かさを考えよう。又この全文をよんでジュームズの根本的立場を4~6字の語句でまとめてみよ。

(ねらい) 設問 4. 5. 6 によってプラグマティズムが課題とした宗教と科学の調和の問題や多元的な諸経験にみられる実存的宗教的契機について考えさせ「人生における宗教の意味」や「純粹経験」などについてもふれる。

設問 7 いわゆる「道具主義」の立場からこの全文をよくよんで⑨および⑩⑨にいう「知性」「仮設」が哲学の方法や人間の行動様式としてどのように意義があるだろうか。又デューイが「探究の構造」をどのように考えているかを調べ・行為における目的と手段の関係を論じなさい。

設問 8 ⑩プラグマティズムでは善や道徳の問題がどのようにとらえられているか、これについて批判せよ。

VVV

(ねらい) 設問 7. 8 ではデューイの立場を主としてプラグマティズムの積極的で自由な探究と適応の姿勢をとり上げ日常生活を通して吟味させる

設問 9 最後に「プラグマティズムの現代的意義」を項目的に列挙してみよ。

〈発展的まとめ〉 プラグマティズムは経験の問題を一元的思惟や認識の世界との対決の過程を通じて深く論究している。そして経験の世界にひそむ人間の深奥な世界を見出した。生徒にはこの点にポイントをおきたい。この点で「哲学的なものの考え方」での取扱いが妥当ではなかろうか。しかし宗教的契機ということからみれば「宗教と人生」でとり上げるのも面白いかと思う。次にデューイの社会環境への対応の原理は個人か集団か、改善か変革かということをめぐるアルクス主義とのかゝりももってくるので「個人と国家」または「科学的なものの考え方」で取扱うこともできる。プラグマティズムの「有用性・実用性」を一面的に扱うことは変り身の早い高校生は興味を示さないであろう。しかし「経験と感性」という語句を媒介にしてなるべく多面的にもっていくことがのぞましい。プラグマティズムはそのように多くのヒントを提供してくれる現実的な世界観であり又何上りもグローバルなものである。他分野との関連から見れば、経験と宗教というつながりから「日本の思想」における東洋的な「自然と人生」の情緒的なつながりを導き出しこれを手がかりに 哲学と関連づけてバイブ的役割を試みることも可能である。更に知性の役割を「現代と人間」で取り上げることが有効であろう。

第4分科会〈日本の思想〉

1. 古代日本人のこころ—ものの考え方の基本的問題中心—

都立羽田工業高等学校 吉沢正晶

〈重点的ねらい〉 日本の思想史の上で、古代日本人の思想を文献に即して解明しようとした例には、国学があり、なかでも本居宣長の業績があるが、ここでは必ずしもそれらによらず、記紀の成立事情は概ね説明した上で、むしろ素直に直接、古事記に^{まごころ}対面させ、そこに古代人のこころを探らせるようにしたい。人間はだれしも幸福を求める。その素朴な形態として、古代日本人の幸福観がどんなものか、について考察させるようにし、また古代日本人は人間の^{まごころ}真心をどのようにとらえていたか、そして彼らの現世観と神々との結びつきはどんなものか、を古事記の中から読みとるようにさせて、自然と人生、善と実践、美と崇高、存在と生成、日本の神々の性格など、ものの考え方の基本的問題について考えさせ、日本の伝統思想の性格について理解を深めるように指導する。

〈指導内容の具体的展開〉 古事記の素材となったものは、諸家に伝わっていた天皇の歴史と、神話、伝説、昔話、物語の類とであり、それらがいりまじった形となって今日に残されている。それらはもちろん科学的な記録ではない、が、古代日本人のこころが表現されており、その考え方の基本が素朴な形で示されている所がある。

1. 天地のはじめ 「昔、この世界の一番始めの時に、天に出現された神は、その名をアメノミナカヌシの神という。次にタカミムスビの神、次にカムムスビの神で、この三方の神は、みな^{かた}独りで出現され、やがて形を隠しなされた。」という一節と、これに続く節に、この世界はどのようにできているか、ということについて、神名の意味と、その順次の出現に、空間と時間的な生成の意味の表現が展開されている。特に上記の三神は、抽象的概念で、天地

の間に溶け合って形は見えない生成力を意味している。日本神話では事物の存在を「生む」^②ことで説明しているのである。「それからイザナギの神とイザナミの女神とが現われ出た」といい、やがてこの二方の神は結婚することが語られる。

2. **国土の生成・万物の起原** ^{みこと}そこで天の神々の命により、イザナギの命・イザナミの命の二方が、この漂っている国を整えて作り固める、ということで、次々と島々を生み出されたという形で国土の起原が語られるのである。このような表わし方でまた、河・海など水の神、風、木、山、野、そして火の神の生成が語られ、この火の生成のあとに災禍が起り、また火を鎮めるといふ考え方が表現されている。

古代人はやはり自分たちがこの世に生きていることの意味をどう了解するか、現実の生をどう生きるか、の問題をもちはじめた。彼らの生活と生産をより豊かにしようと願った。そして、このような願望を投影して、神々の行為、とりわけ生成に関する神々の行為を想像した。ムスビの神の働き、イザナギ・イザナミの二神の国生み、そして生成力の根源としての太陽を天照らす大神とし、また稲の収穫という形象も他の神々によって表わし、そこには生の持続を強く願う古代人の心情が表わされている。そして生の果てには死があり、よいことのあとには悪いことがあるのが現世だとすれば、死にまさる生の充実と、凶悪に勝つ吉善の創造とが考えられた。

3. 「みそぎ」の意味 ^④みそぎ(身禊)とは、古代人のどのような心情の現われであろうか。古代人にとって、生成力の根拠は自然の世界にあると考えられた。それが人間にも及ぶようにと願った。また逆に、災禍や、厭な穢いことは、これを払い落そうと考えた。火の神を生んだために亡くなったイザナミの神を追って黄泉の国(くらい世界)に行き、そこから逃げ帰ったイザナギの神が黄泉の穢れを払うといつて、身につけていたものをつぎつぎに投げ棄て、川の瀬に下りて身を洗うという行為の間に神々の生成があり、やがて三貴神(天照らす大神・月読の命・スサノヲの命)を生む。

4. 吉凶・善悪・明暗・清濁・正邪の感覚 ^④みそぎの考え方から転じて、や

がて人間の真心まごころが問われる。そこに心を清める行事として、誓約うけいが立てられる。スサノヲの命みことは天照らす大神に申しあげてから母イザナミの神のいます黄泉よみの国に行こうと、天に上る。そのときの暴風のありさまに、天照らす大神はスサノヲの命みことが来るわけは善い心ではあるまいと思われたが、やってきたスサノヲの命が申すには、「わたくしは穢きたない心はありません、変った心は持もっておりません」というので、天照らす大神は、「それならあなたの心の正しいことはどうしたらわかるでしょう」といわれたので、スサノヲの命は、「誓約を立てて子を生ましましょう」と申された。ここに問題にされるのは「清明心」の道徳である。

5. 清明心^⑤ 神話では、人間の心情の純粹さを求め、それにもとづく人間関係の融和を理想とした。清らかさは清流の透明つうめいさに、明るさは闇と反対の太陽の明るさに感覚的に形容して、人としての心のもちかたを把握した。他人から見ても透明でなく、当人においても暗くよごれた心境を、クラキ心、キタナキ心として把握し、これと反対に、「わたくし」を心にもたず、うしろぐらさも感じず、他人と融和して人に何らの危険も感じさせず、自分も不安のない、朗らかな、透きとおった心境に往するとき、これを古代人は、キヨキ心、アカキ心としてとらえたのである。神話では、人間を汚濁にするのも清明にするのも、この大自然である。「清明心」の道徳的概念化の前に、古代人には自然に接したときの「美しい」という感覚と、それを基底にもつ美意識がある。古代人にとっては自然が先で、倫理はそれと重なりながら後に出てくる。つまり「美しい」と「善い」とは離れず一つに重なっているものであり、倫理は生命から遊離していないのである。

〈設問とそのねらい〉

設問1. 下線①この世界のなりたちを、古代人はどのようにとらえているか、神名の意味もしらべて、まとめてみよ。

(ねらい) 神話のもつ意味を理解することにより、古代人の世界のとらえ方を考察させる。

設問2. 下線②古代人が事物の存在の根底に感じとったものは何か。「古事

記」の鳥々の生成、神々の生成の箇所を読み考察せよ。

(ねらい) 神話の具象的表現から哲学的なものの考え方の基本的問題、たとえば存在の意味についての理解を含めて指導する。

設問3. 下線③古代日本人は自然をどのようにみていたか。「古事記」の神々の生成のところを読んで、自然と人生という観点から考察できることを述べよ。その際に他の民族の神話ともくらべてみよ。

(ねらい) 自然と人生というようなものの考え方の基本的問題についての理解を含めて指導する。

設問4. 下線④善・悪とは、古代日本人においてはどう理解されているか、「古事記」の中でできるだけ指摘して、説明せよ。

(ねらい) 自然と人生、倫理的価値などのものの考え方の基本問題についての理解を含めて指導する。

設問5. 下線⑤清明心について、「古事記」の誓約の条くだりを読み、また前項の5.をよく読んで、古代日本人の倫理観の特徴をまとめよ。

(ねらい) 徳目的なものが立てられる以前の、人間の自然の性情に根ざした倫理観につき古代人の例を感得させるように指導する。

〈発展的まとめ〉世界中どこの民族も神話をもつのであり、ここは日本の神話を読み、人間の心情や思想の原初的なものにもふれるテーマである。また他の民族の神話とも比較することによって、人間性の共通な点を発見することもこのテーマの学習の一つの帰結であろう。また、芸術と人生、人生における宗教の意味などについての理解へと発展し得るテーマである。

2. 「和を以て貴しと為す」 - 先哲の基本的考え方中心 -
- 聖徳太子の和の思想とはなにか -

都立葛飾商業高校 浅香育弘

〈重点的ねらい〉 仏教や儒教に対して、日本人としてはじめて深い理解を示したのは聖徳太子であろう。そこで太子が制定したと伝えられる冠位十二階や、十七条憲法を通して、太子が仏教や儒教についてどう理解し、何を求めたのかを生徒たちに考えさせたい。特に太子が十七条憲法の中で「以和為貴」と強調した和の思想とはどのようなものであり、和を実現するにはどうしたらよいと考えたかを憲法を中心に検討し、あわせて太子が仏教的人生観において何を求めたか、仏教の日本的展開の上でどのような地位を占めるかを考えさせたい。

また冠位十二階の制定において、太子がなぜ冠位の名称に儒教の徳目を選び、またあのような順序にしたのかを検討して、太子の政治改革のねらい、および儒教的人生観において何を重んじ、何を求めたか考えさせたい。

太子の考えは古代天皇制の確立を期図したものであるから、民主主義国家をつくりあげようとしている現代の吾々には、通用しない教えであるとうけとる人もいるかもしれない。しかし太子の和の強調は妥協や服従を強いるのではなく、人間関係における親密・協力・平和を達成し、ひいては人間としての向上・完成をはかるにはどうしたらよいかの道を示唆してくれていると受けとれば、吾々はそこから多くのことを学ぶうるのではなからうか。

〈指導内容の具体的展開〉 聖徳太子は推古天皇の摂政として20才から49才で歿するまで30年間、転換期の政治情勢の中で政治の改革に当った。日本書紀によると推古天皇の10年に冠位十二階を制定し、12年に十七条憲法を制定し、15年に中国との国交樹立をはかったとある。太子が冠位を制定した意図は氏姓制度の弊害を打破し、人材登用の途を拓き、政治秩序をととのえて国際的な地位を高めることにあったといわれる。しかし冠位の名称に儒教の徳目を配したのは、新制の官吏に人間的自覚・反省を促がし、それ

その冠位にふさわしい人格の向上を願うという目的もあったのではあるまいか。当時豪族・官吏の中には不法を行なう者が多かったので、太子は官吏に対し儒教的教化を通して、政治の改革や諸政策の公正な運営を期待したのであろう。

では太子が冠位の名称に儒教の徳目を選び、徳・仁・礼・信・義・智の順序にしたのはなぜだろうか。それは論語の思想を深く洞察してえた見識による^①といえないだろうか。特に徳仁を礼信義智の上位においたのは、孔子教学の大綱ともいふべき「道に志し、徳に拠り、仁に依り、芸に由る」(論語・述而篇)を深く理解した上での配慮といえないだろうか。孔子は徳(人間完成)に基づいてこそ仁(人間関係における傾合いの愛情・道徳)も芸(六芸-礼儀・芸術・技術・科学等)も正しく発揮されるとした。また政治思想としては、「政を為すに徳を以てす」(為政篇)とあるように、徳のある者が上に立つて政治を行なえば、国は必ずうまく治まると考えた。太子が十七条憲法で「賢哲官に任ずれば頌音則ち起る」(7条)とか、「それ賢聖を得ずんば何を以てか国を治めん」(14条)と強調したことと考えあわせ、太子の政治思想はどのようなものか、人生において何を重んじたか考えさせられる。太子の和の思想は礼より徳仁と深くつながるのではなからうか。

次に十七条憲法であるが、これは官吏の服務規定であり、その人間的自覚向上を図り、和合の実をあげることによって国家体制をととのえ、人民の福祉増進を期図したといえよう。従って古代律法の多くがそうであるように、多分に道徳的・訓戒的である。しかし国家の根本法的な性格も備えているといえよう。有力豪族の土地兼併争いをめぐる社会混乱や、大国隋をめぐる東アジアの国際情勢の緊迫化の中で、中央集権的な国家体制の樹立をはかり、文化国家としての文教充実をはかり、人民の苦しみを救済するため裁判や賦役(徴税)のあり方を示しているからである。(3・2・4・5・16条等)

しかし思想的にみた場合、十七条憲法の眼目は第1条の「和を以て貴しと為す」と和を強調したことにあり、第2条以下は和を実現するための方途をといっているといえるのではなからうか。では太子の和の思想とはどのような

ものであろうか。②それは集団における人間関係において争いなく協調し合い、和国を建設しようとする意味もあろう。しかし一個の人間として調和ある人格をつくり、人間としての完成をめざす意味もあるのではなからうか。第1条の「人皆党有り。また達れる者少し」の党の字がこの場合集団・党派の意味より、鮮かならずつまり暗黒不明で、偏見をもつ者の意味にとれるからである。従って和を達成するためには、人間関係において協力、親密・平和をはかっていくことも大事だが、更にそのために各自自己の無知・偏見に気づき、反省していくことが必要であると示唆し、強調したのが第1条ではあるまいか。そして党を去り達者たるために、太子は第2条で「篤く三宝を敬へ」とすゝめたのではなからうか。篤敬三宝とは^{vvv}純一無雑な心で仏法僧の三宝を敬うことであるが、それは窮極的には釈迦仏陀に帰依することであるといえよう。そして釈迦仏陀を崇敬するのは、太子によればその信行が常にダンマ（真実）であり、万徳の正体たる仏陀であるから、つまり人間の真を示しているが故に帰依するということなのである。

太子は憲法で「共に是れ凡夫のみ。是非の理たれかよく定むべき」（10条）とのべ、人間は皆無知で執着・偏見をもった存在であるとしながら、一方で「人はなはだ悪しき者鮮し、よく教ふれば之に従ふ」（2条）「世に生知少し。尅く念ひて聖と作る」（7条）ことも可能だとした。このような太子の人間観は晩年のことば「世間虚仮・唯仏是真」にもよくあらわれている。そして凡夫たる人間が仏となる因としての一乗道について、一たび南無と称することも善であり、このような万善が一因となり仏果につながるとした。

しかし法華義疏で「万善同帰」とか「万全ハ皆是レ一因」とのべているのは、万善の道徳的行為も一因たる宗教的自覚・体験に基ずくという意味にもとれ、第1条の和と第2条以下の諸道徳との関係について別の示唆を与えてくれる。さきに和を実現するために、第2条以下が要請されるとしたが、^ま枉がれるを直し、^ま蝨を絶ち欲を棄て、^ま忌を絶ち^ま辱を棄て、嫉妬あるなく、私に背き公に向うことが本当に可能になるためには、篤敬三宝による和の体験が根底に要請されるという関係になるからである。

〈設問とそのねらい〉

設問1 「聖徳太子が冠位を制定し、その名称に儒教の徳目を配したのはなぜだろうか」

(ねらい) それを通して太子の政治思想や、儒教的人生観、そして徳仁と和との関係について等考えさせたい。

設問2 「聖徳太子の和の思想とはどのようなものであろうか」

(ねらい) 協力的な人間関係(交友・家庭・職場・社会・国家・国際社会の和)をつくりあげ、また人間としての向上・完成をはかるにはどうしたらよいか、十七条憲法の全文を読んで考えさせ、求めさせたい。

設問3 「聖徳太子はなぜ篤敬三宝をすゝめたのだろうか」

(ねらい) 凡夫たる吾々が人間らしく生きるには、常住真実の釈迦仏陀に帰敬し、その言行を習う他ない。唯仏是真! 一度でも南無と称する気持をもつことが狂かれるを直す第1歩であり、万善も一因に基づくことを気付かせ、求めさせたい。また太子の人間観についても考えさせたい。

〈発展的まとめ〉 太子が冠位や憲法を制定したのは、結局官吏の人的自覚向上を期待したからであろう。それは儒教的方法(博文約礼)によると共に、更に根本的には仏道修行による他ないとさとるに至ったのではあるまいか。「菩薩ノ道ハ他ヲ正サント欲シテ先ヅ己ガ身ヲ正ス」(法華義疏・安樂行品)と指摘しているように、自分を含めた為政者・官吏の正己を心がけ、さとしたのが太子の憲法の精神の根本ではなからうか。そして憲法は直接的には官吏を対象としたが、勿論人間一般に通ずる教えだと思う。

中国では仏教が老荘思想と結びつき、山間で禪宗として栄えたのに対し、太子は政治家であって仏道修業に励み、日本における在家仏教の基を開いたといえよう。このことは太子が南無三宝をすゝめ、その後の祖師たちに敬慕・継承されたことと共に、仏教の日本的展開の上に大きな役割を果たしたといえよう。現代のように精神が荒廃し、己れの考えのみ正しいとする合理主義的な人間観がはびこり、利己的でバラバラな人間関係になりがちな社会情勢の中で、和を強調した太子の教えの意義は決して少なくないと思う。

3. 親鸞と他力 — 人物中心的扱い方中心 —

都立豊多摩高等学校 金井 肇

〈重点的ねらい〉 人間とはなにか。これはすべての思想の土台をなす問いである。この問いを前提としない思想は空虚なものとなる。

高校生の段階ではまだ、この問いの意味の重要さもじゅうぶんにはわかっていない。だから生徒は欲することだけで考え、行動する安易さをもつことが多い。「主体性」を主張する生徒は多いが、その主体性とは自己ののぞむことをそのまま実現していくことを意味する場合が多い。自己の欲求の実現を妨げるものは、それがどんなものであれ、主体性をおかすものと受けとられる。自己を主張し、「他力」ということばに反発する。その気力は青年にとってたいせつなものだと思うのだが、その実じぶんの持つ力をフルに発揮してはいない。かんたんに「自己の力の限界を知」って「運を天に任せ」たり、「なんとかなる」と考えて気をやすめる。

人間がほんとうに自己のもつ力をフルに発揮して生きるためには、人間の力でなすべきことと、人間の力ではどうにもならないことを区別していく必要がある。人間というものをみつめ、人間の有限性を知ることはその意味でもたいせつなことであるし、そこから深い思想が形成されるであろう。

親鸞は、道元が法中心の思想であるのに対し、機（人間）から出発するといわれる。「歎異抄」を中心に親鸞とともに人間存在を深くみつめ、人間の有限性について考え、真理に自己をゆだねるところからくる、力強い生きかたを、生徒に期待したい。「他力」ということの意味を中心に、以上のようなねらいをもって、指導したいのである。

〈指導内容の具体的展開〉 親鸞は、念仏こそ救いへの道であり、救われたことへの感謝の表現であるといっている。では、親鸞のいう念仏とはなんなのか。救いとはなんなのか。

1. 念仏 歎異抄第一条では、念仏を申す心が起こるとき、すでに弥陀の利益にあずかっているという。また、念仏は自分の力で、救いを求めて唱え

るものではなく、弥陀の慈悲^③によるのであり、だからこそ浄土に往生できるのだという。一方、念仏は父母の孝養のために申すものではなく、弥陀の本願をよくよく考えてみれば、自分ひとりのためのものだ、と述べている。念仏は、みずからの願いをこめて唱えるものではなく、口に出さなくても、念仏の心が起こるだけでもよいという。ではその意味は、浄土への救いとは、弥陀ははなんなのか。

2. 阿弥陀仏 歎異抄第18条には、阿弥陀仏の身量に經典でふれているのが、それは方便法身であって、阿弥陀仏とは大きさをもたないもの、色もかたちももたないもの、と述べられている。仏法そのものを、仮りに説いて大きさをもった阿弥陀仏としているのだというのである。

一方、阿弥陀は、サンスクリットの amita の音訳で、無量光、無量寿を意味する。宇宙の根本原理としてはかり知れない光でありいのちである。親鸞は、阿弥陀をこの意味でとらえていたことがうかがえる。だから、阿弥陀と人間との関係は、仏法に対する人間の関係として考えなくてはならない。では阿弥陀の国土としての浄土とはなんであるのか。

3. 浄土、浄土の思想は、1世紀から2世紀ころ、西北インドで成立したといわれる。悟りを求めて修業し努力しても、人間のもつ弱さのために、悟りに到達することができないのがふつうの人間であろう。その人々を救うために考えられたのが浄土の思想であった。

浄土とは、悟りの世界の、世俗的な汚れの全くない清らかさを表現したものとされる。親鸞のいう、浄土も、阿弥陀のとらえかたが上のようなものであることと関連して、いま述べたような心の問題としてとらえられていたとわかるであろう。

4. 絶対他力^① ところでわれわれは、人生の苦悩をのり越えたさとり境地に、仏教の教える修業をなしとげて、到達することができるかどうか。人間とは、何でも自分の望みのままに行なっていくことができるものでしょうか。歎異抄の中で親鸞はいう。人を傷けたくなくても、傷つけなくてはならないような条件のもとに追いこまれて、傷つけてしまうこともある。戦争や

交通事故の場合などである。また、人を傷つけたことがなくても、それは自分がよい人間であり、傷つけようと思わないからではなく、そのような条件の中に追いこまれなかつただけである、と。

人間とは、まことにそのように、自分の思うとおりにすべてなしとげられるというものではないのではなからうか。望まないこともしてしまう、ということがあるものなのではなからうか。勉強しようと思っているときでも、テレビの面白さの方にひきずられてしまうような弱さを持ったものではないだろうか。

そうだとすれば、自力の修業できとりに達することができると思うのは、人間がもろもろの事務とのかかわり合いのもとにあること、人間が限りあるものであることをよくよく見きわめないために生じた考えではなからうか。

人間はもろもろの事物とのかかわり合いのもとにあり、それらによって生まれ、成長し、変化し、消えていく、そのようなあり方ですべては存在する。それは宇宙を貫く法則であり、大きな力である。それはわれわれに生を与えている力でもある。われわれは、どんなに自分の望まないことが起こっても、この大きな力にさからうことは不可能である。この存在のあり方に、心から自らを任せきって生きるほかはない。そこに、念仏さえも、わがはからいに申すものでなく、弥陀の慈悲によって言わせてもらうのだ、という、絶対他力の意味があるであらう。

5. 悪人正機 ② 仏法とわれわれとの関係を以上のようにとらえるとき、人間の有限性を自覚した、したがって思わざる悪をおかしてしまうこともあるという、罪の自覚をもつ人の方が、善だけを行ない、悪を行なわないことができると考えている人（善人）よりも、大いなる力（仏法）にゆだねざるほかないことを知るのである。したがってそれこそが、救いへの道なのである。

6. 念仏のこころ このように考えてみると、親鸞の念仏は、身も心も仏法にゆだねます、という心の表現としてとらえることができる。このときはじめて、はじめにみた念仏の特殊性を理解することができる。親鸞の念仏の心を通して、われわれも、存在のあり方と自分との関係を、深く考えて

みたい。

〈設問とそのねらい〉

設問1 「他力」という態度は、すべて成りゆきにまかせるという態度になるのだろうか。

(ねらい) 他力、真理にゆだねるということの意味をとりちがえて無気力につながってはなるまい。全文をよく読んで深く考えさせることによりみずら答えを出せるように導きたい。

設問2 悪人正機でいう悪人とはなにか。みずから悪をおかし、罪の自覚を促すようにしてよいのか、歎異抄13条も読んで考えてみよう。

(ねらい) 悪人正機は人間の有限性に気づくところに意味があるので、「本願ほこり」のまちがいははっきりさせておかななくてはならない。歎異抄を読ませることにより、意味を深く読みとる能力を養おうとするものである。

設問3 親鸞のいう弥陀の慈悲とはなにか。全文を読んで感ずるところをまとめてみよう。

(ねらい) われわれの存在をあらしめているものへ目を向けさせる。

〈発展的まとめ〉 親鸞の思想は、キリスト教の原罪とその救いの思想に通ずるものがある。仏教の思想を、まことに深くわれわれに示している。道元の自力といい、親鸞の他力といっても、到達点は変わらないものを持っているが、とくに親鸞は、人間というものを深く見つめる点において、われわれがともに考えてみなければならない深いものを示してくれる。

ただ、他力にまかせるというとき、人間の力の限界内のことまでもなりゆきまかせにしてしまってはなるまい。人間の限界の外のこととは真理にゆだねていくほかはない。しかし限界内のことは、せいっぱい行なっていくのがかく存在せしめられたわれわれの行なうべき道ではないだろうか。親鸞が子の善鸞を勘当したことにみられるような生き方の強さも、ここから出てくる。親鸞が現代の高校生の立場だったら、大学合格を神仏に祈るようなことは、けっしてしないで猛勉強するのではなだろうか。その意味を考えてみたい。

4. 生きるとは学ぶことである — 原典引用・設問中心の扱い方 —
— 道元の人と思想 —

都立墨田川高校 細谷 斉

〈重点的ねらい〉 人生観や世界観の学習に際し、生徒が直面する困難さは、先哲の思想がなかなか現在の自分の意識や問題と結びつけて考えられないことではないかと思う。教師がどれほど熱を入れて授業をしても、退くつそうにただ坐っているだけの生徒は、先哲のあまりに厳しく高潔な生涯や高度な理論に圧倒され、理解の手がかりがつかめなくて茫然としているという様なことがあるのではないかと思うのである。そこで先哲といえども私達と別種の間人ではなく、日々に悩み悪戦苦闘をしながら自己の生の充実を求めた者であることを先づ理解させたい。峨々たる山の如くに聳え立ち、容易な理解を許さぬ哲学・宗教の理論や教説も、それを自らの内に求めた者にとっては、決してひからびた抽象的なものではなく、日に自己が革新され向上して行くようなまさに主体的な真理であることを考えさせたい。ここでは道元が何故に禅の中に自己の生命活動の心髄を求めて行ったのか、禅の中に何を発見し、道元という人がどのように変りながら自己を確立して行ったのかを考えてみたい。指導の方法は様々あろうが、原典引用の指導事例を考えてみた。正法眼蔵随闡記は倫社の指導の中の不可欠の古典であり、全文を読みたいと思うが、せめて抜粋をプリントして読ませたいと思う。

〈指導内容の具体的事例〉 1 道元と禅 道元と言えば禅であり、禅といえばわが国の場合道元である。禅とは何か、それはじっと静座することによって、釈迦牟尼仏陀が求め得たのと同様の体験的真理を掴むことであるといわれる。禅は以心伝心であり、見性成仏である。自分の中に潜んでいる仏性をひきずり出して、自分が仏そのものになることがその眼目である。大事なことは禅は体験的な真理であり、単なる知的理解だけで解ってしまうようなものではないことを覚悟しなければならない。2. 無常心と出家—道元は何故僧となり出家したのであろうか—〇悲母逝世の時、遺囑して曰はく「出家学道して、我が後世を訪(弔)ふべし」と。祖母姨母等養育の恩犬も重し、

出家修行して、彼の菩提を資けんと欲す、慈母の喪に過ひ、香火の煙を觀て、潜に世間の無常を悟り、深く求法の大願を立つ（三祖行業記）○我れ始めてま
① さに無常によりて聊か道心を發し、終に山門を辭して遍く諸方を訪ひ、道を
修せしに、建仁寺に寓せし中間、正師にあはず、善友なき故に、迷て邪念を
起しき。教道の師も先づ學問先達にひとしくしてよき人と成り、國家にしら
れ天下に名譽せん事を教訓する故に、教法等を學するにも、先づ此の國の上
古の賢者にひとしからんことを思ひ、大師等にも同じからんと思ひき。因に
高僧伝、統高僧伝を披見して、大唐の高僧・仏法者の様子を見しに、今の師
のおしえの如くにはあらず。亦我が起せるやうなる心は、皆經論伝記等には
いとひにくみけりと思ひしより、やうやく道理をかながふれば、名聞を思ふ
とも、当代下劣の人によしと思はれんよりも、只上占の賢者、向後の善人を
はづべし。ひとしからんことを思ふとも、此國の人よりも唐土天竺の先達高
僧をはぢて、彼にひとしからんと思ふべし。乃至諸天冥衆諸仏菩薩等にひと
しからんところそ思ふべけれと。この道理を得て後には、此の國の大師等は土
瓦の如くにおぼへて、從來の身心皆あらためき（隨問記） 大疑問 ○顯密
の二教共に談ず、本来本法性、天然自性身と。若し此くの何くならば、則ち
三世の諸仏、^{とん}甚に依つてか更に發心して菩提を求むるや（建勸記）（顯教や
密教の大乗仏教の立場では人間は生れながらに理想的な人格者になりうる素
質をもっており、元來完成された人格體であると教えている。それならば歴
代の伝達は何故志を立てて真理を求めて修行したのか）この疑問に対し榮西
は次の様に答えたという。「三世の諸佛有ることを知らず、狸奴白牯、^{ひつ}つて有ることを知る」と。

②
3 入宋求法—修業中の二つの衝撃 ○1223年道元一行の船は宋の慶元府の港に停泊していた。一人の禪僧が日本船に椎茸を買いに来た。老僧は阿育王山の典座（禪寺の炊事の責任者）であった。若い（23歳）道元は質問をあげた。話がはずんだので、道元は老僧に一泊をすすめひきとめようとした。しかし老僧は自分が帰らないと明日の供養（食事を作ること）にさしつかえると言つて断つた。そこで道元は「あなたがいなくても食事位は

誰かが作るでしょう。高齢のあなたなどは何故典座などをやっていて、坐禅に専念しないのですか」と言った。すると老僧は大笑いして言った。「外国のお若い方、あなたはまだ弁道（仏道の修業）の何であるか、文字（仏教の教え）の何であるかを御存知ないようだ」と言った。この言葉を聞いて道元はハツと気がついたという。そして質問した。如何にあらんか是れ文字、如何にあらんか是れ弁道と（典座教訓） ○天童山で修行していた時のことである。一心に読書していた道元は、西川出身の一僧から質問を受けた。「語録を見てどうする」「古人の行ないを知ろうと思ひまして」「知ってどうする」「郷里に帰って人々を教化したい」「なんのために教化するのだ」「人々を利益し救うためです」「とどのつまり、それが何になる」（随聞記）

4. 身心脱落—道元が体得した悟りとは何か—①師天童如浄の教え 「仏祖の坐禅と謂ふは、初発心より、一切の仏法を集めむことを願ふ。故に、坐禅の中に於て、衆生を忘れず、衆生を捨てず、乃至、昆虫にも常に慈念を給して、誓って済渡せむことを願ひ、有らゆる功德を一切に廻向す。是の故に、仏祖は常に欲界に在って坐禅弁道す。世世に諸の功德を修して、心の柔軟なるを得ればなり」「仏仏祖祖の身心脱落を弁肯する、乃ち柔軟心なり」「参禅は身心脱落なり。焼香・礼拝・念仏・修機・看経を用ひず、祇管に打坐するのみ」「身心脱落とは坐禅なり。祇管に坐禅する時、五欲（財・色・飲食・名・睡眠）を離れ、五蓋（貪欲・瞋恚・睡眠・掉悔・疑）を除くなり」

②道元の身心脱落 ある早暁の坐禅中、一僧が居眠りしているのを見て、如浄が「参禅はすべからく身心脱落なるべし、只管打睡して、^{なに}什麼を為すに堪えんや」と大喝し警策を加えたのを聞いて、道元は豁然として大悟（悟り）を得たという。「天童脱落の話^をを聞得したるに由つて、仏道を成ず」（永平広録）

③帰国 如浄の別離の言葉「汝異域の人なるをもつてこれを授けて信を表す。国に帰つて化を布き、広く人伝を利せよ。城邑聚落に住することなかれ。国王大臣に近づくことなかれ。ただ深山幽谷に居りて一箇半箇を接得し、吾が宗をして断絶致さしむことなかれ」（建記）道元の帰国の弁

○天童先師に見えて、当下に眠横鼻直なることを認得して、人に瞞かれず。

便乃ち空手にして郷に還る。所以に一毫の仏性なし。…朝朝日は東より出て、夜夜日は西に沈む。雲取つて山骨あらはれ、雨過ぎて四山低し、（永平広録 5. 道元の教え ①坐禅・仏道とは何か、自己とは何か ○仏道をならふといふは自己をならふなり。自己をならふといふは自己をわするなり。⑥ 自己をわするるといふは、万法に証せらるるなり。万法に証せらるるといふは、自己の身心をよび他己の身心をして脱落せしむるなり。○自己をはこびて万法を修証するを迷ひとす、万法すゝみて自己を修証するは悟りなり、（正法眼蔵現成公案）○ただわが身をも心をもはなちわすれて、仏のいへになげ入れて、仏のかたよりおこなわれて、これにしたがひもてゆくとき、力をも入れず、こころをもついやさずして、生死をはなれて仏となる（同上、生死）○この法は人々の分上にゆたかにそなはれりといへども、いまだ修せざるにはあらはれず、証せざるにはうるることなし（同上・弁道話）○仏法の為に仏法を修す、乃ち是れ道なり（学道用心集） ②学道者の生き方 ○学道の最要は坐禅これ方一なり。しかあれば、学人は^⑦祇管打坐して他を管することなかれ。仏祖の道はただ坐禅なり。他事に順ずべからず ○学道の人自解に執することなかれ ○学道の人人情を棄つべきなり。人情をすつるといふは仏法に随がひ行くなり ○学道人は先ず須く貧なるべし。財おほければ必ず其の志を失ふ。貧なるが道に親きなり ○古人の云く、朝に道を聞いて、夕べに死すとも可なりと。いま学道の人も此の心あるべきなり ○学道人は、ただ明日を期することなかれ ○学道の人、須く寸陰を惜むべし。露命消やすし。時光速かにうつる。暫くも存する間余事を管することなかれ。ただ須く道を学すべし ○学道の人、たとひ悟りを得ても、今は至極と思ふて行道をやむることなかれ。道は無窮なり。さとりてもなほ行道すべし（以上、正法眼蔵随聞記より） ○道元の歌、本来面目 春は花夏ほととぎす 秋は月 冬雪さへて冷しかりけり

〈設問とねらい〉

①道元は母の遺言をどのように受けとめ、何を思い立ったのか考えてみよ。

〈ねらい〉道元の回心の事実と求道心について考えさせる

②榮西は何と返事しているのか考えてみよ。

〈ねらい〉仏道の真理は単に頭の中の理論としてわかるようなものではないことを考えさせる。観念と現実の違いも指摘する。

③この時道元は何に気がついたのか、とどのつまりそれが何になるとたたみこまれて、道元は何を思ったであろうか、考えよ。

〈ねらい〉道元の思案と直観を追体験的につかませたい

ww

④柔軟心とは何か、身心脱落とは何か、考えよ。⑤眼横鼻直なることを認得して空にして郷に帰る、とはどういうことか考えよ。

〈ねらい〉禅とは何か、道元が体得したものは何かについて考えさせる

⑥仏道をならふ、自己をならふ、自己を忘れる、等の言葉の意味を吟味せよ。この一節は道元禅の心髓を表現したものである。何度も読み、各自胸の中で道元と対話してみよ。

⑦道元は何故これほどまでに厳しい修行を説いているのか。道元には世俗の欲望（特に名誉欲や性欲）は無かったのか、それらをどのようにして克服したのか、資料をよく読んで考えよ。また修証一等（如）とはどういうことか調べてみよ。

〈ねらい〉道元の激しい求道心と実践を、出来るだけ生徒一人一人の現在の勉強心や向上心に関連づけて考えさせたい。いくらかでも道元が自分のものになるように。

〈発展的まとめ〉 道元禅の真理を理解しそれを授業するというのは、私には出来ないことであり、また不可能な事だと思う。道元の生き方とその人物像を知るだけでも実に有意義な勉強であると思うのでこの点に焦点をあてて指導したい。激しい情熱をもって勉強しなければならないこと、学ぶことが最も大切なことであることを理解させたい。主体的な真理をつかみ実践しなければ自己というものが真に生きることにはならないことを訴えたい。

5. 近代日本の萌芽

—先哲の著作や言行中心に—

都立羽田工業高等学校 吉 沢 正 晶

〈重点的ねらい〉 明治以後の西洋文明輸入の動きに先立って、実は既に幕末に、鋭敏な先覚的思想家が出ている。それらの思想家たちの何人かは、単に理論的な理論家にとどまらず、全人格的体験に本づく表現を残している。これらの著作や言行の一部にふれて、主体的体験的な人格形成や哲学的なものの考え方の育成を目ざしてこのテーマを設定する。それら先哲の著作のいくつかをあげれば、佐久間象山^{せいけん}「省儉録」／「吉田松陰集」／「西郷南洲遺訓」／「氷川清話—勝海舟自伝」／「海舟座談」などがある。これらの中から、自己の人間形成の課題について考えさせる上で、適切なものを抜粋して史料教材とするか、またはその現代語訳を用意して扱う。

〈指導内容の具体的展開〉

〔佐久間象山(1811~1864)〕—「東洋の道德と西洋の芸(技術)と」 象山は幕末の最もすぐれた洋学者といわれ、西洋文明を導入する発端をひらいた思想家である。当時の時勢から、どうしても西洋諸国に対抗するためという発想をもったが、固陋な攘夷思想を批判して、西洋の事情を把握し、その科学技術を取り入れて、東洋の精神文明に加えようという考え方を早くより公然と表明した。その行動には人々の誤解を招く点もあったが、その基底には、広くまた真摯な学究の心があり、また静かに自己を反省する心があった。その言行には東洋の古典「孫子」や「孟子」の影響が強うかがえるが、また自然科学的、合理的な思考方法が加わっていることも見のがせない。

(史料1) 心には走作^{そうさく}を戒^{註(一)}む。 註(一)はしりたつこと

(史料2) 格物^①の天地造化^②に於けるは却って易く、人情世故^③に於けるは却って難し。

(史料3) 凡そ書^{およ}を読むには、すべからく熟誦^④すべし。然らずんば基だ受用なし。 註(二) 益

(史料4) 東洋の^{註(三)}道德と、西洋の^{註(四)のこ}芸術と、^か精粗^か遺さず、^{註(五)}表裏兼ね^{註(六)}該ね、^た因りて以て民物に^{たく}沢す。^{註(三)}科学技術をいう ^四精神的と^五物質的 ^六両方をあわせること ^(六)何事にもよく行きわたって一つに合せること

(「^{せいけん}省録」より)

西郷南洲 (1827~1877) — 至誠で貫ぬく道 大久保と共に幕末から維新にかけての薩摩藩の政局に指導力を発揮し、ことに西郷の人生にも、幕末維新の日本の政局にも大きな意味をもつ勝海舟との会見、江戸無血開城にいたる事業には、西郷の人間としての修練と、そこに成った高度な生きた哲理があった。困難な社会的局面に当たって、これを打開し改革していく人間的能力はどこからくるのだろうか。机上の学問を活用する方法的な知見が、西郷にはいつか養われていた。「世間は^い活きている、理くつは死んでいる」と勝海舟も語っている。人を知る、という点で、敵味方の立場にありながら、よく互にその人を知り得ていた者として、勝と西郷の両人の例は、人類史上めずらしいものであろう。人格の形成ということを生きた芸術に喩えらんとするならば、このような人間の傑作はどのようにして出来たものなのであろうか。(史料1) 物事は大小を問わず、正道を^ふ踏み至誠で貫ぬき、いつわりの^{はか}謀りごとなどを用いるべきではない。

(史料2) 道は天地自然の物であるとすれば、西洋といえども決して別ではない。

(史料3) 道は天地自然の道であるから、学問研究の道は敬天愛人(天^{うや}敬い人を愛す)を目的とし、身を修めるには克己^{こくき}で終始せよ。己れに克つ^こことの究極の成果は「勝手な心を持たず、無理おしをせず、執着をせず、我を張らない(意なく、必なく、固なく、^が我なし)」(論語)という。

(史料4) 平生、道^ふを踏まない人は、事に臨んで狼狽^{ろうたい}し、処理ができないものである。たとえば近隣に出火があったとき、平生、心の処理がある者は動揺せず、始末もよく出来るものである。平生、心の処理ができていない者はただあわてて、なかなか始末どころではないものだ。それと同じで、平生、道^ふを踏んでいる者でなければ、事に臨んで策は出来ないものである。

(史料5) 作略は平生は致さないものだ。作略をもってやったことは、その^{あと}迹を見れば善くないことが判然として、必ず悔いがあるものだ。ただ、いざという時には作略もなくてはならぬ。しかし平生、作略を用いれば、いざという時には作略は出来ないものだ。

(史料6) 自分が賢^{かしこ}くなるとうという志がなく、古人の事跡を見て、とても企^{ひきよう}て及ばぬことだというような心ならば、それは卑怯である。……誠意をもって聖賢の書を読み、その人生に処する心を身に体し心に験する修行を致さず、ただこういう言、こういう事というだけを知ったとしても仕方のないものである。私は今日、人の論を聞くとき、どれほどもっともなことを論じたとしても、人生の処し方に心が行き渡らず、ただ口舌の上だけならば、少しも感心はしない。真にその人生の処理のつく人を見れば、実に感じ入るものである。

(「西郷南洲遺訓」より現代語訳)

〈設問とそのねらい〉

〔佐久間象山〕

設問1. (史料1)を読み、孟子の「放心」の意味とも参照して、日常の自分の心の情態について考え、またその処理をどうするかのかくふうを述べよ。
(ねらい) 先哲の生き方を単に理解するまでで終らず、さらに自分の生き方の上で、それがどう響いてくるかを考えさせ、外物に心を奪われるだけでなく、内省という方向にも関心をもたせるようにする。

設問2. 下線①、②、③の語句につきその意味を調べ、(史料2)の全文をよく読んで、「倫理・社会」で、われわれが学習することは一口にいつて何であるかを再確認しよう。

(ねらい) 「物理」「化学」などの学習に比して、「倫理・社会」の学習の意義を再確認させ、人間や社会についての思索を深めさせる。

設問3. (史料3)を読み、読書の意義につき、各自の経験から、クラスで話し合い、どんなものがどう読まれているか、まとめてみよう。

(ねらい) 読書によって思索を深める意義を経験的に認識させるようにする。

読書課題などについても、ここで指導を加える。

設問4. (史料4)を読み、また象山の項の前文を参考にして、幕末の象山の思想のなかで、西洋文明の受容のしかたはどんなものであったか、5行以内にまとめてみよ。

(ねらい) 思想的・論理的な文章を読み、考え、また表現する力を養う。

[西郷南州]

設問1. (史料1)～(史料5)の全文をくり返し精読して、西郷が「道」としていることはどういうことか、史料の文からまとめ、自分の解釈を述べよ。

(ねらい) 古典など、先哲の著作に忍耐強く当たり、その意味を読みとり、それらに関する自分の考え方を表現する力を養う。

設問2. (史料3)の中で、身を修め、心を処理する方法として、西郷はどういう方法をとっているか、それを示す語句を指摘せよ。またその用例を論語の中に求めて、その意味を調べよ。

(ねらい) 上に同じ。

設問3. (史料6)をくり返し精読して、「体験」の本当の意味につきまとめ、またそれにつき自分の考え方を述べよ。

(ねらい) 上に同じ。また知識だけでなく、体得する方向に指導する。

〈発展的まとめ〉 先哲の人格の発露とみられるような古典などをくり返し精読含味することがこの課題であり、単なる知的理解にとどまらず、自己の主体的自覚的態度と、その能力を養うことを主眼とし、教師と生徒との対話をいくらでも発展させられるであろう。「倫理・社会」の内容の各分野に照らして、話題をいろいろに発展させ、思想の源流、現代と思想、日本の思想の中で、関連することがらを適宜に復習をもかねてとりあげることもできよう。

6 新しい人間像を求めて —先哲の思想中心の扱い—
—福沢諭吉を通して—

都立江戸川高等学校 佐藤哲男

〈重点的ねらい〉 先ず基本的に、日本における近代的自我の追求という視点に立つ。そこで福沢が自我における、より外郭的なものの変革を旨としたとして見て行きたい……内村との関連において。次に近代日本の先覚者たる福沢か、何を課題として取り組み、それをどのように解決しようとしたか。昭和の現在の状況下におけるわれわれが課題への取り組みに当って、彼を批判しつつも学んで行きたい。

そこで福沢が取り組んだ課題として次の3点をあげたい。

- ①、人間の平等の自覚のもと封建制との戦いから個人の独立自尊の高唱。
- ②、その個人に内容を与える「実学」の提唱と反儒学の態度、合理主義、文明開化への志向。
- ③、彼が苦慮したところの「一身の独立と一国の独立」官民調和、さらに問題とさるべき脱亜への傾斜について。

これらのポイントは近代日本の歩ゆみと対応させつつ、その得失や福沢の思想の限界なりを考えさせたい。最後に補足として、無神論的、また二面的とも見られる彼の人間観について内村のより内面的宗教的人間観と対比しつつ考えさせたい。

〈指導内容の具体的展開〉 一般的にいてグループによる発表学習が興味があり効果的であると思われる。日本の思想の中での近代思想という位置づけで、具体的には福沢グループ、内村グループ等となる。福沢グループの作業内容としては、「学問のすすめ」「文明論之概略」「福翁自伝」の原典にあたらせたい。とくに「自伝」の方は、少年時代の色々なエピソードが共感をよぶであろうし、上野の山の彰義隊の戦いの状況下、平然として福沢が熟で授業していたその心意気は学問するとはどういうことか、という問いかけへの答えとして考えさせ、かつ生徒が、毎日学習する、その学習の意義を認識させるよすがともなろう。

1. 封建との戦い、天賦人権。 「私のために門閥制度は親の敵でござる」^{かたき}とは「自伝」の中での福沢の痛烈な呼びである。父百助は才能をもちながら「封建制度でチャント物を箱の中に詰めたような秩序の中で45年の生涯を空しく不平をのんで世を去」ったのである。その封建制度から脱却して新しい人間像を追求するに当っては、「天は人の上に人を造らず……」という人間の平等を自覚することが不可欠の前提であった。福沢にとって先ず第1の課題は封建制度の打破であり、当時におけるいわば反体制的行き方の根拠となったものかこの「天賦人権」の思想であった。それは封建的な思考行動にならされた人々には強烈なひびきをもって受け入れられた。

福沢自身、「自伝」にあるように、封建のワクを破って個人の才能を生かす道は坊主になる位しかなかった。しかし変革の時代状況と彼の努力、果敢さによって封建のワクを破って行く、蘭学修業、英学自習から海外渡航を経て彼は成長し世界的視野へ目を広げて行った。後進の日本を発展させるには？それは国民1人1人が「独立自尊」の気概をもつことであった。

2. 合理的精神による実学。 自由な個人、独立自尊の個人に内容を与え裏づけするものが空理空論でない「実学」である。実学というと何か卑近な、インスタントな感じを受けやすいが、彼は適塾^②における「目的なしの学問」が役立ったという。そこで「学問のすすめ」に「学問とは、唯むづかしき字を知り、解し難き古文を読み、和歌を楽しむ詩を作るなど、世上に実のなき文学を云うにあらず……専ら勤むべきは人間普通日用に近き実学なり。」とあり、日用に役立たない虚学を排し合理精神に基づく西洋文明の摂取を主張している。これによって佐久間象山の、「東洋の道德、西洋の芸術(技術)の発想は乗りこえられることになる。さらに先進西洋と後進東洋との大きい差は、無形においては独立心で、有形においては数理学であるとし、物理化学、天文、地理の分野に啓蒙的活動を行なった。

以上のような学問によって彼は新しい人間の価値観を見出し、この学問によって独立自尊が達せられるというのである。

3. 民権か国権か………国権への収束。明治の多くの自由民権家たちが真剣に取り組んだ課題か、民権と国権の調和共存であったといえる、またこの問題のむづかしさによって何人かが転向、右傾化して行ったのである。

福沢も「一身独立して一国独立す」と主張し、十分に学問を身につけた独立自尊の個人かその権利を行使して活躍することによって一国の独立も可能であり、国権の伸長とも一致するというのである。「国中の人民に独立の気力なきときは一国独立の権義 伸ぶる能わず」、とてる点にわたり悪いことがおこると指摘している。しかし国内の人民の平等とともに。反面に国外に目を転ずると、「一般にヨーロッパ、アメリカの諸国は富んで強く、アジア・アフリカの諸国は貧にして弱し、されども貧富、強弱は国の有様なれば、もとより同じかるべからず。しかるにいま、自国の富強なる勢いをもって貧弱なる国へ無理を加えんとする」という、西欧列強の植民地獲得競争は根強い対外不信を生んだ。

その結果、文明化→西欧化の内容が富国強兵、対外強硬の主張となり 従って国家的統一の要求のため自由民権はおさえられることになる。天賦大権、独立自尊、実学すべて一国独立に収束される、そして福沢は自由民権の激化に対して「官民調和」の提唱というふうに変化して行った、そこに近代日本における悲劇が見られる。さらに彼は明治18年「脱亜論」を発表したが、そのかげには彼の反儒学、中華思想への反発が見られる。その中国蔑視の姿勢はそれ以来、日本の政府内に一貫して流れる形となったが、現在ではどうであろうか。

4. 福沢の人間観。………内村との連関を兼ねて。福沢における「天」の概念は、東洋的絶対者、宇宙の法則としての天とともに西洋における Natural law ことに自然主義的要素が強い。その人間観にはかの独立自尊の高唱とともに、「うじ虫」的人間観が共存している。人生をうじ虫にたとえた発想は日本の伝統的土着の無常観がその根底に横たわると思われる。

また、少年のころの偶像否定のことや「時事小言」におけるキリスト教の否定は日本的人間中心の無神論者といえよう。

〈設問とそのねらい〉

設問1. 下線①「新しい人間像」とはどんな人間像か、封建的人間と対比させて具体的にのべなさい。

(ねらい) 近代的自我のポイントをおさえ、とくに日本における近代人の出発をその原点においてとらえ、その後の歪曲を意識づける。

設問2. 下線②「個人を独立自尊させる」ためにはどんな学問が必要か、またそれはなぜか。

(ねらい) われわれが現在「学ぶ」という意義を明確にする。また福沢の時点における必要な学問と現在われわれが必要とすべき学問について話し合いさせる。

設問3. 下線③「一身の独立(民権)と一国の独立(国権)」は矛盾なく調和させられるか。

(ねらい) 原則的にその両者は調和すると見た福沢が、人民の抵抗権と国権のジレンマから官民調和の提唱などへなぜ変化せざるを得なかったか、彼がおかれた状況とともに考えさせる。さらに彼の脱亜の姿勢について検討させる。

〈発展的まとめ〉

先哲といっても福沢はごく身近な思想家である。福沢の思想なり行動を評価するという作業とは別に、福沢を通して何を学ぶかという視点が大切であろう。現在の状況の中では、ともすれば彼を単なる資本主義体制の擁護者としかとらえない傾向がある。今一度、福沢が取り組んだ課題にかえる。

現在は断絶の時代といわれる、しかし幕末より維新への変革期における断絶はもっと亀裂が大きいのではないか、その断絶をどのように彼が乗り越え、何を彼が求めたかを考えて行こう。天賦人権、独立自尊、実学などそれを現代的にとらえればどうということなのか。同様に民権と国権の問題についても、また彼の功利主義、自由主義的人間観と、いわば外的に確立されようとする自我の中身は何か、その点に関しては、内村、夏目のところで検討することとなろう。

7. 支えなき自己の不安

—原典引用・設問中心の扱い方—

—漱石「こころ」を通して—

都立鷺宮高等学校 佐々木 誠 明

〈重点的ねらい〉 漱石の日本近代文学史上における位置づけなどについては国語科に譲るとして、ここでは漱石の提起した倫理的な問題についてとり扱う。衆知のように、漱石は近代人の自我の問題を追求したが、作品「こころ」の講読を通じてそれを考えてみたい。近代化の未成熟な日本においては、たしかに自我の解放が^{うた}謳われなければならなかった。しかし、漱石は、その自我を肯定し、主張する究極の地点に、むしろ自我の破綻・崩壊を発見する。いったい、自我の問題性とは何なのか 性来人が自己の自然を拡大するものとして怪しまない自我の伸長という内実にひそむ問題性にシツカリと目を留めさせたい。そしてここから、支えなき自己の不安を真実の問題としてうけとめる主体的な姿勢を養いたいものである。真に生きるためには、自己の深部に潜在する不安を^剔剔して、その正体を明らかにし、ついにはその克服をはからなければならないからである。

◆指導内容の具体的展開、 あらかじめ「こころ」全文を全員に読ませておいた上で、つぎのぼっすいた箇所をプリントして読ませ、設問によって授業を展開する。つまり「原典引用 設問」中心の授業方式である。

1. あなたはまだ覚えているでしょう。私がいつかあなたに、造りつけの悪人が世の中にいるものではないといったことを。多くの善人がいざという場合に突然悪人になるのだから油断してはいけないといったことを。あの時あなたは私に^①昂奮していると注意してくれました。そうしてどんな場合に、善人が悪人に変化するのかと尋ねました。私がただ一口^{かね}金と答えたとき、あなたは不満な顔をしました。……私はいまあなたの前にうち明けるが、私はあの時この叔父のことを考えていたのです。普通のものが^{かね}金を見て急に悪人になる例として、世の中に信用するに足るものが存在し得ない例として、憎悪とともに私はこの叔父を考えていたのです。私の答は、思想界の奥へ突き進

んでいこうとするあなたにとって物足りなかったかもしれません。陳腐だったかかもしれません。けれども私にはあれが生きた答でした。

2. しかし私の動かなくなった原因の主なもの、全くそこにはなかったのです。叔父に欺むかれた当時の私は、ひとの頼みにならないことをつくづくと感じたには相違ありませんが、ひとを悪くとるだけあって、自分はまだ確かな気がしていました。世間はどうかろうとも、この已れは立派な人間だという信念がどこかにあったのです。それがKのためにみごとに破壊されてしまって、自分もあの叔父と同じ人間だと意識したとき、私は急にふらふらしました。ひとに愛想をつかした私は、自分にも愛想をつかして動けなくなつたのです。

3. 書物の中に自分を生理めにするのでできなかった私は、酒に魂を侵して、已れを忘れようと試みた時期もあります。……この浅薄な方便はしばらくするうちに私をなお厭世的にしました。私は爛酔の真最中にふと自分の正置に気がつくのです。自分はわざとこんな真似をして已れを偽っている愚物だということに気がつくのです。……

酒は止めたけえども、何もする気にはなりません。仕方がないから書物を読みます。しかし読めば読んだなりで、打ち遣っておきます。私は妻から何のために勉強するのかという質問をたびたびうけました。私はただ苦笑していました。しかの腹の底では、世の中で自分が最も信愛しているたった一人の人間すら、自分を理解していないのかと思うと、悲しかったのです。理解させる手役があるのに、理解させる勇気が出せないのだと思うとますます悲しかったのです。私は寂寞でした。どこからも切り離されて世の中にたった一人住んでいるような気のしたこともよくありました。

同時に私はKの死因を繰り返し繰り返し考えたのです。その当座は頭がただ恋の一字で支配されていたせいでもありましようが、私の観察はむしろ簡単でしかも直線的でした。Kは正しく失恋のために死んだものとすぐきめて

しまったのです。しかしだんだん落ちついた気分で、同じ現象に向かってみると、そうたやすくは解決がつかないように思われてきました。現実と理想の衝突　それでもまだ不十分でした。私はしまいにはKが私のようにたった一人で淋しくって仕方がなくなった結果、急に所決したのではなからうかと疑がいたしました。そうしてまたぞっとしたのです。私もKの歩いた路を、Kと同じように辿っているのだという予覚が、折々風のように私の胸を横切り始めたからです。

4. 私の胸にはその時分から時々恐ろしい影が閃めきました。初めはそれが偶然外から襲ってくるのです。私は驚きました。私はぞっとしました。しかししばらくしているうちに、私の心はその物凄い閃めきに応ずるようになりました。しまいには外から来ないでも、自分の胸の底に生まれた時から潜んでいるものの如くに思われだしてきたのです。私はそうした心持になるたびに、自分の頭がどうかしたのではなからうかと疑ってみました。けれども私は医者にも誰にも診て貰^らう気にはなりませんでした。

私はただ人間の罪というものを深く感じたのです。その感じが私をKの墓へ毎日行かせます。その感じが私に妻の母の看護をさせます。そうしてその感じが妻に優しくしてやれと私に命じます。私はその感じのために、知らない路傍の人から鞭うたれたいとまで思ったこともあります。こうした段階をだんだん経過していくうちに、人に鞭うたれるよりも、自分で自分を鞭うつべきだという気になります。自分で自分を鞭うつよりも、自分で自分を殺すべきだという考えがおこります。私はしかたがないから、死んだ気で生きていこうと決心しました。

私がそう決心してから今日まで何年になるでしょう。私と妻とは元の通り仲良く暮してきました。私と妻とは決して不幸ではありません。幸福でした。しかし、私のもっている一点、私にとっては容易ならんこの一点が妻には常に暗黒に見えたらしいのです。それを思うと、私は妻に対して非常に気の毒な気がします。

〈設問とそのねらい〉

設問1. 下線①「いざという場合に突然悪人になる」とは、どんな経験をもとにして語られたものか。この経験ののち、先生はどんな人間観を抱くようになったか。またそういう人間感をどう思うか。

(ねらい) 我欲がひとたび牙をむきだすと、人間の魔性が発揮される。その恐ろしさ、自己の弱さとしてシツカリ把握させたい。

設問2. 下線②の「同じ人間」とはどういう人間か。また「急にふらふらした」のはなぜか。

(ねらい) 絶対確実と思われた自信も、良心によるきびしい自省の前には音を立てて崩れ落ちる。自己過信の破綻は人間をどのような状態におとしいれるものであるかを深く考えさせたい。

設問3. 3の文章全体に流れる先生のところを簡潔にまとめてみよ。

(ねらい) 人間は「たった一人」では生き得ない。必ずや一本の支えを必要とする。先生にはいまや生のよりどころとすべきものは何一つない。淋しさ、そして不安におののく人間の実存的姿に注目させたい。

設問4. 先生はどういうところに、下線③のような「人間の罪というもの」を感じたのか。その罪の感じを克服するために死を選んだことをどう思うか。

(ねらい) 人間の罪を先生はどのように考えたかを明らかにし、とくにこれを、生まれた時から有する恐ろしい影としてとらえた自己反省の深刻さに気づかせる。そして絶望のはてに自殺した先生の運命を自己の問題としてとらえ、死以外にいかなる解決の手だてもないものかどうか考えさせたい。

〈発展的まとめ〉 いろいろの視点があろうが、ここでは近代的な自我中心主義のもたらす人間の破局的様相に焦点をあてたい。自我の確立・伸長という課題はきわめて重要である。が、そのなかみをどうとらえるかが問題である。立てたはずの自己が、じつは不安のうちに動揺する自己でしかないことを発見したならば、ひとは愕然としないか。实在主義・現代の思想的課題を学ぶための準備として、避けることのできないのがこの学習である。

事務局より

事務局長 金井 肇

ことは学習指導要領の改訂があり、高校生のさまざまな問題が表面化し、それぞれに特別分科会を設けて研究を進めるなど、平年より多くの問題に直面した。都立高校では会費が都費によることになり、会費納入率の心配で年度当初は悲壮な覚悟で出発したものだ。しかし会費の納入は順調で、事務量はふえたものの、安心して年度末を迎えることができるということは、夢のような気さきする。事務局1年生ということもあって、多忙な1年だった。そのことしの都倫研の事業も、この紀要の編集によって一段落となる。

事務局は、固定化しないでみんなで運営に当たるべきだという、村松前事務局長の発案により、会長校を離れた。そのうえ多事多難だったことしを乗りきってくることができたのは、ひとえに先生方のご協力のたまものである。新しいアイデアをもって研究を組織し、事務局の運営にも献身的にあたられた研究部長の中村新吉氏、事務局次長と同時に高校生問題特別分科会の責任を持っていただいた小川一郎氏、会報担当の中村佑二氏、研究副部長の伊藤駿二郎氏、改訂学習指導要領特別分科会の責任を持っていただいた佐々木誠明氏、御厨良一氏、菊地堯氏、分科会の世話人の先生方、ほか実に多くの先生方によって、みんなの力で盛りたててきていただいた。

例会に参加される先生方にも、新しい顔がふえたように思う。心強いかざりである。この会は、例会に出席されたその日から、平等に、参加された先生方みんなのものだと思う。だからとくに、新たに参加される先生方に、どしどし発言され、積極的に研究活動に参加されるようお願いしたい。

45年11月の全倫研東北関東甲信越水戸大会は、都倫研のわれわれにとっても良い刺激であったと思う。地方の先生方も熱心に高い研究をされている。これからの都倫研を、いっそう、日常の教育実践に結びついたものにしていきたい。そのように、先生方とともに、私がかんばっていきたい。

あ と が き

昨年度は、都内のみならず、あちこちの高校で、高校生のいわゆる“造反運動”が群発したが、本年度は一応表面的には静まりつつあるせい、研究活動が再び盛んに行われることができたようだ。本年度の研究活動は倫社の専門的研究よりも、高校教育全体のなかで倫社の役割を考えなければならないという視点、あるいはいわゆる活動家高校生や三無主義的高校生にどう対応してゆくべきかといった観点を射程に入れて進められた。事態が複雑で混乱すればするほど、倫社担当者や教科の役割が期待されていることを反映していよう。それだけにまた、倫社教育は慎重さと高校教育全体への漏見を要求されてくるのを痛感する。

本年度は平常の分科会活動のほかに、二つの特別分科会が設置され、誠に意欲的な活動がなされた。多摩川緑での分科会合宿による研究、「高校生問題」研究報告書の作成、熱心な研究協議など記憶に新らたなものがある。世話人の方々のご努力に尽くるものである。また、校長や教頭その他の要職にあるの方々からも玉稿を寄せられた。これが無言の教範となっていることに感謝するものである。一方、気鋭の新進諸氏の新鮮な教育感覚が真正直にあふれていて、老成しがちなわれわれを戒めてくれる。学習指導内容はこれまで多く研究されてきた。しかし、本年はそれに加えて、生徒になにをどう問い、どこをどう考えさせるか、それによって、学習のねらいをどう明確化し、達成するか、あるいは学習のねらいを設問によってどう評価づけるかという教室の学習の実際が展開された。それぞれの執筆者が自分の授業の秘中の秘を苦心の末、明らかにされた。それだけに、この紀要はこれを手にするものと再び教室に帰り、教室の授業実践の中で育て上げられることを本懐とするものであろう。

(中村 新吉記)

東京都高等学校「倫理・社会」研究会規約

1. (名称) この会は、東京都高等学校「倫理・社会」研究会といたします。
2. (目的) この会は会員相互の研究によって、高等学校社会科「倫理・社会」教育を振興することを目的とします。
3. (事業) この会は、次の事業を行ないます。
 - (1) 「倫理・社会」教育の内容および方法などの研究
 - (2) 研究報告、会報、名簿などの発行
 - (3) その他、この会の目的を達成するために必要な事業
4. (事務局) この会の事務局は原則として会長在任校におきます。
5. (会員) この会の会員は次の通りです。
 - (1) 正会員 学校またはその他の研究団体に所属して、この会の目的に賛成する者
 - (2) 賛助会員 この会の目的に賛成し、会の活動を援助する団体または個人
6. (顧問) この会に顧問をかくことができます。
7. (役員) この会の役員は次の通りです。任期は1年ですが留任を認めます。
 - (1) 会 長 (1 名)
 - (2) 副 会 長 (若干名)
 - (3) 常任幹事 (若干名)
 - (4) 幹 事 (若干名)
 - (5) 会計幹事 (若干名)
8. (総会) 総会は毎年6月に会長が召集し、次のことを行ないます。
 - (1) 役員を選任
 - (2) 決算の承認、予算の議決
 - (3) その他重要事項の審議

9. (年度) この会の会計年度は毎年4月1日に始まり、翌年3月31日に終わります。
10. (経費) この会の活動に必要な経費は、会費その他の収入でまかないます。
- 会費は次の通りです。
- (1) 正会員 学校または研究団体を単位として年額1,500円
 - (2) 賛助会費 年額 1口 2,000円
11. (細則) この会の規約を施行するについて、幹事会は必要な細則を作ることができます。
12. (規約の変更) この会の規約の変更は、総会の議決によります。

附 記

- 1. この規約は昭和37年11月20日から施行します。
- 2. 昭和42年度総会で、会計年度と会費の変更がみとめられた。

事務局組織内規

S 45. 1. 27 全倫研 共通
都倫研

1. 事務局は原則として会長校におく（都・全倫研とも規約改正の要あり）
2. 事務局組織は下記の通りである。

事務局 長 原則として会長校に所属する

事務局 顧問 歴代の事務局長があたる

事務局 員

- ア 事務局次長（1名）
- イ 研究部長・副部长（各1名）
- ウ 研究調査部（全倫研のみ6名）
- エ 広報係（全・都各1名）
- オ 会計（1名）
- カ 分科会世話人（都倫研のみ、分科会互選、分科会で2名）
- キ 大会役員（大会ごとに委嘱する）

3. 事務局分掌

事務局 長 企画・運営・渉外などの会の実質的な事務にあたり
会長を補佐する

事務局 顧問 同上の目的で事務局長を補佐し助言する

事務局 員 事務局員は各分掌にあって、会の運営を円滑にする
ため局長を補佐する

- ア 事務局次長 事務局長を補佐する。
- イ 研究部 会の年間の研究方針をたて、研究活動全体を運営し紀要の刊行にあたる
分科会世話人は研究部に属し部長を補佐する
- ウ 調査研究部 調査活動の企画・実施・集計・分析等にあたる

エ 広 報 係 会の記録、広報活動、会報・名簿の
作成にあたる

オ 会 計 会の会計にあたる。ただし局長が代
行することもできる

カ 大 会 役 員 事務局長 企画・運営の最高責任を
もつ

庶務・連絡 局長を補佐する

受付・会計 文書配布物、名簿、会
計にあたる

司 会 総合司会、研究発表、研
究討議、懇親会

議 長 総会議長

記 録 会の広報部を中心として
組織。文書記録、テープ
写真

接 待 来賓その他の接待

4. 事務局任期

ア 事務局長は原則として2年とする

イ その他の局員は1年であるが、再任、兼任をさまたげない。

5. 人 選

事務局長の人選は幹事会でみとめられた人事委員会があたる。

人事委員会の人選は、会長と事務局長が、原案をつくり幹事会にはかる。

また会長・局長・顧問は原則として委員会のメンバーに入ることとする。

ただし、事務局員の人選は会員の互選による。

(この内規は昭和45年度以降実施する)

昭和45年度 都 倫 研 紀 要 9

発 行 昭和46年3月20日〔非売品〕
著 者 東京都高等学校「倫理・社会」研究会
代表 徳久鉄郎
印 刷 (有) 照 美 社
東京都中野区中野2-3-5
電話(383)4950・(381)3973
代表 四 条 輝 雄

事務局 東京都杉並区成田西2-6-18
東京都立豊多摩高等学校内
電話(03)393-1331~3
発行者 東京都高等学校「倫理・社会」研究会

